

復
刻

井原要覽
岡山県重要物産同業組合誌抜粹

三十周年記念企画
井原商工会議所

「井原要覧」並びに「岡山県重要物産同業組合誌抜粹」復刻に寄せて



今回、井原商工会議所創立三十周年記念事業の一環として標記の書を復刻すること、致しました。

「井原要覧」は昭和十年、また「岡山県重要物産同業組合誌」は昭和五年の発刊であり、共に戦前わが国の紡織業が全世界を征覇した頃の郷土誌乃至地方産業誌といったものであります。

当時井原市は、井原町、西江原町、高屋町など後月小田両郡に跨る十カ町村に分かれ、夫々独立の行政区画を形成しており、また電報電話局も、旧井原郵便局と高屋郵便局との二局に分かれて併設され、電話交換は夫々手動で行われていました。従って、かゝる環境の下で発刊された「井原要覧」には、旧井原町周辺（井原郵便局の電話管轄区域内）のみの一部の産業記事しか収録されていないことは、やむをえぬこと、存じますが、然しまた、卷末には旧井原町を初めとする近隣町村の企業広告も掲載されており、それによって、戦前の地元商工業者の熱い息吹きが手にとるように生き生きと感じとれます。

また、「岡山県重要物産同業組合誌抜粹」の方は、わが井原市の傳統産業である織物業が、旧高屋町を中心とする「中備織物同業組合」及びそれより分離独立した旧西江原町の「備中物産織物同業組

合」の二つの業者組織により、幕藩体制以来の家内工業的形態から急速に近代的工場生産制へと脱皮していった歴史の一齣を垣間見せてくれます。

わたしたちは、これらの資料から、旧井原町及び高屋町西江原町を中心とするわが井原市が、当時の岡山県西南部地域において、経済的にも文化的にもその據点として如何に大きな地歩を占めていたかを窺知することができると思っています。

爾来幾星霜、戦前から戦後へと歴史の齒車は目まぐるしく回転し、昭和二十八年の前記十カ町村大合併による新井原市誕生という地方自治の一大ドラマを経て今日に至っているわけですが、その幾変遷の間に積み重ねられた産業や文化の年輪は、文中に見られる多くの先達によって培われ、われわれへと受けつがれてきたものであります。

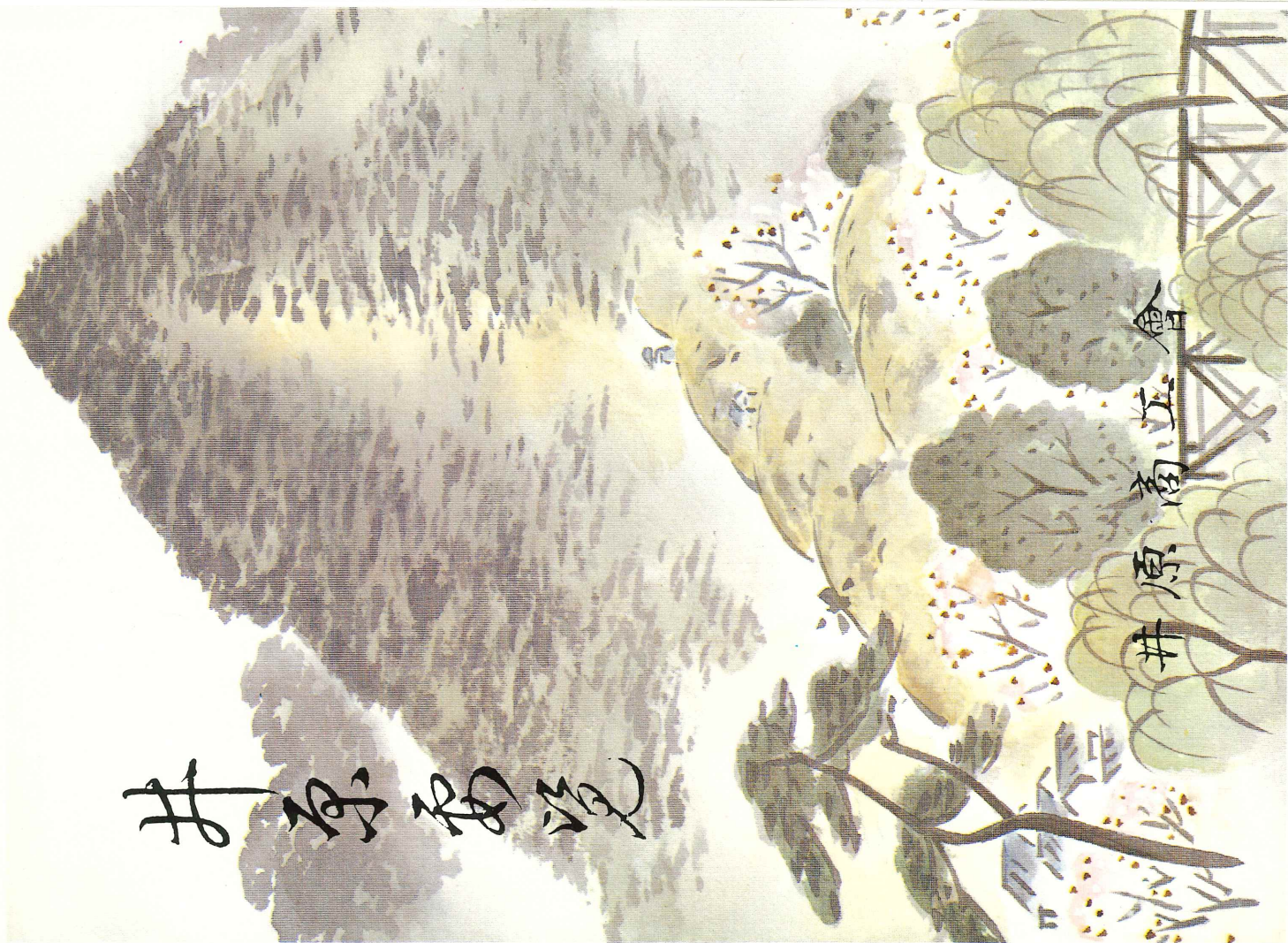
エレクトロニクス、バイオテクノロジー、と時代は愈々変化の速度を速めてまいりましたが、この長い歴史と傳統とそして風土の重層の中にこそ、激しい環境変化にもめげず、柔軟に適應し、生々發展してゆくわが郷土の秘められた活力を見る想いが致すものであります。

終りに臨み、本誌の復刻刊行が井原商工会議所三十周年を飾るに相応しい企画であることを確信するとともに、この小冊誌が多数市民の目に觸れ、郷土の近代史研究の一助となるのみならず、明日の井原市發展のためにも一握の糧とならんことを祈ってやまぬものであります。

昭和五十九年十一月十日

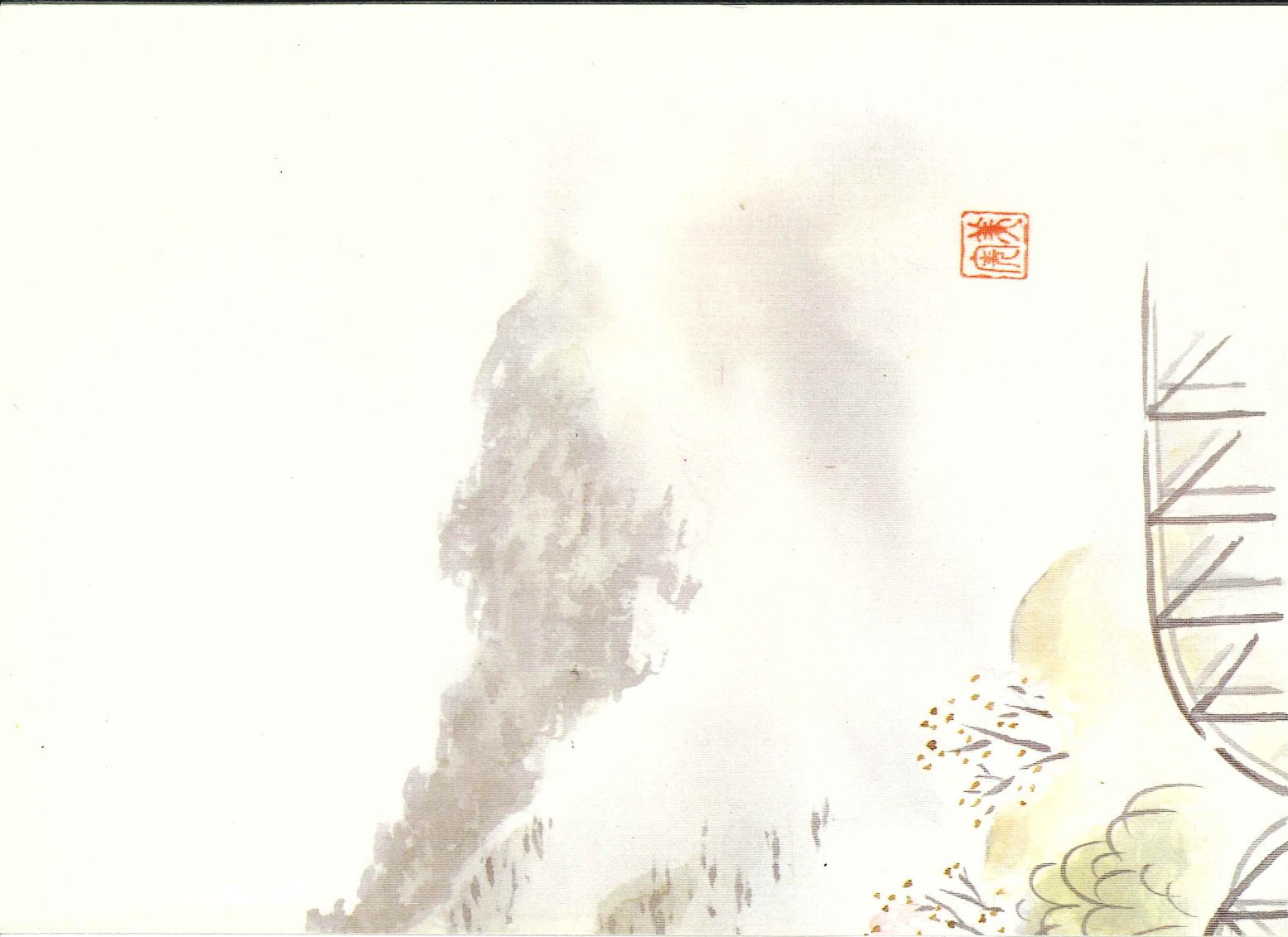
井原商工会議所

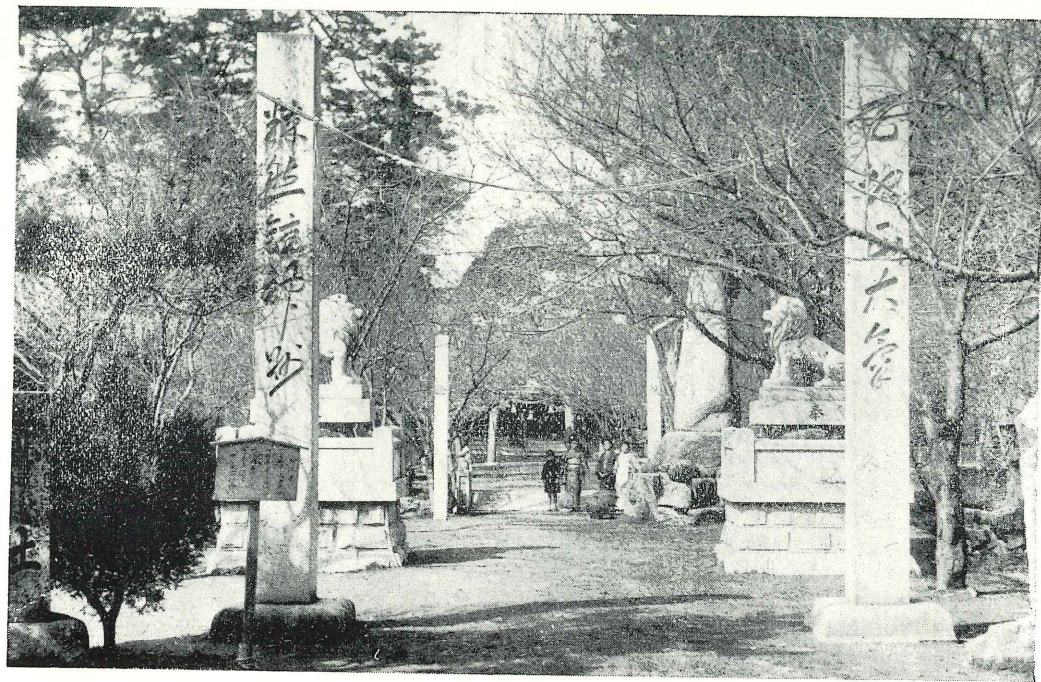
会 頭 大 塚 長 六



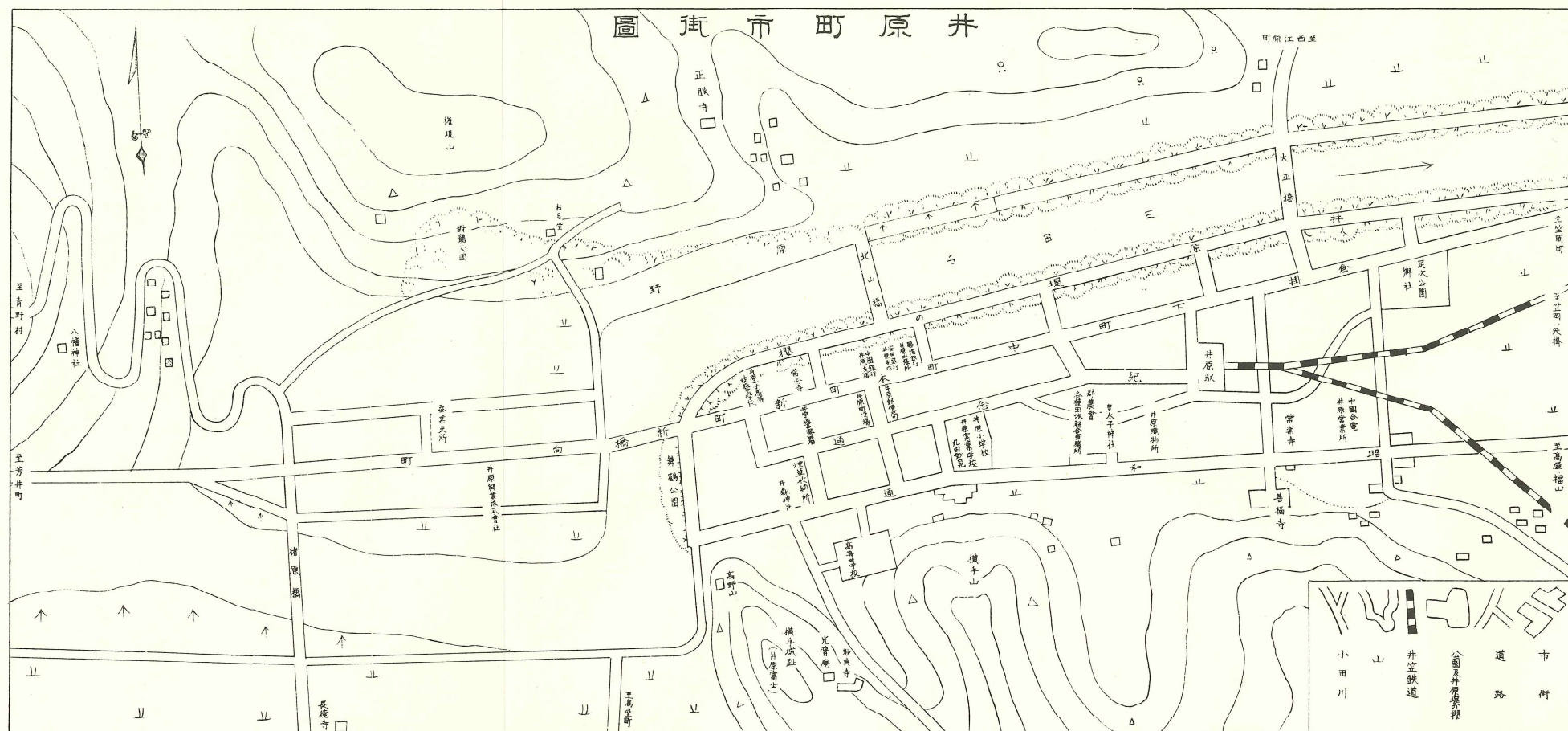
井原西漫

井原西漫會





社 神 山 次 足 社 郷





井原小唄

(尾上柴舟選定
大塚雄水作詞
佐藤吉五郎作曲)

1

春は櫻よ、小田川づつみ
井原少女が、ゆきよの袖に

2

夏の涼みは、新橋たもと
井原小富士に、夜烏啼いて

3

秋は天神、蛇の穴、龍頭
小春日和に、行く人聲が

4

冬は雪つむ、奥道わけて
一夜あければ、また新玉の

郷社神苑も、花のくも
ちらりくると、雪がふる

團扇片手の、やさすがた
はすむ話も、ついしめる

つゞく茸がり、紅葉がり
谷と町とに、こだまする

人出あまたの、年の市
井原暦を、くりかへす

井原小唄

ニ上リ

大塚雄水 作詞
佐藤吉五郎 作曲



3 $\underline{6}$ $\underline{7\dot{1}}$ $\underline{7\dot{6}}$ $\underline{7\dot{1}}$ $\underline{3\dot{1}}$ $\underline{7\dot{6}}$ $\underline{3\dot{6}}$ 7 $\underline{3\dot{6}}$ $\underline{7\dot{1}}$ $\underline{7\dot{6}}$ $\underline{7\dot{1}}$ $\underline{3\dot{1}}$ $\underline{7\dot{6}}$ $\underline{3\dot{6}}$ 7



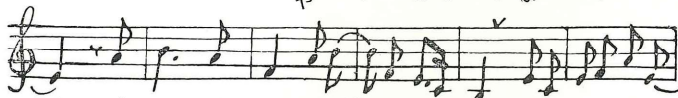
6 $\underline{6}$ 7 $\underline{6\dot{6}}$ $\underline{7\dot{6}}$ 7 — $\underline{7\dot{1}}$ $\underline{7\dot{6}}$ $\underline{4\dot{4}}$ $\underline{3\dot{6}}$ 7 — $\underline{7\dot{6}}$ $\underline{7\dot{1}}$ $\underline{3\dot{1}}$ $\underline{7\dot{6}}$

ハア — は 3は さくろよ — おたがは



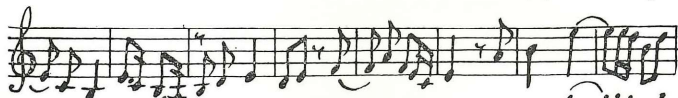
6 $\underline{7}$ $\underline{6\dot{4}}$ 3 — $\underline{3\dot{7}}$ $\underline{1\dot{7}}$ 6. $\underline{1}$ $\underline{7\dot{6}}$ 4 3 07 $\underline{1\dot{7}}$ 6 $\underline{4\dot{3}}$ 3

— 3つ — み — こ — 4お に — はも は 奈 — の — も



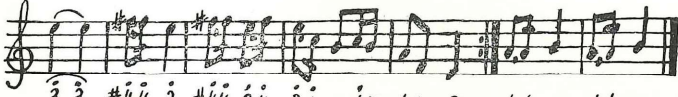
3 6 7. $\underline{6}$ 4 $\underline{6\dot{7}}$ $\underline{7\dot{4}}$ $\underline{3\dot{1}}$ 7 $\underline{3\dot{1}}$ $\underline{3\dot{4}}$ $\underline{6\dot{3}}$

— い は ろ — — — おとめ が ゆき きの —



3 $\underline{1}$ 7 $\underline{3\dot{1}}$ $\underline{7\dot{6}}$ $\underline{7\dot{2}}$ 3 $\underline{2\dot{3}}$ $\underline{0\dot{4}}$ $\underline{4\dot{6}}$ $\underline{4\dot{3}}$ 3 $\underline{0\dot{6}}$ 7 $\underline{3}$ $\underline{3\dot{3}}$ $\underline{7\dot{2}}$

— て — に ち ら — リ ち — ら リ — と ゆき — ち — ち

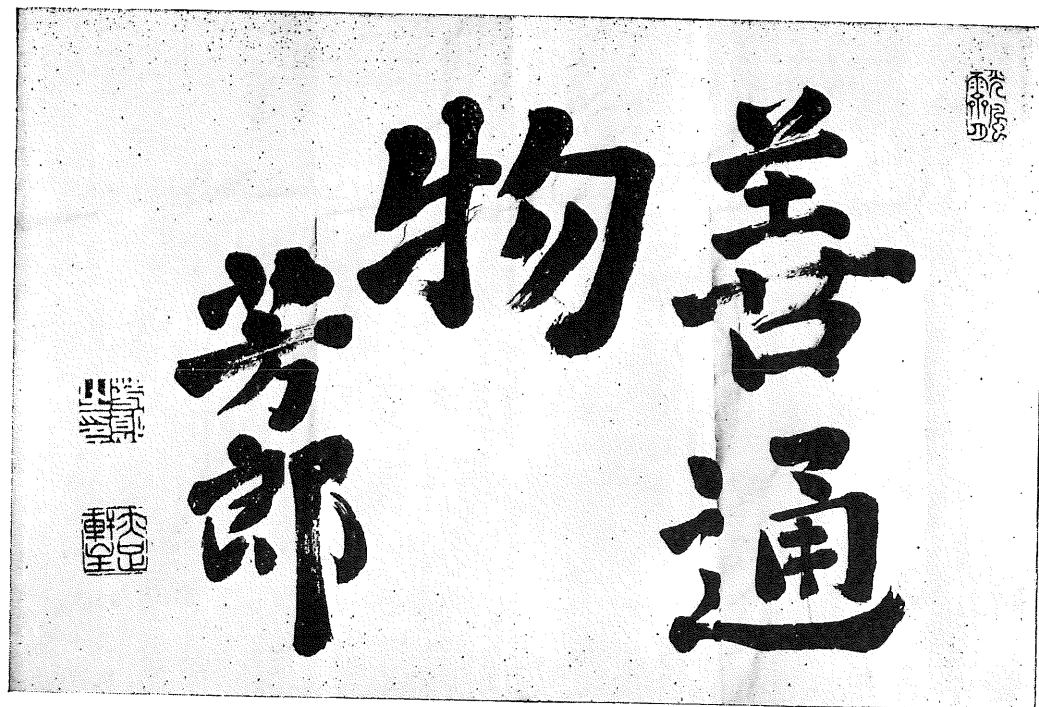


3 $\underline{3}$ $\underline{3}$ $\underline{\#4\dot{4}}$ $\underline{3}$ $\underline{\#4\dot{4}}$ $\underline{3\dot{4}}$ $\underline{3\dot{1}}$ $\underline{7\dot{1}}$ $\underline{7}$ $\underline{6\dot{4}}$ 3 $\underline{6\dot{6}}$ 7 $\underline{6\dot{6}}$ 7

3 —

井原要覽

井原商工會編



字題下閣郎芳谷飯 爵男士博學法

協力

安信書

字題下閣信安久多 事知縣山岡

井原要覽序

余一夜排微恙。朗誦井原要覽。行文流麗記事正確。不覺呼奇叫快。不知夜之更也。之名曰井原要覽。而遠及隣接町村。名之曰後月要覽。亦非過言也。譬之猶觀活動寫真。每一廻轉。忽而沿革。忽而教育。忽而金融。忽而機業。忽而交通。或名勝舊蹟。或先哲遺賢。或言論機關。或商工機關。或料亭旅館。或映畫劇場。每一廻轉千殊萬變。使人不遑應接。實快心洞目。覺微恙去體也。若夫鄉社神苑之櫻井原隄防之櫻。白雲飄飄競艷爭妍埃他日記焉。此爲序

昭和十年歲在乙亥四月

山下秋堂崇撰

井原要覽發刊に就て

從來我が井原町には纏りたる郷土史なく、沿革などは後月郡誌によりて其の一端を知り得るのみ、故に郷土史編纂の要望は多年の宿題として保留されつゝありし也。

會々井原商工會主催にて本年四月十四日を期し、岡山縣商工團體聯合會總會を當地に開くに際し、紀念事業として本書編纂の事を決議し、爾來委員を囑托して之に従事することゝなれり
蒐むる所は町の沿革、町政、産業、教育、交通、通信、運輸、各種團體、人物傳、神社佛閣、名所舊蹟、其他百般の事項に亘り、苟も史實の徵すへき限り、遠く其の起原に遡り現今の狀態に至るまで、細大洩さず之を網羅して、移り行く世態の變遷と興廢の狀況とを眼のあたり見るべく、恰も郷土史と産業史とを兼ねたる如きものとなすべく努めたり。

二百餘年前僅かに百餘戸の一寒村より發程して、現在千五百に垂んとする地方近代的文化の中心市街を構成するに至りし我が井原町の過去現在の過程縮圖とも云ふべきこの一冊子を通讀されたる各位は、一時的のものとせずして永く之を保存し、進み行く我が町の未來に對して直接に間接に一層の期待と同情と注意と關心とを拂はれ、自他共に同榮裨益の一助ともならば、

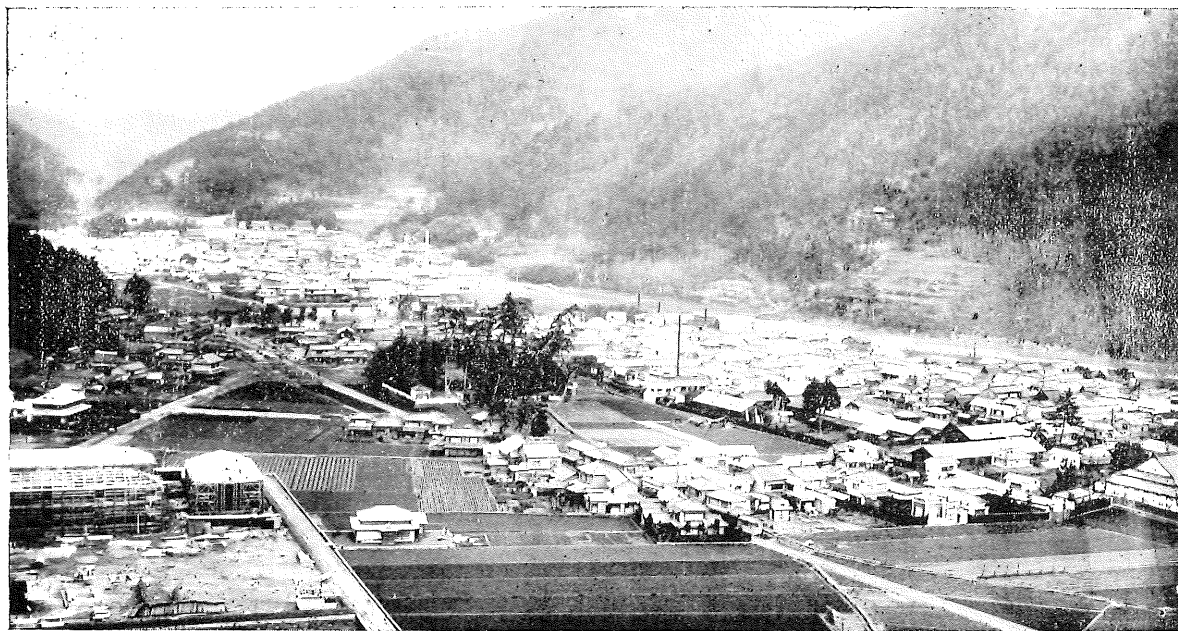
多年の宿望を達すると共に望外の幸福何ものか之に如かんや。

本書編集委員として大塚信男、森誠一、平野恒吉の三氏専ら其の任に當られ、材料蒐集の爲めには長野英一、田中武一、原田甲之の諸氏等を煩はし、非常なる苦心と努力とを以て完成されたることを深謝し併せて官公署初め、各方面並に先輩知己等より考證其他種々の便宜を與へられたることを併謝す。

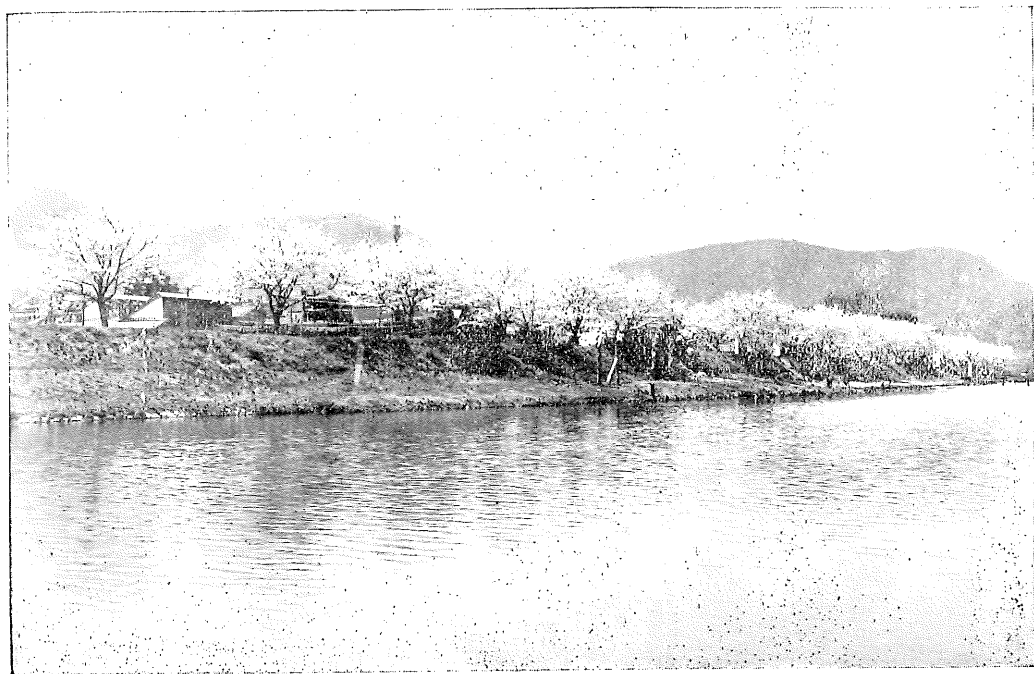
昭和十年四月八日

櫻祭開始の日

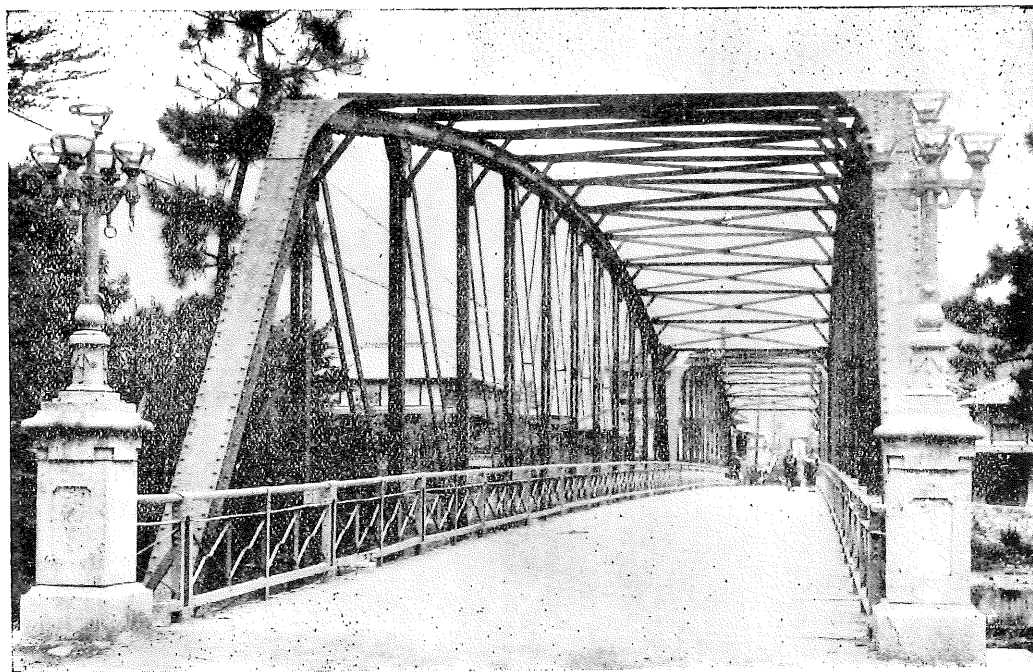
井原商工會々頭 大西儀助



(一 の 其) 景 全 町 原 井



井原隄防の櫻



井 原 新 橋

井
原
要
覽
目
次

一、井原町のアウトライン	一頁
二、井原町の沿革	四頁
三、井原町政沿革及現況一斑	六頁
四、井原町の産業	一五頁
1. 井原の商業	一五頁
2. 井原の工業	一七頁
3. 井原の農業	二四頁
五、金融機關	三三頁
六、官公署	三五頁
七、交通運輸其他	三九頁
八、教育附社會事業	四三頁
九、各種團體	五二頁
一〇、言論機關	六三頁
一一、神社佛閣附教會	六四頁

一二、名勝舊蹟	七八頁
一三、先哲遺賢	八八頁
一四、井原名物	一〇四頁
一五、劇場とキネマ	一〇五頁
一六、旅館料亭カフェー	一〇六頁
一七、井原商工會沿革 附井原商盛會	一〇七頁
會員名簿	一二三頁
記事廣告	一三五頁

一、井原町のアウトライン

井原町は岡山縣の西南部後月郡の首都であつて、戸數壹千五百、人口七千五百、その大部分は商工業者である。

下關から上方に通ずる元山陽國道は、町の南端を東西に貫き、之と十字形をして、笠岡、高山市間の主要縣道があり、市街は悉く之に櫛比して居る。町の裏を流るゝ小田川は源を郡の北部及廣島縣の山地に發して居るので、之に沿ふた道路を利用して、川奥各地は勿論南部沿海地方の物産も、相互に此地に輸送されて、取引が盛んに行はれるので、井原町は古くより傳統的に活氣ある商業地として、何人も肯定さるべき地理的要素を有して居たのである。

交通、通信、運輸の便、殊に特設電話の如きも縣下各地に先んじて架設されたが、就中大正二年井笠鐵道開通後及近來自動車網の擴大により、實に急テンボの發達を遂げ、人口頓に増加、川上郡成羽、高梁、廣島縣山野、油木、豊松、東城方面よりの農林產物、皆この地を経て各地に配給され、京阪神は勿論岡山、倉敷、矢掛、笠岡、福山、尾道、廣島、下關方面よりの取引益々頻繁を極め、愈々商勢に拍車を加へ、何れも近代的の經營振りを發揮するに至つたのである。

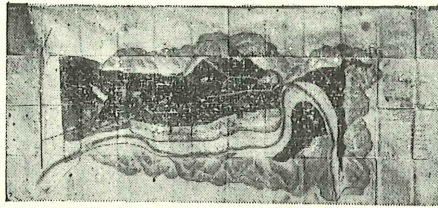
一面古き歴史を有する織物業は、機械工業の發達に連れて、井原町を中心として隣接各地に大小幾多の工場を有し、憂々たる機杼の音と、色とり／＼なる染糸とは、一目して機業地のローカルカラーを發揮し、其製品は内地は勿論、滿鮮、南洋、濠洲等に輸出され、年額殆んど壹千貳百萬圓を突破し、殊に海外向の綿織物としては全國第一と稱するも決して過言でないといふ現状である。

遊覽地としては附近に芳井の天神峽あり、奇勝蛇の穴、飛瀑貳百尺の龍頭、乃至溪谷美の道祖溪がある。殊に春色麗かなるの好時節となれば郷社神苑、井原隄塘、舞鶴公園など數千株の櫻花は朝日に匂ひ、夕陽に映え、蜿々幾十町、小田川の清流にうつる電節の不夜城等、これは／＼とばかりの一大遊覽地であつて、新聞に、ラヂオに、鐵道客の誘致に、今や中國隨一の櫻名所としてその名聲を謳はるゝに至つたのである。

商に工に遊覽に恵まれたる環境と先人の努力とに依りて築かれたる現井原町をスケッチして、茲に一たび之を江湖に贈る。全時に私どもは、遠く永く強く久しく伸びんとし榮えんとする我が井原町の前途に對しては、恰もこの一小冊子が最も低きファーストステップなることを豫言するの大膽さを有するものである。

二、井原町の沿革

井原町は往古後月郡足次郷に属し、現今の小田川は西に向つて流れて居り、其中洲に善念寺といふ大きな寺があつたといふことである。其後堰も堤防も出来、堰の口を「キノクチ」中程を「キバラ」



百六十年前の井原
(大津寄耕一氏蔵)

末を「キズエ」と云つたと云ふ説もある。兎に角足利時代までは茅屋數十戸に過ぎなかつたが、豊太閣朝鮮征伐下向の砌りには、既に百餘戸もあつたと云ふことである。川奥の山地からは芋、午夢、コンニャク玉、松茸などの特産物を持來り、南部の海濱より魚類を運び、毎月五と十の日を以て取引日と定めて、市を立てゝ居たのが井原に於ける商業の始めであつた。徳川時代となつて、代々池田家の知行所となつたが、旗本である關係上江戸芝愛宕下の烏森といふに屋敷を賜はり、代々襲名して池田筑後守修理と稱し、井原には代官を置いて行政上のことを處理させて居つた。安永年間に大火災があり、中央以西殆んど焼失して人民離散し、大に衰頹を極めたが、池田家十代目に長發と云ふのがあり、彼の有名な幕末の俊髦であ

つて、後に外國奉行となり幕命を奉じて佛國に使い、ナポレオン三世と折衝を重ねた人である。(詳細は先哲遺賢にあり) 其の養子福次郎に至つて維新の大改革に際し、一時備前藩の鎮撫となり、明治三年廢藩置縣のため倉敷縣の管轄となり、四年深津縣全五年小田縣に編入せられ、八年岡山縣の管轄となり以て今日に及んでゐる。舊幕府時代のナンセンスとして傳らるゝ所によると、隣接地に一橋公の所領地が澤山にあつた關係上、自領地の產物は凡て自領地にて集散せしむる目的の下に、神戸新町といふのを設け、井原町をオミットしてゐることを物資の集散地としたが、これはホンの一時であつて、維新後は自然の地勢上商權は再び井原に移ることとなつたのである。

かくて人口は年一年と増加し向町の如きは僅々二三十年間に田園化して數百戸の新市街となり、紀念通、驛前通の如きは、大部分大正二年以後に建築されたもので、昭和通の如きは最近の開通であるが、これも累年新市街となるべく資格付けられつゝあるのである。

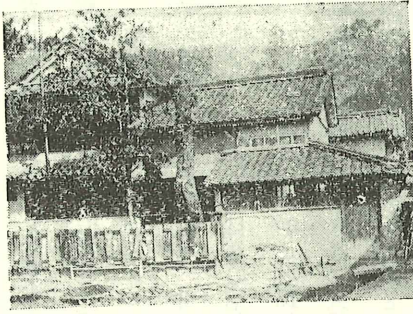
之を要するに、一面の廣野であつた當時より、幾百星霜を経て茲に今日の井原を形成するに至つた譯合であるが、若しも沿革の凡てを目撃し且つ語り得る昭和の武内宿禰があつたと假定するならば、恐らく喟然として其變遷發達の迅速なることを、伸び行く現狀に一驚を喫して、轉た今昔の感に耐へないといふ歎聲を洩すであらうと思ふのである。

三、井原町政沿革及現況一斑

舊幕時代の井原は既掲の如く代官陣屋の所在地で、村政は庄屋年寄及百姓代の三役之に當り、庄屋は官選で世襲的であり、年寄百姓代は古くから村役人の推薦によつて官が任命したものであつた

が文政十一年以後は庄屋も亦村役人の推薦となり、こゝに早くも純然たる自治制を實現した。而して普通の事務は月當番の年寄が之に當り、百姓代は相談役と云つた形で役場を會所と云つてゐた。

維新後は一時備前藩の鎮撫となり、其後倉敷縣、深津縣、小田縣を経て現今の岡山縣となり、庄屋は戸長となり、明治廿二年六月町村割施行の際從來の區域を以て井原村制を布き、全廿九年町制を施行して今日に至つてゐる。



井原町役場

現在の井原町は東西二十八町、南北十九町、面積百三十七万六千貳百五十五坪、町内を清迫、猪原、岩野、向町、新町、本町、中町、下町、倉掛、夏目の十區に分つ。

官有地并に民有地面積左の如し。

(昭和九年現在)

官有地反別
民有々租地

地積
二九・九
六四・七_反

賃貸價格
二五、七九七_円

田

畑

宅地

四〇・七_坪
一一〇七四〇四七_坪

四、八九六
五九、五七九

山林

二二四・九_{町反}

一、三三四

原野

三・一

七

其他

・一

二六

計

三七〇・四

九一、六三九

戸口調査及財政左の如し。

戸口

(昭和九年現在)

現在戸數

一、三九八_戸

現在人口

男三、四五七_人
女三、四六七_人

計六、九二四_人

本籍人口

三、四二四
三、四二八

六、八五一

現住職業別戸口

戸數

人口

農業

三三三_戸

一、九九五_人

營業收益稅	四、九五三	
資本利子稅	六三	
計	一四、〇三八	
縣稅		稅額
地租附加稅	四、五六八	四、七七一
營業稅	七八一	五〇六
雜種稅	七、三一四	二、四八三
營業收益稅附加稅	四、九〇八	四〇七
所得稅附加稅	四、一八七	一九八
家屋稅	四、〇一三	一、七二八
特別地稅	四八九	四九六
都市計畫特別稅	二八〇	二〇一
計	二六、五四〇	七、七九〇
町稅		
地租附加稅	一、六九八	一、七七一
營業收益稅附加稅	五、〇一三	四〇七
縣稅營業稅附加稅	五五〇	五〇六
縣稅雜種稅附加稅	二六、三七	二、四八三

家屋税附加税	一、七二八	二、〇〇二
特別地稅附加稅	四九六	一八二
特別稅戶數割	四、一二九	一三、七一三
計	一一、五二〇	二九、三九五

人員

金額

市町村稅滯納處分	一	一〇一
町基本財産		二八、八一二
町債		三、〇六〇
町費		五二、三二六
平均一戸當		三七・四二

昭和十年度本町歲入出豫算金五一、八五七、〇〇〇なり

歴代の代官左の如し。

長野 平左衛門

寶永正徳の頃

柳 本 八郎左衛門

享保十九戌年より

庄屋甚右衛門、庄屋要右衛門、寶曆十辰年より

柳 本 甚左衛門

明和二酉年より

大庄屋猪原要右衛門、大津寄吉郎兵衛明和七寅年より御陣屋預り

下山 儀右衛門 明和卯八年より

宮崎 舍人出役 安永五甲年より

猪原 要右衛門 安永七戌年より

茅原 藤左衛門 天明元丑年より

守屋 隆左衛門 寛政四子年より

大津寄 市郎兵衛 享和元酉年より

大津寄 吉郎兵衛 文化四卯年より

林 五 藏 文化九甲年より

大津寄 忠右衛門尙久 文化十三子年より

松 島 省 彌 文政二卯年より

大津寄重郎左衛門尙秀文政九戌年五月より十月十九日迄御陣屋預り

佐々木 騎 佐久 文政九戌年より

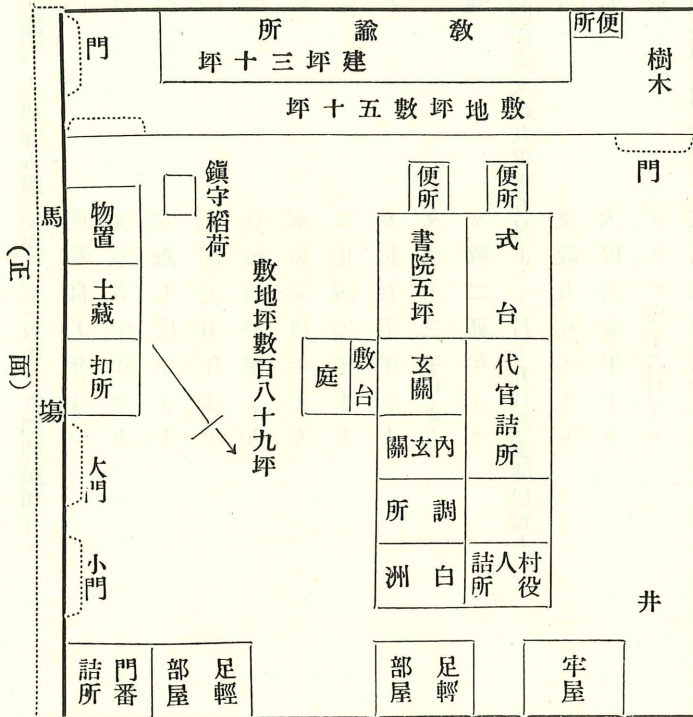
大津寄 忠右衛門尙秀 天保六未年より

小泉 保右衛門出役 文久二戌年六月より

大津寄 爲之助 (後改川手爲之助) 文久二年八月より

井原陣屋平面圖

(代官廢上後は
明治六年より
小學校に使用
せしもの)
(現在瀧本丈太
郎氏醬油醸造倉
庫の所なり)



歴代の戸長村長町長左の如し。

就任年月

明治五年五月	戸長	柳本瀧三郎
全 六年七月	戸長	大津寄圓藏
全 十一年九月	戸長	佐藤文治
	戸長	佐藤要吾
全 十六年二月	戸長	小寺純一郎
	戸長	關戸肅藏
全 二十二年八月	村長	千村作五郎
全 二十六年九月(再任)	村長	關戸肅藏
全 二十七年十二月	村長	大山邦一
全 三十一年十二月	町長	柴原宗助
全 三十八年七月	町長	青木研藏
全 三十九年四月	町長	目崎勝吾

現在町制機關は左の如し。

執行機關

大正元年十月	町長	原田吉平
全 六年十一月	町長	有岡重太郎
全 十年十二月	町長	小川豊三郎
昭和四年五月	町長	三宅利八郎
全 五年十二月	町長	高橋強平
全 八年七月	町長	古城昌治
全 九年六月	町長	千原冲太郎

町長

助役

収入役

書記

技手

其他

計

一

二

一

六

一

二

一三

各種委員

學務

土木

勸業

衛生

警備

計

五

四

四

三

三

一九

議決機關

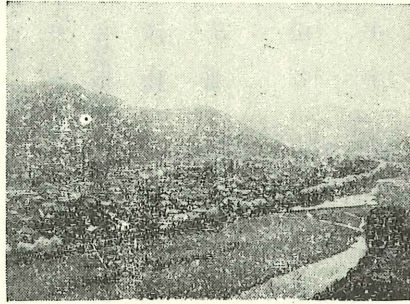
町會議員

一八

四、井原町の産業

井原町の産業としては、従業者の戸数人口の割合として、商、工、農といふ順位をとらねばならぬ。今逐次具体的に記載して見よう。

1 井原の商業



井原町全景

井原町は地勢上最も適當の商業地であるので、往古より川奥諸村の農産物、林産物を馬背に載せ、或は車により、或は人肩に擔ぎて此地に搬出し、以て取引をして居つたが、近年交通、通信、運輸の便開け、産物數量の増加と共に、その販路も次第に擴張され里芋の如きは遠く米國に輸出され、午夢松茸蒟蒻玉の如きは、京阪地方は勿論、門司下關並に米國と直接又は間接の取引をなし、松茸は産額實に日本一にして、繭、薄荷、除蟲菊、酒、醬油、箆笥の如き持産品も、年々その産額を増加し、殊に織物製品の如きは内地は勿論外國向のもの非常に多く、従つて車馬絡繹として物資輻湊し、積極進歩の氣風全町に横溢し、商店のウインドを初め市街著し

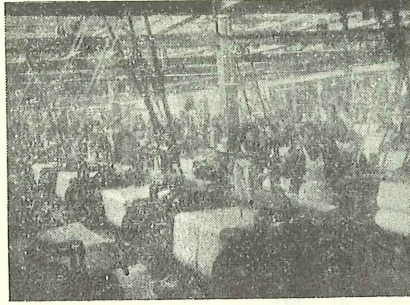
く近代の色彩を帶び、その活氣ある商勢は來觀者の齊しく一驚を喫する所で、其機關としては商工會及商盛會などあつて、中元、歳の市、誓文拂、家庭工業の獎勵各種事業の視察、指導獎勵、名勝の宣傳、職工店員の慰安等隨時その機能發揮して益々商工業の發展に資しつゝあるのである。(商工會、商盛會の記事は後頁にあり)

今當地經山の產物に付其の數量輸出取引先等の重なるものを列記すれば左の如し。

產物	產地	總額	輸出先
蒟蒻	備前中一圓 備前安西部	百八十万貫 生玉粉 二十五萬貫 百五十五萬貫	(神戸大阪) 下關九州 四國及近地
松茸	阿哲、上房、川上 後月、小田、廣島 縣神石、深安、双三	六十六萬斤 生茸 罐詰 六十萬斤 六萬斤	(全國的ニ知ら レ九州一円大 連米國)
午莠	後月、川上、小田 深安ノ四郡	二十五萬貫	(四國一圓ト 下關神戸間)
佃芋	全上	二萬貫	神戸下關間
里芋	全上	五萬貫	米國
馬齡薯	全上	一万五千貫	内地各地
長芋	全上	五千貫	朝鮮 滿洲
百合根	全上	三千貫	大阪 下關

2 井原の工業

井原工業の首位を占めて居る織物業に就ては、勢ひ有機的關係を有する近接各町村の現況に付き書かねばならぬ。元來この織物業は本郡井原、高屋、出部、西江原、木之子、荏原、小田郡大江、



稻倉等に古き發達の歴史と種々の變遷とを経て今日の隆盛を來したものであつて、其經路に就ては先覺者の涙ぐましい奮闘と努力との結晶であらねばならぬ。今や中備織物の名聲は年一年とその眞價を發揮し、内地は勿論遠く海外に輸出せられ、我が國產貿易品の權威として重んぜらるるに至つたのであるが、尙ほ前途に幾多の研究と改良と生産能率の増進とを目標として進むべく光明の進路が開拓されつゝあるのである。今試みに機業及び之に關する會社組合等の數字を左に列記する。

井原機業家並に會社數

高屋

一一

一七

出	部	一	〇
西	江	一	三
木	之	一	
荏	原	四	
小	田	一	
郡	大	一	
江	倉	一	
全	計	五	八

右の外井原町に於ては經木眞田、麥稈眞田、薄荷油、輸出向角マツト、酒、醬油、菓子類、麵類、麥粉、製餡等諸種の工業品がある。殊に角マツトは製造數量拾壹萬才、價格一萬圓（販路米國ニューヨーク）に及び、家庭工業としては竹細工の花籠、果物籠、机、玩具、其他の日用品、籐細工のテーブル、椅子、腰掛等が製造され逐次販路も擴大されつつあり。

A 備中織物工業組合

（後月郡出部村西端）
電話 高屋 一四番

本組合は後月郡出部村にあり織物工業の改良發達を圖る爲め、共同の施設をなすを目的とし既に

組織しありし中備織物同業組合を組織替へしたものである。中備織物同業組合は明治卅五年高屋町大塚笹一氏等の發起により成立したものであつたが、爾來こゝに卅有餘年、更に時勢に適應したる施設を要する爲、工業組合を設けることとし、昭和九年一月三十日創立發起人會を開き、四月十五日創立總會を開催、六月廿九日認可を得て直に拂込をなし、茲に設立を完了したものである。右の目的を達する爲め左の事業を行ふ。

一、製品原料、材料及設備の検査並に取締

二、原動力の供給

三、統制

四、營業に必要な物品の供給

五、營業に關する指導研究及調査

六、其他組合の目的を達するに必要な事項

組合の地區

後月郡の内

高屋町、井原町、出部村、縣主村、山野上村、青野村、芳井町、明治村、共和村、三原村

小田郡の内

大江村、稻倉村、大井村

組合員數 五十一

出資金額 壹口 of 金額壹百圓、出資總口數 壹百五十二口

最近に於ける織物産額表（昭和九年度）

種 別	生 産 高	見 積 價 格
内地向 小巾物	一二九、五九七反	一二五、五〇七圓
全 廣巾物	一二、五六六、六八六碼	四、一二三、六一九圓
輸出向 廣巾物	九、七四一、三三〇碼	二、九八三、一二七圓
計		七、二三二、二五三圓

販 路 内地は元より、中南米、滿洲國、支那、亞弗利加、印度、濠洲、海峽殖民地、其他
役員左の如し。

理 事 長 大 塚 笹 一
専務理事 佐 藤 占 太 郎

B 岡山縣綿織物工業組合後月支部
(後月郡荏原村)
 (電話井原二番)

本支部は初め、中備織物組合に属してゐたが、大正三年分離して、備中物産織物同業組合となり、昭和八年又同組合を解散して、更に現在の岡山縣綿織物工業組合後月支部となつたのである。

本支部の織機數並に一ヶ年産額は左の通りである。

織機 額	廣		小
	幅	幅	
織機	一二〇〇台	三〇〇台	
産額	三拾三萬反	六拾萬反	
金額	三百八拾萬圓	四拾萬圓	

販路

内地、滿州國、支那、印度、亞弗利加、濠州、中南米、海峽殖民地、其他

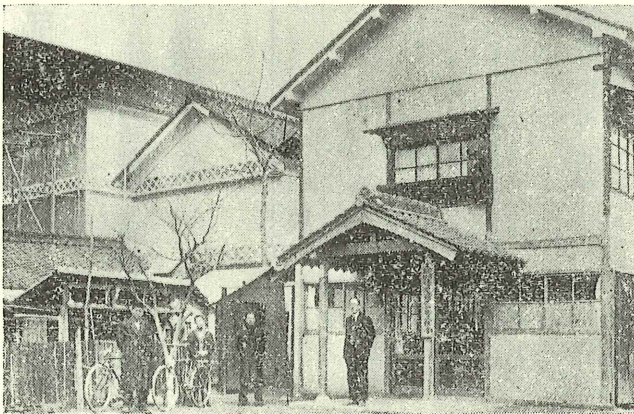
C 保証責任 備南生絲共同施設組合 (電話井原一三番)

(元中備製絲株式會社建物跡)

高雅なる感觸と特異の美觀とを有つ生絲が我が國產の雄偉的存在であり、國家經濟の有力なる資源であることは誰もよく知る所である。然るに連年の不況と人造絹糸の進出とは生絲相壞を極度に慘落せしめ、蠶絲業の一大恐慌を招來し、製絲の經營を甚だしく困難ならしめた。

政府に於ても此の事態を憂慮し、昭和八年製絲業法の改正を行ひ、生絲共同施設組合の制度を設け、中小製絲の事業の共同經營を獎勵し、以て斯業の健全なる發達を企圖した。茲に於て乎、備南地方の業者十六工場一致團結し、經營の改善と難局打開の勇猛心を強調し、昭和八年十二月組合設立の議を起し、昭和九年五月四日農林大臣の認可を経且つ獎勵金の交付を得て、斯業に由緒深き元中備製絲工場

備南生絲共同施設組合



の一部を買収して居を構へ、全年十一月一日事業を開始した。創業日尙淺しと雖も順潮に棹し、克く經濟團體としての機能を發揮し、備南生絲の聲價を高めつゝ向上發展の一路を辿つて居る。

一、組合員 小田、後月郡内十六工場（繰絲釜數四百二〇釜）

二、出資額 五万圓（一千口）保證責任額五万圓

三、組合の敷地九百八十坪、建物九棟、建坪二百五十坪

四、生繭の消費量約十萬貫、價格約四十萬圓

五、生絲の生産高、約一万三千貫、價格約五十萬圓

六、組合の事業

（イ） 組合員の製造したる生絲及屑物の共同販賣

（ロ） 組合員の營業に必要な原料繭の共同購入

（ハ） 資金の貸付

（ニ） 共同設備の設置

（ホ） 物資の共同購入

（ヘ） 生絲の検査、加工及營業に關する指導研究其他

以上

D 小田後月薄荷同業組合（小田郡小田町）

地方に於ける薄荷の植付は明治廿七年頃がその最初である。爾來年々植付反別の増加と共に薄荷油の生産も増し、遂に明治卅八年に至つて組合の設置を見るに至つた。濃分は五割の含有量にして品質の優良を以て聞えて居る。組合設置當時より現今に至る間、相場に非常の高低あり。最も高き時に一斤に付二十三圓（大正十三年頃）低き時は二圓六十錢（大正三年頃）である。今昭和九年六月より十年三月迄の間の生産高は五万八千三百七十五斤で最も多きは大正十四年の十万二千斤であつた。事務所は小田町にあつて組合長は東山春吉氏である。

3 井原の農業

井原町は元來商工業地である關係上、年々新築家屋の増加に連れて耕作地の減少を來したる爲め農業は微々として振はないが、併しながら一面には町農會あり、亦後月郡各町村農會の主腦とも云ふべき郡農會もありて、種々の施設をして居るので記すべきことも少くない。今井原町の生産總額並に町農會及郡農會の施設に付左に記す。

A 井 原 町

		農 業		蠶 糸 類 眞 綿		繭 蠶 種 桑 苗		畜 産		水 産		林 産		工 産		計		現 住 一 戸 當		現 住 一 人 當		耕 地 總 數		畑 田	
生産總價額		七四、二四九		三〇一、二五〇		五、八九三		一、四五〇		四五〇		六八、六四五		二七六五、一四七		三二二七、一三〇		二、三〇八・三九		四六六・〇七		六四町七反		四〇町七反	
		四		四														門							
		九		〇		三		〇		〇		五		七		〇		九		七		反		反	

計		一〇五町四反
農家一戸割		
田		一反九畝
畑		一反二畝
計		三反一畝
農家		
自作	八〇戸	
小作	九三戸	
自作兼小作農	一六〇戸	
計	三三〇戸	

B 井原町農會 (井原町役場内) 電話井原二二番

會員は本町に於て田畑を所有せる者並に一段歩以上の作付をする者約六百名である。地方農業の改良發達を圖る目的を以て次の事業を行つてゐる。

一、米麥作の更新

二、蔬菜、果樹の栽培獎勵

三、病害虫の豫防

四、農區事業の獎勵

五、農産加工

六、販賣、購買事業

七、農報の發行

役員 及 總代

本會の役員は左の通りである。

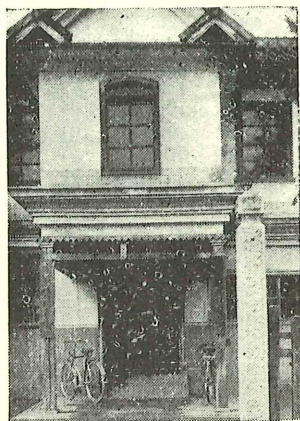
一、會長（一名）	千原冲太郎
一、副會長（一名）	倉橋文次
一、幹事（一名）	矢吹隼太
一、技手（一名）	樋口修一
一、書記（一名）	長野嘉市
一、評議員（七名）	

總代會の總代定數を二十人として左の通り

各區に配置してゐる。

第一區（清迫、猪原、岩野、向町）	五
第二區（新町、本町）	五
第三區（中町、下町）	五
第四區（倉掛、夏目）	五

後月郡農會



C 後月郡農會

（井原驛前通り
電話井原一九番）

後月郡農會は明治廿九年九月縣下各地に卒先して後月郡役所内に設置されたもので、郡役所廢止後は其の建物全部が郡農會の事務所となつてゐる。

今昭和八年度に於ける事業の項目を舉げて見れば、

一、技術員設置

- 二、講習講話會開催
 - 三、協議買座談會
 - 四、青年農事研究會
 - 五、米生産費調査
 - 六、購買販賣斡旋
 - 七、共同採種園圃設置獎勵
 - 八、養蠶實行組合事業獎勵
 - 九、農家組合獎勵
 - 一〇、自給肥料獎勵
 - 一一、小麥増殖獎勵
 - 一二、町村農會技術員設置獎勵
 - 一三、農事試驗
- 以上

D 家畜保險組合 (後月郡農會内)

後月郡家畜保險組合は郡農會事務所内にあり、昭和六年五月十二日の創設に係る。昭和九年十二月末現在の家畜保險加入頭數左の通りである。

町名	高屋町	出部村	縣主村	木之子村	荏原村	西江原町	山野村	青野村	井原町	芳井町
現在飼養頭數	一五八頭	一〇五頭	一六〇頭	一一〇頭	一三〇頭	一二〇頭	一二〇頭	一五〇頭	五〇頭	二二八頭
全上加入頭數	九七頭	二頭	一五五頭	五頭	五九頭	四三頭	五四頭	一二七頭	四一頭	九一頭

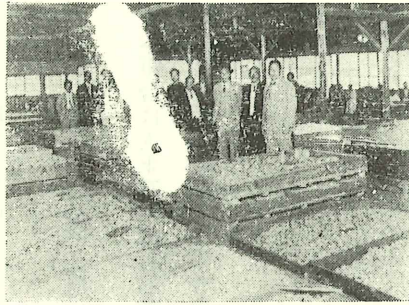
明 治	共 和	三 原	計
村	村	村	
二〇〇頭	一五〇頭	一二〇頭	一八〇一頭
〇			
九三頭	一二頭	一八頭	七九七頭

備考 ○印は家畜保険普及促進獎勵の目的を以て村農會より加入者に對し保険料の半額以上を補助するもの。

助するもの。

E 後月郡養蠶組合 (後月郡農會内)

本組合は大正四年後月郡養蠶組合職合會を設立したに始まり、昭和六年十二月十五日蠶糸業組合法により組織を變更し現今では各町村養蠶實行組合十三組合を以て成立してゐる。



井 原 町 蘭 市 場

F 有限責任後月郡乾蘭 販賣利用組合

(後月郡農會内)

本組合設立は昭和四年四月十五日で現在組合員數は四百五十九名、區域は後月郡一円である。目的は産蘭を乾燥貯藏して適當の時に賣捌くにある。

G 後月郡畜産組合 (後月郡農會内)

本組合は明治四十二年二月廿七日産牛組合を設けたのが始まりで、其の當時は種畜の設置と囑託技術員とにより患畜の治療をなす位のことであつたが、大正十四年畜産組合と改め専任技術員を置き畜牛の改良發達に努めた結果、年一年と組合事業の必要を認め、現在の組合員は一千九百人の多きを算するに至つたのである。

Ⅱ 岡山縣 種業組合井原蠶種冷藏庫 (井原町驛前通り)

我が蠶業界に於て、夏秋飼育並びに人工越冬浸酸孵化蠶種の盛なるに従ひ、大正十三年十一月、小田後月兩郡内蠶種製造者の共同により、井原町に蠶種冷藏庫を設立し、同十四年六月専門技術者を招聘し、夏秋蠶冷藏時期より一般蠶種の冷藏事業を開始した。昭和三年四月岡山縣蠶種同業組合經營に移管し、縣卜蠶種冷藏を統一すると同時に蠶種浸酸孵化施設に遺憾なきを得たるは、獨り蠶種製造者の便益のみならず、延いては之が養蠶家に及ぼす効果、並びに蠶糸業發展上貢獻する處が尠くない。

五、金融機關

1 井原町の金融機關

井原町の金融機關としては、株式會社安田銀行井原支店、株式會社中國銀行井原支店、株式會社藝備銀行井原出張所、及保証責任井原同榮信用購買組合がある。何れも信用ある銀行の支店並に組合で

あつてよく金融機關としての機能を發揮してゐる。(詳細は記事廣告面にある)

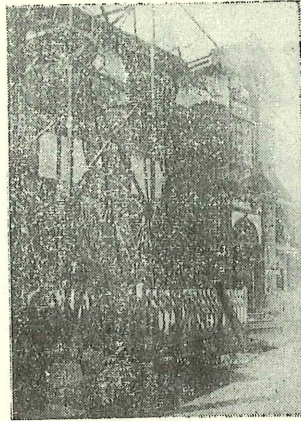
2 保証責任 井原同榮信用購買組合

井原倉掛 電話井原一三五番

保証責任井原同榮信用購買組合は、明治四十三年三月一日の創立に係り、區域は初め井原町内、農業部落のみの組合員で、其の數七十八人なりしを漸次擴充し、昭和二年三月、現在の組合に變更し、本町一圓の有力者を網羅して組合員とし、其の數三百九拾二人となつてゐる。出資總額參万九千五百四十圓、諸積立金壹万〇五百八十五圓、貯金八万九千四百貳十四圓、貸付金九万六千貳百貳十五圓で、毎年六分の出資配當を爲して居り、順調發展の行程にあるのである。組合長倉橋文次氏は創立以來の組合長として、献身的努力をなしつつあるを以て其の信用は極めて厚い。

六、官 公 署

1 井原警察署 (電話一七番)



井原警察署

明治九年六月浅口郡玉島村に第三警察出張所を設けその所属として井原村に第三巡査屯所を置いた。而して同十年二月第三警察出張所を玉島警察署と改稱し、第三巡査屯所を改めて井原分署とした。同十一年十月玉島を離れて笠岡警察に属したが、同二十六年十一月井原分署を廢し、笠岡署の所屬を離れて井原警察署となり、後月郡一圓を管轄して今日に至つてゐる。初代白仁賢捷署長より二十二代現梶並暉一署長に至つてゐる。

2 井原郵便局

井原郵便局は明治十二年二月十六日始めて集配事務を開始し、井原町外五ヶ村の受持であつた。同二十八年三月電信取扱を始め、同四十一年一月電話事務、同四十二年一月特設電話交換事務、大正

十四年十一月外國和文電報取扱をなし今日に至つてゐる。

現況左の如し。

郵便區域 井原町、西江原町、青野村、山野上村

出部村大字上出部

區内 無集配郵便局、西江原局、出部局、山野上局

郵便線路 井笠鐵道受渡、上下發著一日六回

井原 山野間自動車一日四回

電信 回数 四回線、電話回線 十一回線

電話加入者 三〇六名 公衆電話所一（井原驛構内）

井原驛間距離五〇〇米 電話通話區域四三二箇所

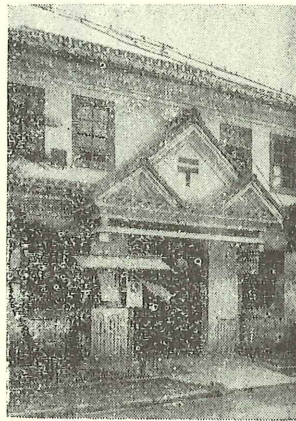
最近一年間取扱數

通常郵便物
小包郵便物
郵便貯金
郵便爲替

三、〇〇三、九一八
四三、一七六
二八、二四七
一〇、九一一

電報
電話通話數
保險契約受持
從業員

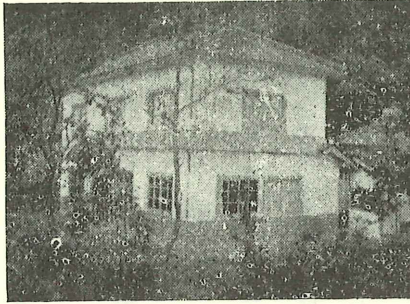
六六、二四二
一、一四三、三四三
三、六五九
三七



井原郵便局

歴代局長 大津寄角平

現局長 高等官七等待遇 正七位 勳六等 大津寄定造



蠶業取締所井原支所

3 岡山縣蠶業取締所 井原支所

(井原町岩野
電話七三番)

當支所は大正七年迄は後月郡役所内を出張所として、毎年臨時開所する一方蠶種母蛾検査は遠き津山に於て行はれてゐたが、年と共に蠶種の増加を見、且つ事務の繁雜を來すに至り、大正八年四月一日支所設置と共に廢舎を井原町岩野に置きて現今に及んでゐる。

而して當所は蠶絲業法に基き管内に於ける養蠶蠶種製造、生糸製造、眞綿製造、殺蛹乾繭又は蠶種繭生糸屑物類の賣買仲立、若くは保管を業とする者に對し、本

法及同法施行規則に示せる蠶種の製造、蠶病の驅除、桑苗圃又は蠶種繭生糸屑物類の取引等に對する弊害取締及種繭の病毒検査等を施行してゐる。その管轄區域は左の如し。

小田、後月郡の一圓

川上郡（日里、大賀、手莊、高山の四ヶ村）

4 井原煙草取扱所（井原紀念通）

明治三十年十一月省令第二一號を以て府中葉煙草專賣所管下井原葉煙草專賣支所を設置されたのが始まりで、爾來屢々官制の改正を経て、今は岡山地方專賣局井原煙草取扱所と改稱されて居る。昭和九年度の賠償金六万六千六百拾貳圓四拾貳錢、耕作人員五百三十五人である。

5 岡山地方專賣乙井原煙草販賣所

本所は煙草元賣捌人制度の廢止と共に、昭和六年七月始めて井原町に設置されたもので、販賣區域は後月、小田川上の三郡を抱擁し、更に廣島縣深安郡の一部に亘り此の廣袤實に二一、七三七方里人口七五、二〇六人、煙草賣渡高年額拾八萬圓に達し、備南唯一の作業官廳として異彩を放ち、專賣事業の發展に伴ひ益々之れが運行を圓滑ならしめつつあるのである。

七、交通運輸其他

1 井笠鐵道井原驛

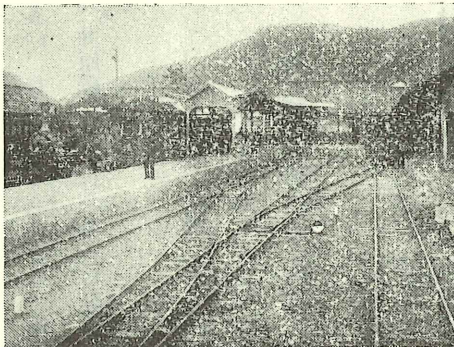
(井原町下町)
(電話井原四二番)

中備合同自動車株式會社

(電話三〇四番)

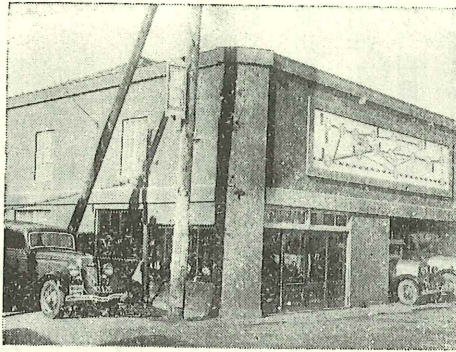
井笠鐵道(井原笠岡間一九杆四分)が開通したのは大正二年十一月十六日であつた。同十年十月二十五日には北川矢掛間五杆八分の支線が開通し、越えて同十四年二月十一日には井原高屋間四杆一分の延長線が成るに及んで、兩備鐵道(現在の福塩鐵道及神高鐵道)と連絡して井原驛は福山、府中、矢掛、笠岡に通ずる交通要衝の中心地となつたのである。

殊に輓近自動車交通事業の發達に伴ひ、會社兼營の乗合自動車は井原を起点として、高屋及神邊を経て福山に至るもの二二杆、矢掛及宇戸村鬼嶽溫泉經由玉に至り、伯備線廣瀬驛に連絡するもの三五杆、芳井



井笠鐵道井原驛

天神溪、鳴蛇の穴、仙養村を経て備後豊松、油木に至るもの四九籽、分岐して芳井町川相より備後山野温泉、龍頭の瀧に至るもの、西江原町より道祖溪に至るもの、其の延長一七籽五分。更に傍系會社中備合同自動車は井原より一六籽笠岡に至るものもある。井原驛は鉄道に、乗合自動車に四通八達して、實に地方交通機關の中心地である。



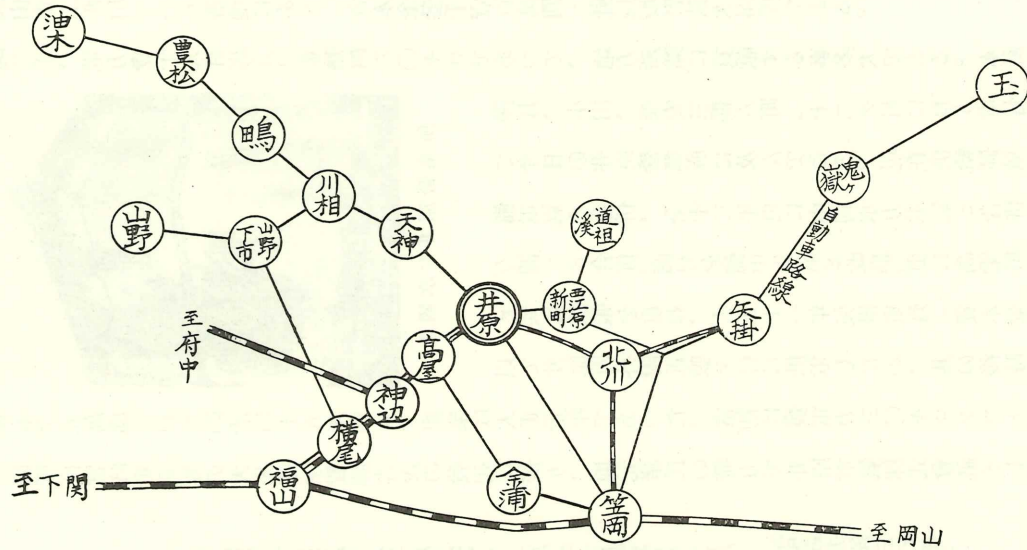
中備合同自動車株式會社井原レジーナ

鉄道及自動車に依つて、一ケ年間井原驛より吞吐するものは、旅客乗車人員一六四二九五入、降車人員一五七七八二人、發送貨物三四〇二吨、到着貨物四五七四吨（昭和九年度）である。

中備合同自動車株式會社

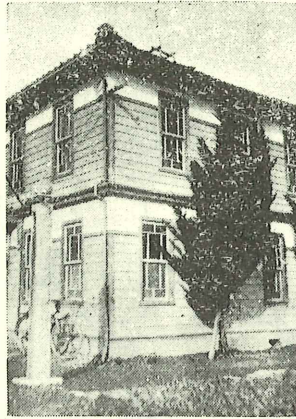
社 長	淺 野 富 平
取締役 兼 支配人	高 浦 周 三
社 長	淺 野 富 平
専務取締役	高 浦 周 三

井原驛を中心とした交通網



2 中國合同電氣株式會社井原營業所 (井原町倉掛 電話井原三八番)

同所は當時電氣界の大先達才賀藤吉氏の發起に依り、地元諸氏の盡力で井原電氣株式會社として資本金五萬圓を以て明治四十五年創立、開業は大正元年であつた。當初は發電力三〇キロワットを



中國水電井原營業所

以て井原町外附近數ヶ村に供電したが、其の後時勢と共に擴張を重ね、大正十一年矢掛電灯(資本金參萬圓)と合併、商号を備中電氣と改稱、更に高梁町北備電氣と合併、全十三年更に中國水力電氣と合併以て今日の井原營業所に及んでゐる。現在供給區域は後月、小田、深安三郡六町二十二ヶ村に亘り電灯三萬三千、電力壹千九百馬力、電熱四六〇キロであつて、地方産業に貢獻する事多大である。本社は岡山市上西川一一五番地にあり(資本金參千壹百萬圓)社長坂野鉄次郎氏である。

八、教 育

附 社 會 事 業

1 井原尋常高等小學校

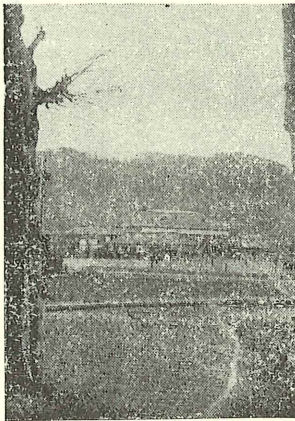
(井原町紀念通り)
電話井原二九番

本校は明治六年三月の創立にかゝり、初め元之校と稱して居つたが、明治四十一年四月井原尋常高等小學校と改稱して今日に至る。

校舎は最初池田筑後守の御陣屋家屋を以て之に充當して居つたが、就學兒童の増加と日新の文化に伴ひ、漸次増改築して現狀となつた。

現在校舎は二階建二棟、平屋建一棟であつて普通教室十九、特別教室六、講堂一其他四である。之に收容する兒童數尋常科九百名、高等科百五十名で、之が學級は尋常科一六、高等科三である。

校長は原嘉平治氏を初代とし、石田精一郎氏、枝益六氏、大塚信正氏、平野恒吉氏、世良萬龜男氏を経て現任皿井勝美氏に至る。校長の勤続年數の



井原尋常高等小學校

長きは其誇とする所であつて、平野恒吉氏の如き三十二ヶ年、世良萬龜男氏亦二十ヶ年であつた。現在の職員は校長外二十二名で校長を中心として愛、熱、徳、健、和の五つの信條を掲げ、

一 日本精神の發揮

二 道徳教育の重視

三 訓育の徹底

四 學習態度の確立

五 体育衛生の重視

六 家庭教育の尊重

の六大方針を定めてその貫徹を期し、職務に精勵してゐる。

附 設 幼 稚 園

本園は明治十九年一月井原小學校の前身なる元之校に附設し、岡山縣師範學校附屬小學校に次ぎ縣内各地に率先して開園した。開園以來年を閲すること五十、漸次發達して今や園兒の數は百六十名であつて、一年保育二年保育の二種に分つて四人の保姆之が保育の任に當り、園兒心身の円満な

る發達を期して其職に精進してゐる。

2 井原公民學校

本校は明治三十九年一月井原尋常高等小學校に附設井原實業補習學校と稱して開校したものである。當時修業年限三ケ年であつて、男子のみを收容してゐた。大正三年九月學則を改正して修業年限を二ケ年としたが、大正八年三月時代の進運に伴ひ、女子青年大衆教育を行ふの必要起り、學則を改正して新に女子部を加へた。大正十三年三月井原公民學校と改稱し、前期後期專攻科の課程に分ち、其教育の普及徹底を期した。授業は家庭及び其他の事情より男子は夜間に之を行ひ、女子部は晝間と夜間との二部制を採つて居る。現在の生徒は男子は四十名、女子晝間部三十名、夜間部五十四名である。職員は校長以下專任二名、兼任六名で之に要する經費一ケ年約二千圓である。

3 井原青年訓練所

本訓練所は大正十五年四月發布の青年訓練所令に基き、大正十五年七月井原尋常高等小學校に併設したものである。

入所して居る青年は何れも既に職業を有するか、又は他家に雇傭せられるも、

が入所出席の督勵は中々の難關であるが、これを突破せねば其成績の向上が圖れない、

を其の督勵に力め本町有力者を以て組織せる後援會の活動と相俟つて、益々良好の成績を挙げ、現在生徒散七十五名、その入所率八七、一%、出席率は八四、二%を示すに至つた。

職員は主事以下指導員八名で、毎週月木曜日を訓練日と定め、夜間訓練を行ひ、職員一致協力以て目的の貫徹を期してゐる。

之に要する經費一ヶ年六百五十圓である。

4 岡山縣井原實業學校

人類生活の根元たる實業に關する知識技能を附與し、有爲有能なる國民を養成し以て地方産業の開發と民風の作興とに貢獻すべく企畫せる本校は、昭和十年二月二十一日文部大臣の認可を得て、陽春四月開校のことに決した。

内容は商業科、農藝科、女子家政科の三種目に分れ、尋常小學校卒業者を入學資格とし、三ヶ年にして卒業することを得ることになつてゐる。

定員は各科とも百五十名なれば完成の暁は四百五十名となる。開校初年度は校長外専任教諭五名、書記一名、嘱託數名、二年度は専任教諭八名、書記一名、嘱託數名、完成年度は専任教諭十一名、書記一名、嘱託數名の豫定である。目下開校準備并に生徒募集に當つてゐる。

5 岡山縣井原高等女學校

(井原町新町)
電話井原五七番

本校は明治三十六年二月町立井原女學校を設立したのに始まり、明治四十五年四月組織を變更し

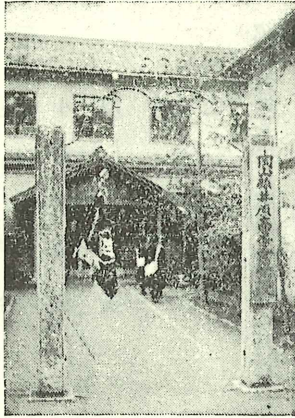
て岡山縣山井原高等女學校と改稱し、昭和四年四月縣營移管となり以て今日に至つてゐる。

昭和八年四月校友會施設として専功科を設けた。

現在十一學級四百余名の生徒日々嬉々として其の學業にいそしんでゐる。

深く人の本質に顧み女性の自然に歸り、出でくは

國家社會の有爲なる人格を造り、入りては温良貞淑なる良妻賢母として必要なる品性と知能と意氣と体力とを涵養練磨するを以て生徒修養の本旨としてゐる。



岡山縣井原高等女學校

創立以來の校長左の如し

篠原 吉 爲

濱田 楠 治

小林 多 賀 藏

茂 原 茂

檜 崎 操 一

松 浦 俊 吉

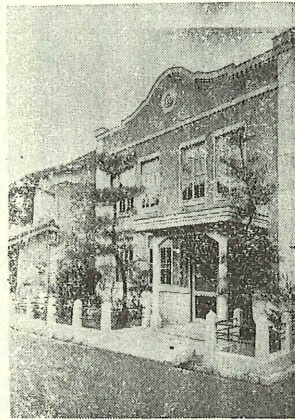
昭和九年十二月横手山麓高燥靜閑の地を卜し、校舎の改築に着手した。爾來鑿槌の音は靜閑なる谿谷に衍して竣工を急いで居るので、日ならず落成の曉は輪奐の調和、内容の具備相待つて地方女子教育の源泉たる理想的の大殿堂を見るに至るであらう。

6 井原女子高等技藝學校 (井原町新町)

井原女子高等技藝學校は大正十五年四月の創立に係り、井原町佐藤彦右衛門氏が各種學校會により其の筋の認可を得て開校したものである。其後佐藤氏は病氣の爲め逝去したので、現校長茂原茂

氏夫妻によつて繼承され、昭和八年一月現校舎を改築たし。在學期間は本科二年、高等科一年、研究科一年とし、別に隨意科の設けもある。

本科は高等小學校卒業、高等科は高等女學校若くは本校本科卒業生を收容し、研究科は本校高等科卒業生を入れることになつてゐる。貞淑なる花嫁養成の學校であつて、特に女としての躰と裁縫手藝に重きを置いてゐるのと、必要な教育を短期間に受け得るとの特長あるにより非常に好評であつて、年一年と生徒の數を増しつゝある。



井原女子高等技藝女學校

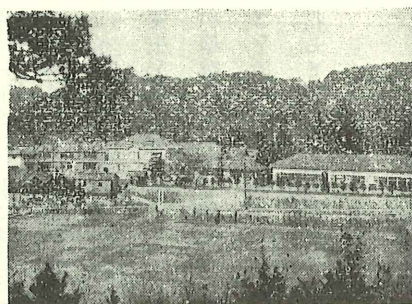
7 井原町 濟世會

井原町に於ける社會事業の一つである濟世會は、岡山縣濟世顧問及濟世委員設置の趣旨を達成するを目的として設立されたるもので、防貧、救貧、給療、免囚保護、犯罪豫防、社會改善等諸般の濟世事業に手を染めてゐる。其役員は會長欠員中で常任幹事赤松佛海、委員森秀吉外五人である。

8 興讓館中学校

(西江原町 寺戸)
電話井原一二四番

本校は後月郡西江原町にあり、嘉永六年の創設であるから校齡の長きことは將に全國の首位である。



興 讓 館 中 學 校

當時郡内の有志は學舎の建設を希望することが久しかつた。偶々碩儒阪谷朗廬先生芳井町櫻溪に帷を垂れて居られたのを強ひて招聘して教授を託したのに創まる。これが當時の郡中教諭所であつて、實に興讓館の前身である。

先生は程朱の學を宗として諄々諸生を教へられ、名聲世に普く、士大夫の來りて教を請ふものが多かつた。先生教授すること十余年、藝州侯から懇請の使者再三に及び、賓師となつて廣島に赴かれた。依て坂田警軒先生教授を後繼せらる。先生亦二十年の後、京都同志社の聘に應ぜられ、其留主教授であつた奥田諫山先生病んで退かれた後、現館長山下秋堂先生地方民の熱望により本館の後繼者として、同志社を辭して任に就かれ現今に至る。

其熱誠天聽に達し昭和三年十月今上陛下は藍綬褒章、教育功勞者として表彰せられた。

現在の興讓館中學校

現在の興讓館中學校は中學校としての理想を實現するため、絶みす内容を充實し、年々設備の改善を加へてゐる。職員二十四名、生徒は三百十五名で、漸次増加の機運にある本校の教育は館祖阪谷朗廬先生以來一貫する白鹿洞書院揭示の綱領に依り、忠孝一本、至誠篤行を其の方針として健實なる人格養成に重きを置き、訓練の成績著しきものがある。而して時代の進運に適應する様、一般學術の向上に努めると共に、法令に依りて第一種生には商業科を課して之に要する知識を涵養してゐる。

昭和九年度本校豫算は二万八千圓、別に圖書館費もある。

興讓館圖書館

本圖書館は興讓館創立者阪谷朗廬先生五十年忌記念として、同館邸内に建立せるものである。昭和六年五月落成式を舉行了た。これは明治五年同館内に設置した一新社の事業を繼承したものであつて、興讓館創立當時以後の所藏圖書約一万冊を保存してゐる。本校生徒は勿論、一般公衆に無料

閱覽を許し、社會文化の發展に資してゐる。

仰 德 園

興讓館の前に小さい丘があつて、其の上に二大豐碑がある。一は即ち館祖阪谷朗廬先生の碑であつて、徳川慶喜公の篆額、三島中洲先生の銘文、巖谷一六先生の筆である。一は即ち阪田警軒先生の碑であつて、碑文は三島中洲先生、日下部鳴鶴先生筆である。外に後月郡循吏長尾遠志翁の碑がある。丘上よりは近く西江原、出部、高屋の各地を瞰下し、遠く西備の遠山を雲烟模糊の間に望み松籟韻々として其の高風を讃えて居る。

九、各 種 團 体

1 井 原 消 防 組

火災其の他非常の場合の警備とし、又之を未然に防ぐの目的を以て、現井原消防組第一部即ち壯貴社が創立され、一台の雲龍水を擁して起つたのは實に明治二十五年四月であつた。これに續いて

組織されたが第二部より第五部までの四部、後れて同三十九年二月に第六部、大正十年二月に第七部と、其筋の認可を経て成立し、之にて全部落皆完備し、爾來益々研究に研究を重ね、向上發展しつゝあるのである。

大正四年四月二十四日岡山縣警察部長より、同十一年四月二十日並に同十四年四月二十四日の兩度、岡山縣知事より平素の成績優良なるの廉を以て感狀を受け、同十四年五月十日には表彰旗の允許を得てゐる。

本消防組は創立當初以來毎年の行事として、舊正月の休日为期し盛大な初出式が行はれる事になつてゐる。當日は其筋の點檢があり、引續いて放水作業の競争演技が、下町新町磧で行はれるので遠近より多數の觀覽者が興味を以て集るのである。

部別、部員、ポンプ、小頭數等左表の通りである。

部 別	組 員	ポ ン プ	小 頭 數
第一部 (新町)	八 二	ガソリン一台	八
第二部 (本町)	六 九	ガソリン一台	六

歴代組頭を擧ぐれば左の通りである。

第三部 (中町)	第四部 (下町)	第五部 (倉掛)	第六部 (岩野)	第七部 (猪向)	計
五	七	七	七	五	四
一	八	五	九	一	八
五	一	五	九	一	五
ガソリン一台	ガソリン一台	手押一台	ガソリン一台	手押一台	ガソリン二台
五	九	八	七	七	五〇

瀧本丈太郎
柳本省三
瀧本文一
千原冲太郎
高橋誠三
倉橋文次
渡邊章策

茂	岸	森	佐	板	佐	瀧	定	大	瀧	渡	柳
原		下	藤	倉	藤	本	敏	西	本	邊	本
辰	揚	生	太	虎	信	慶	嘉	儀	深	德	吳
藏	之	二	市	一	吾	一	三	助	策	太	策
	介	郎					郎		郎	郎	

2 井原町青年團

井原町青年團の創立は明治三十八年十二月であつて、爾來傳統的に發達を爲しつゝ今日に至つてゐる。團員は十五歳以上二十五歳以下の學籍にあらざる本町在住の青年であつて、その數三百餘名である。

本團の事業は青年の教化修養に關する講習會、講演會、辯論會、體育會並に毎週二回の朝起會等を行つてゐる旁ら、一般公共の事業にも及ぼしてゐる。本團の下に七支部があり、各支部に於ては特に社會奉仕的の作業に最も力を盡してゐる。

歴代團長及現團長副團長は左の通りである。

歴代團長

千	瀧	渡	渡
原	本	邊	邊
沖	文		
太	一	章	就
郎		策	一

平	有	高	大	大	古	森	藤	有	久	井	柳	村	內
野	岡	橋	塚	津	城		原	岡	安	上	本	上	田
恒	寬	誠	信	寄	昌	誠	金	新	準	興	喬	省	玄
吉	二	三	男	三	治	一	一	二	一	治	祐	吾	碩

3 井原町女子青年團

現團長	西本一郎
現副團長	佐藤卓弘
全	矢吹隼太
細川喜市	田良介

満十二才より二十五才迄の本町在住未婚の女子を正會員とし約六百名を算してゐる。

顧問には松浦井原高等女學校長を推し、會長は皿井井原小學校長で、副會長は渡邊壽、妹尾小鶴の兩氏であり、事務所を井原小學校に置いてゐる。本町女子青年の向上進歩を計る爲修養に關する講習會、講演會等を開いて大いに活躍し。又時々團報を發行して一般會員其他に其の事業狀況を報告してゐる。

4 帝國在郷軍人會井原町分會

帝國在郷軍人會井原町分會の創立は遠く源を北清戰役後に發して居て、町當局及町民有志謀つて忠勇義會なるものを創立し、専ら日清、日露の出征軍人並に其の遺族の後援慰問に當り、一方在郷軍人の向上發展にも努めた。其の後北清の役終るや、在郷軍人は井原報効義會なるものを組織した。而して一たん帝國在郷軍人會規約の發布せらるゝや、井原報効義會は自然解消し、規約に依る井原町分會となるに至り、忠勇義會も又解散して、其の積立金壹百圓を井原町分會の基金とした。時は明治四十三年十月二十八日であつた。其の會員數は正に七十三名であつた。爾來内は勅諭詔書の御主旨を奉体して、軍人精神の鍛鍊、陶冶、不撓不屈の身体の養成に努め、外は射撃場其の他の諸設備、諸器具の完備を期し、事ある毎に町當局及諸公共團體と一致協力して事業の遂行風教の指導淨化に盡し、逐年會員の増加、會務の發展に伴ひ、現在の盛大を見るに至つたのである。然して滿洲事變の突發するや、卒先銃後の任務遂行に當り一而目下の國際危局に處しては全力を擧げて、軍事思想普及に努力しつゝあるは勿論、就中昭和八年四月には地方稀に見る國防大博覽會を主催して、軍人思想普及上百パーセントの効果を擧げて盛名を得たのである。現在正會員百八十七名を擁

歷代分會長

有岡寛二

有岡隆三

大津寄祥次郎

現 副長 陸軍歩兵少尉 森 下 勝 二

5 井原戰友會

—(60)—

とし、毎年三月春季皇靈祭の當日總會を開きて目的の遂行をなす。現在の役員左の如し。

會長 大西儀助

副會長 高橋誠三

常任幹事 岡本徳太郎

同 猪原丈平

同 原田甲子

明治二十七八年戰役以後の戰病死者左の如し。

明治三十八年二月二日 廣島陸軍豫備病院にて陸軍歩兵一等卒 河部龍太郎(光普庵)

全 二十八年七月二十日 戰地にて病死 砲兵一等卒 佐藤藤四郎(光普庵)

全 三十三年十月四日 清國通州にて病死 輜重輪卒 猪木猶藏(光普庵)

全 三十三年十月六日 全天津にて病死 工兵上等兵 吉原鎮平(不詳)

全 三十七年十月十六日 沙河附近にて戰死 歩兵上等兵 藤原信市(光普庵)

全 三十八年一月二十八日 黑溝台附近にて戰死 歩兵上等兵 間島瀧四郎(光普庵)

全 三十八年三月一日 奉天附近にて戰死 歩兵一等卒 川相兵市(常樂寺)

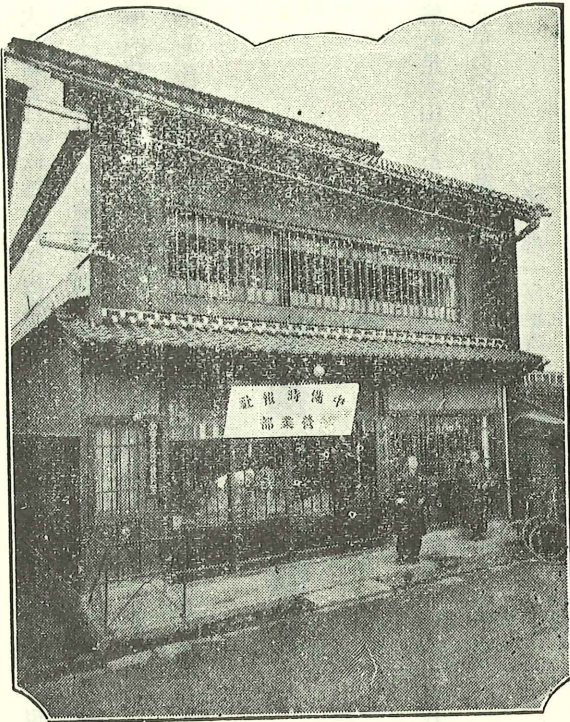
全	三十八年三月六日	奉天附近にて戦死	猪原 甚三(清迫)
全	三十八年三月十六日	盛京省下興家附近にて戦死 歩兵上等兵	三宅 勘四郎(岩野)
全	三十八年八月三十日	遼陽附近にて戦死 歩兵軍曹	大村 玄三(光普庵)
全	三十八年八月三十日	遼陽附近にて戦死 砲兵上等兵	川原 伍助(光普庵)
全	三十八年九月二日	盛京省南領舍營病院にて 輜重輸卒	川上 嘉市(光普庵)
昭和七年十二月十三日	扶餘縣喬家窩棚にて戦死 歩兵上等兵	森下 治(岩野)	

6 井原婦人會

明治四十五年初めて井原壬子婦人會として生れたのが、後になつて井原婦人會と改稱されて今日に至つてゐる。會員は十八歳以上の家庭婦人ばかりで、現在五百名に達してゐる。會長は高橋陸氏、副會長は内田絹子氏である。高橋會長は創立以來引續いての名會長として知られ、會の爲には幾千圓の基金の造成を初めとして、幾多の事業を遂行して今日の隆盛を効したのである。現に行はれてゐる事業としては、家庭婦人の修養となるべき講習會、講演會等の開催、社會事業としては敬老會並に渡滿兵士の送迎慰問等である。

一〇、言論機關

井原町の言論機關としては中備時報、大正新報、備南新報の三つがある。



中 備 時 報 社

中備時報は明治三十八年の創立であつて、社長は創設者であり、今尚ほ經營者である佐藤信吾氏である。初め後月時報と稱して居つたが、明治四十三年より新聞紙法により發行することゝなり現今に至つて居る。毎月三回の發行にして、發行号數四百〇四、其の間歲月を重ねること廿有五、益々穩健の發達を遂げつゝあり

大正新報は矢吹延一氏の經營であつて、大正五年の創設に係り、現今第二十年の第三百〇五号を重ねて居る。諷諷の論議を以て知られて居り、各地に支局を設けて地方版も發行して居る。

備南新報は矢吹秀石氏社長となり、渡邊壽水氏主筆である。昭和七年の創刊にして初め文藝時報と稱し、後ち備南新報と改稱して居る。新聞紙法により毎月一回發行し現今第三十八号に達して居る。

一一、神社佛閣附教會

郷社足次山神社

郷社足次山神社は井原町倉垣の里に鎮座ある式内の舊社、備中十八神の一であつて、清和天皇貞觀元年の創立、祭神は阿須波大神である。延喜式神明帳に曰く、

「後月郡一座足次山神社」

大嘗會和歌集に曰く、

「後一條院長和五年十一月

主基 備中國風俗

倉垣

善滋爲政

ことしより數をかそへて君かため

八千代をつまむ倉垣の山」

夫木抄に曰く、

「主基方御屏風 倉垣里 未勘國

前中納言匡房卿

倉かきの里におさまる秋の山は

とし長彦の稻にそありける」

古き大御世に帝より勅使あり、此の里人の作れる稻を貢ぎ奉りし時、種々の御田祭の式などあつて五穀の守護神を祭り給ふ。これ即ち足次神であつて、倉垣は稻の名所なることは歌人の名所考にも見えてゐる。千有餘年の昔より稻の名所の倉垣にこの社の鎮座ましろは、諸種の文献によつて明かである。

寛延四年後月郡中の守護神なることを披露し、庄屋年寄之に連判した。明治五年郷社に列せられ、毎年四月四日を以て郡中大祭を執行し、今日に至り益々盛大に赴きつゝあり。明治四十一年神域を擴張し櫻樹を植え神池を掘つた。毎年櫻花満開の候となれば、十日間引續き櫻祭を執行し、夜は雪洞の電飾をなし諸種の催物ありて、參詣者踵を接し雜踏を極む。

茨八幡神社

茨八幡神社は井原町字岩野に鎮座あり。祭神は足仲津彦天皇（仲哀天皇）、品陀別天皇（應神天皇）息長帶比賣命（神宮皇后）である。宣化天皇の御宇當地岩崎に始めて井原玉鉾明神として祭つたことが當社創立の由緒記にあり、井原一圓の大氏神と稱してゐる。特別の祭事としては正月十日神功皇后尊の吉列に従ひ御的弓始の式あり。八月十五日には祭典後角力あり。社殿は元錄五年十一月建立、安永三年六月再建したが、最近更に新築の議がある。社地は社有山林の中腹にあつて、井原全町を一眸の下に收め眺望最も佳である。

井森神社

井森神社は井原町昭和通りに面し、本町新町両區の氏神で祭神は高竈神、水波能賣神、吉備武彦神であつて、光仁天皇の御宇寶龜元年九月吉備津彦命の御弟吉備武彦命吉備の國を鎮め給ふた縁起により勸請したるものだといふ。往年本村星畑といふ地に樹木雜草生ひ茂りたる中に光を放つものあり、里人恐怖して近づくものなし、然るに三宅宇源太なるもの進んで林中に探り見るに二ヶの光玉あり、捧け持ち歸りて奉祀し屢々雨乞をなすゝに靈驗著しく今に至りて旱天には必ず農民相集りて

祈願をなし、また六月晦日には夏越祓をして五穀成就の奉饗をなす。社殿は權現造りであつて建築の精巧を以て稱せられてゐる。

境内に尾砂子神社あり、池田出雲守長常井原領主として寛永八年卒し嗣なきを以て家絶えんとしたが、乳母尾砂子主家の祭祀の絶ゆるを慨き族長信を以てお家の再興を圖り、許されて池田氏の血食存せしを以て神として祭り、年々一度の祭典をして其功勞を感謝してゐる。

皇太子神社

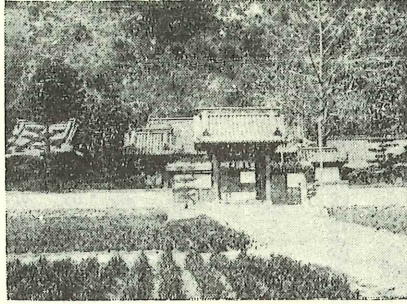
皇太子神社の祭神は正哉吾勝々速日天忍穗耳命であつて、天照皇大神直系の御子である。元弘二年の創立で、老樹枝を交へ井原町中町、下町兩區の氏神である。慶長元年九月毛利中納言の代藝州藏内與三右衛門尉再建す。天保五年九月本殿及釣殿改築、明治十二年拜殿改築す。境内に荒神社あり皇太子荒神社と稱し禰屋堂、十五社と共に井原三荒神と稱す。

武速神社

本社は元山陽國道筋より分れて井原町に入らんとする處、出部村七日市にある。祭神は素盞鳴尊で

あつて、往古は天王宮と稱し後祇園社とも稱へられ、明治初年に至つて武速神社と改められた。社殿は天保十五年に再建し、嘉永二年修覆を加へたものが現今のものである。

此の神社は疫除けの神武巡長久の神として地方の崇信厚く、舊曆三月三日四日五日には火渡り祭を行ひ、舊六月十三日には疫病退散の祈念祭を行ふ。



吉 祥 山 善 福 寺

吉 祥 山 善 福 寺

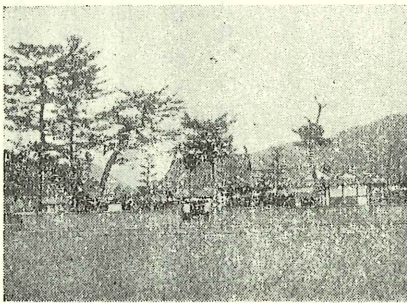
善福寺は井原町の西吉祥山の麓にある巨刹であつて、開基は足利三代將軍義滿で、足利義視は中興の開基である。其以前は足利義氏の舊館であつたが、應永三年義滿の時に至つて館を改めて精舎となし善福寺と稱し、莊田並に梵鐘等の寄進あり足利氏の位牌並に義滿五輪塔今尚ほ存してゐる。

文明十六年毛利元資本堂を再建し、山林等寄進の墨附あり。依つて明治維新後迄門前に制札を建り、現にその礎石がある。正保慶安の頃しばらく火災に罹り、諸堂、古文書、什寶焼失し、其後本堂、庫裏、祥堂、衆寮、山門

鐘樓の造營等ありて結構華麗を極めて居つたが、漸次頽廢に歸しても釋迦堂だけは寛文六年丙午年の建築であつて、奈良時代の様式を模擬し、用材は槻、榎、クサマキを以て巧なる彫刻をなし、古色蒼然として地方稀なる堂宇である。中に華嚴の釋迦佛像を奉安し、柳本正忠夫婦の像を安置す。慶安年間領主池田修理當山を祈願所又位牌所と定め時々參拜且つ寄附されたことがある。末寺は川上郡富賀の淨心寺初め五ヶ寺ある。慶長七年小堀作助より寺領拾石の證文下附あり。住職は開山機舜高全和尚より現住佛海に至る迄三十一世である。

夏目山常樂寺

常樂は字夏目にある。本尊は阿彌陀如來、傳に曰く天平九年行基菩薩の開基であると、されど千有餘年の久しき時勢の變遷と不慮の災害とに依り古文書の徵すべきものなし。古老の口碑に依れば、南斗山金敷寺、北斗山明星寺は行基菩薩の開創であつて、右南北両斗山經營奔走の當時、當山は其中間に位せるを以て、菩薩止住の舊蹟であつて、古書に龜命山常樂寺として名高



夏目山常樂寺

きは即ち當寺のことで、現に舊六月一日の虫祈禱の如き、夏目、倉掛、下町は當寺にて盛大に修行して居る。舊記に依ると寛永年間弘性和尚出で、當寺を再興し、其後天保年間修理を加へ、更に明治二十五年十一月改築したものが現在の建築である。其後大正年間子安大師堂を建立した。篤信者多く參詣人絶えず。昭和五年現住職釋玄空本堂の建立を發願し、檀信徒の協賛により巨額の淨財を寄捨し、莊嚴なる本堂一字を建立した。和尚より現住釋玄空迄十八代、寺は古義眞言宗に属し、本山は京都御堂仁和寺である。

梵鐘 文化九年鑄造

長 照 山 妙 典 寺

妙典寺は文明八年久遠成院日親大聖人の開基である。聖人西國布教の途次備後山田村より出雲地方へ巡錫せんとし井原村に來り、字井ノ口に一の平石あると高座に代へて說法弘通した。有縁の故を以て此所に一草庵を建てて、法華題目堂と稱へ、かの座石を名づけて說法石と云つた。これが當寺開山の緣起である。後元祿十三年妙典寺の寺號許可されたるに當り、本堂を再建し（正徳五年）本理院日遼上人が開山第一世となつた。さきの說法石は寶塔として今尚ほ本堂の前に建つてゐる。

尙ほ境内に最上位經王大菩薩を安置してある。明治十一年高松本社より分靈として勸請し來り地方信徒の祈願所とした。昭和八年十月、日孝師の發願に依り再建した。竣工について本殿、拜殿、門塀及參詣路の電飾等宏壯美觀を極めてゐる。最上稻荷の靈驗あらたかなれば參詣の徒は日夜跡を絶たない。

當寺は後に舞鶴山を控へて眺望絶佳、極めて風致に富める地境にあり、下瞰すれば一眸の裡に全町を映じ來る。觀雪、觀月、讚花の客招せずして相集るのである。境内に二つの句碑がある。

引鴨や水のぬるみもはなれかね 得 月

御命講や油のやうな酒五升 芭 蕉

梵鏡 明治四十丁未年四月八日鑄造。

住職 開山本理院日遼より、現住一恩院日孝に至る十六世。

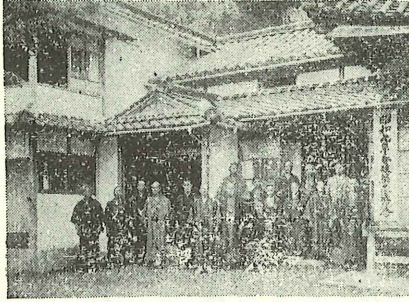
曜明山常念寺

當寺は眞言宗大谷派に屬してゐる。井原町の中央本通りに面してゐる。宗風とは言へ交通便利の地にあることは、地方寺院中の第一である。寺傳によれば遠く鎌倉時代の中期、親鸞聖人の高弟明光

上入關東より備後に巡化するや、其の高弟の一人、一寺を備後廣谷邑に構へて南光坊と號したが、以後血類相承して江戸時代の初期、光明坊明順大徳となるに及んで、寺地を備中國井原邑に移し、寺名を曜明山常念寺と改めたといふ。實に是れ本寺移興の第一世であつて、以後血統相續して、第十七世即ち現住職に到つたものである。其の間六條御殿御役寺として、本山定紋の紫幕を拜受し、領主よりは特に御客寺としての待遇を受け、其の支坊として善念寺（今其の遺跡を字本町裏の石橋名に傳ふ）を有し、其の傳說的寺域の廣大なるより察するも、移興時の盛大であつたことが偲ばれるのである。不幸安永三年大火あり、類焼して殿堂、庫院、鼓樓、鐘樓門等一字を残さず燒盡した後偶々天明の大飢饉に當り、再建の步遅々として運ばず、漸くにして寛政の初年に建てられしもの今の本堂にして、續いて建てられしものは庫院、門宇、鐘樓等である。かくして大火前の廣大なる面影を傳へざるも、其の内部の彫刻の雄大なるは參詣の者目を驚かすものがあつて、特に正面唐狹間の三間及二間連續の雲と波を背景とする總金箔押し大裸龍の彫刻及び、内陣西脇の胡粉色彩の上り龍下り龍の彫刻は實に地方稀に見るものである。

惣持院

本院は元青野村北山にあつて、眞言宗御室派持寶院末で天平拾貳年の創立である。往時は随分盛んであつたが、維新後衰微して建物なども荒廢に委して居つたのを町内の檀家相謀り、大正十五年現今の地字夏目に移したのである。境内には日限地藏尊と觀世音菩薩とを併せ勧請してあり、靈驗著しく善男善女の參拜者相つぎ、香華の絶ゆることはない。



横手山光普庵

横手山光普庵

當庵は寛文三年中の創立である。或は云ふ、延元々年足利尊氏西壹の時母堂興福院を横手山域に駐む。興福院後ち佛門に入り一小庵を設け遂に此地に歿す。故に古來俗稱興閑と名づく。興福院歿後尼僧を以て住職をさせて居つたが、戰國の世横手山城陷るに及んで堂宇を初め寶物御記悉く燒失したと云ふことである。徳川時代に至つて有志者相謀つて一庵を建立す。寶曆年間池田家代官大津宗吉郎兵衛率先して修葺し光普庵と改む。住職は中興智宏より現住中村芳瑞に至る十世であるが、最近淨財數千圓を集めて庫裏の改築をなし、石

垣の修理、境内の擴張等面目を一新した。

法輪山長徳寺

井原町清迫にありて今は癡寺となつてゐる。備中誌に曰く、

法輪山長徳寺 眞言宗本寺持寶院

高貳石五斗 山林除地

堂 方貳間半 本尊阿彌陀不動毘沙門鎮守荒神稻荷

住房 四間ニ貳間 鐘樓堂 方八尺 無檀家

明治六年十月無檀無住の故を以て癡寺となつたが、長徳寺の晩鐘と云つて昔より井原名物の一つとなりて居り、餘韻嫋々として雅音を傳へたものである。今は小さき堂宇のみを存してゐるが、最近一の鐘樓を建て、其の鐘を吊して昔ながらの餘韻を響かしてゐる。

金光教井原教會所

金光教井原教會所は倉掛にある。本部附きの教會所であつて、明治三十年篤信者山岡シメ女により

て創立されたもの、大祭は四月十五日、十二月五日の兩度である。信者は相當の數がある。

出雲大社教井原教會所

出雲大社井原教會所は驛前通りにある。昭和三年三月卅一日大社教本部より設立の認可を経今日に至つて居る。教會長は河野陣一郎氏である。

天理教井原宣教所

天理教井原宣教所は井原町夏目にあり、大正十四年十二月六日の設立であつて、天理教葦津大教會の部屬で、惠陽宣教所と稱してゐる。信者は井原を中心として郡内各地にある。

神理教會所

神理教會所は井原町新町にあつて、天照大神及正一位日車稻荷大明神を祭り、九州にある徳力神理教會所に属してゐる。設立者並に教會長は齋藤進氏である。

井原キリスト教會

井原キリスト教會は井原町紀念通りにある。日本組合井原キリスト教會と稱し、中國部會の所屬である。大正十三年一月一日の設立であつて、傳導區域は井原を中心として西江原出部芳井等であつて、牧師は太田一氏である。

不 動 明 王

井原町倉掛岡本徳太郎方に大日大聖不動明王の祀殿がある。大正十五年五月の創建で、京都聖護院所屬、高屋光泉院の派である。大祭は二月十五日である。

高 野 山 出 張 所

高野山出張所は井原富士の山腹にあり、明治三十五年眞言宗高野山常喜院の出張所として設けられたものである。祭日は舊三月三日、四日で、各方面よりの參詣者は多數である。所内に石槌神社を併祠し、山頂にその奥の院がある。

両 備 子 安 道 場

本道場は昭和七年四月平川惠照氏の建立したもので、伊豫國靈場第六十一番香園寺子安大師を安置し、毎月二十一日その御會を行つてゐる。

金光教藝備教會所

金光教藝備教會所は神高線兩備金光驛より北一丁餘、縣境廣島縣深安郡御野村上御領に在る。現教會長大教正佐藤範雄師の開設する所、佐藤大教正は明治八年秋信仰に入り、九年正月、二十一歳始めて金光教祖に見え神德に浴した。超えて十二年七月神命に従ひ職を廢し専心廣前に奉仕し、翌十



金光教藝備教會所

三年十一月神殿を師の生地建築した。之れが藝備教會所の濫觴である。爾來教勢の進展に伴ひ、明治二十七年、大正八年の兩度、神域を擴張し、何れも改築して現在に至つてゐる。境内廣く舊神殿、舊廣前、記念館、神德書院、教師館、神庫等がある。神苑は上下二段に分れ、松柏鬱蒼として神域の風致は自ら備はつてゐる。五月一日、十二月十日の春秋大祭には前夜祭より露店櫛比し、參拜者相次ぎ、神代神樂等あり殷賑を極める。

一二、名勝舊蹟

1 横手山城 墟

横手山城墟は井原町の西方舞鶴山の頂にあり、現今開拓して隴圃となり、尙は殘礎を存してゐる。足利尊氏其の族畠山頼重をして之を築かしめたといはれてゐる。されば早くより足利氏と因縁あつた關係上、延元元年尊氏西走の時、母堂興福院を此の城に止めた。これ興福院は畠山頼重の女（これには異説あり）なるが故である。其の後足利義教將軍の弟公將をして井原を領せしめた。降つて元龜、天正の代に至り、大内氏横手山城を攻取り、其の臣岡崎藤兵衛尉信基を以て守らしめたが、毛利氏の旗下河合勘解由左衛門清久（川相中山の城主）横手山城を陥れ、移つて之に居る。後氏利氏は旗下柳本八郎左衛門尉正家をして代り居らしめた。慶長五年關ヶ原役後毛利氏削封せられ、小堀遠江守の治所となり、當城もまた廢絶に歸したのである。

2 足次公園と櫻祭

郷社足次山神社の神域一たいが足次公園である。神社の老松を背影として、數百本の櫻樹が全城に

林をなしてゐて、一目千本の感がある。園内には神池があり、神橋が架つてゐる。又日清日露戦役以後の戦病死者の英霊を祭る忠魂碑及元本町長柴原宗助翁の銅像が櫻樹の間に高く聳え、枝益六先生の頌徳碑及大塚信正先生追慕の碑もこの園内に建てられてゐる。櫻花時になると、四月四日の郷社大祭を始めとして十数日間の櫻祭が毎年の行事として行はれる。此の間には招魂祭、文墨祭、先哲祭、福神祭、相撲其他あらゆる催し物、餘興等が日々引續いて行はれ、又各種の興行物数多の賣店が並び、参詣するもの、遊覧するものが引きも切らず、殷賑を極めるのである。夜間は特に青年團の奉仕で無数の雪洞が点火されてさながら不夜城を現するのである。

3 井原堤の櫻

井原が今日櫻の名所として「中國隨一」とまで言はれるに至つたこの櫻の由來を先づ考へて見なければなるまい。この櫻の植付は今より三十年の昔、即明治四十一年の春、時の後月郡長南爲吾氏の企てにより數百本の苗木を郷社神苑内に植付けたのに起因してゐる。其後大正三年、當時の井原町長原田吉平氏が神苑の櫻を分株して堤塘に植えたのが基となり、時々補植を行ひ今日の美觀を呈するに至つたのである。

この盛況を見るに於て只管この両氏の恩恵の賚であることを思はざるを得ないのである。



井原堤の櫻

井原堤は足次公園の前田から小田川に沿うて遡り、新橋々畔の舞鶴公園に至る約二十丁の間のこと
でその両側に並び立つ櫻樹は今しも成長の頂点に達せんとし、
全堤を満たしてゐる。開花時に至れば、堤の上は行けども／＼花
のトンネルである。川向ひの廣い芝生には、町内各料亭が何れ
も臨時出張店を設け、川には數條の板橋を架けて花見の客を待
構へてゐて、晝夜引つきりなしの觀樂境を現出するのである。
堤の花は倒まに川水に映じて春日に花の雲を巻き、夜は雪洞と
共に靜かに影を水に溶け込ませてゐる風情は實に一刻萬金であ
る。また時には此の水に萬燈流しをすることもある。此の晝夜
の美觀何といつても「中國隨一」「花は櫻よ櫻は井原」このモットーは蓋し過言でないことが、一た
び來觀したものには肯かれるであらう。

4 舞鶴公園

井原堤の花のトンネルを行ききつた處が新橋で、新橋の袂から井原富士へかけて川に沿うた地域が舞鶴公園である。往古はこの一帯が杉林であつたのが竹林と變り、竹林が開かれて公園となつたのである。此處に殊に多い松、柳の緑の梢の間から堤の櫻花の隠見して、水に映つてゐる様は實に一幅の繪巻物である。又秋には川岸にある櫨の老木が紅葉しては水に映じ、又梅樹もあつて冬は園内に其の香を放つて居るので、年中小學生の團體を初めとし、多くの團體觀光客の足の止め場となつてゐる。

5 對鶴公園附お月堂

新橋の東方、權現山の麓一帯が對鶴公園である。こゝにも櫻樹、楓樹が多く、小亭もある。花時は折詰を携へて上る男女が少くない。又井原堤の川向うに跳めながら裾道傳ひに上り下りするのも亦興趣があらう。

園内に一字の堂がある。お月堂といつてゐる。毎年冬至祭の日には善男善女の參詣するものが終日絶えず、幾千を算する程である。又當日此の堂で南瓜の味噌汁の接待が行はれるのである。

6 新橋附煙火大會

町の本通筋を上つて行つた處、小田川を横ぎつて架つてゐるのが新橋である。今はその昔文人畫的板橋の面影はなく、大正十二年五月の竣工で、二穹狀をした全長五十間の大鉄橋と變り、最近又板張りをアスファルトに改造されたのである。由來橋畔一帯は風光最も絶佳な處で、上には井原富士の聳えあり、下には舞鶴公園を控へ、前には對鶴公園を眺め、向う遙かに清泊溪を望んでゐる。此處に來て賞めずに歸る野暮は一人も無いのである。

夏季は此處に夕涼みに集るものが特に多く。涼風を浴びつゝ川瀬に碎ける月影を眺めて立つのも一興である。井原小唄子は「夏の涼みは新橋たもと、團扇片手のやさすがた……」と唄つてゐる。本町の中備時報社は毎年の行事として、夏季の一日を選び此處に煙火大會を開催する。橋の上下から山麓にかけての數ヶ所の仕掛煙火や、晝夜に亘つて打上げる數百發の打上煙火で、觀覽客は町から橋へ、橋から川原へと詰めかける。實に幾萬の人出で賑ひ切るのである。此の日に限り汽車も自動車も各驛から割引して觀覽客を送り迎へする。

7 長 川 の 螢

井原町の西北端芳井町に通ずる山麓の縣道に沿うた川のあたり數丁の間を「長川」といつて、古來

螢の名所として附近に知られてゐる。川の向う岸一帯は竹藪續きである。時季になると數千萬の螢は藪から山へ亘つて、この川に影うつして飛び廻り、時には螢合戦の行はれる事もある。觀客の集まるものも甚だ多い。

8 丸田の妙見

丸田の妙見は町の南郊、円形の田の中央にあつたが今は學校の運動場の中になつた。開運尊星北辰妙見大菩薩を安置してゐる。此の靈地の由緒は詳かでないが、北條時代の以前に起因し、足利時代には妙見宮及大塔の存在してゐたことは古吏に明かである。其の後文明年間日蓮宗の聖僧日親、法華經弘通の途次、字井ノ口に來り妙見宮再興のため、一平石を壇にして説法をした。現に妙典寺境内に曼陀羅碑となつて残つてゐる昭和二年大塔を再建し記念碑を立てた。山下秋堂の銘がある。

巋然大塔 高聳山郭 傍樹玉珥 永存梵鐸 千古依然 靈驗灼燭 人其不問 信諸碧落

9 日 芳 橋

井原を出て東せんとするには必す小田川に架せる元國道上の日芳橋を渡らねばならぬ。今は長さ六

十間、幅員四間のアスファルトの大鉄橋となつてゐるが、往古増水の際の渡川には涼臺の如きものを用ひ、之に旅人を載せて昇ぎ渡してゐた。然るに安政四年十一月初めてこゝに大板橋を架設し、日芳橋と稱した。地に東西行旅の要衝に當つてゐるを以て、此の橋一たび成つてより、大いに交通上の利便を得たのである。橋畔に有名なる日芳橋碑がある。阪谷朗廬の撰に係つてゐる。

日芳橋銘并序

安政四年冬十有一月、中備七日市驛芳井川大橋新成、驛爲西道郵傳之一、其水平常清淺、揭厲可過水潦時至、濁浪澎湃、雖嚴檣急報、弗通、最爲西諸侯之患矣、而古來未有橋也、一橋府縣令友山君來治之十年、政成歲豐、肆廛大開、君乃深慮建議、命吏員角田享等、與父老計、兩岸疊石、修舊堤長數十丈、架橋於其上、橋二十丈、濶丈有二尺、用工三閱月、費金若干、咸不累民、旣成、就驛與川、各取一字命曰日芳橋、於是數歲之險、一朝變爲坦路、東西行旅、永無阻礙、可謂盛舉也、父老懼其事失傳繼者或怠、來請銘、銘曰

川流不修 陳國致尤 徒杜不設 亞聖垂說 矧斯官程 遼通崎陽 蠻夷有機 一水匪微

長橋穹隆 如虹如龍 來者奕奕 光耀古昔 萬旅欣欣 芳聲四傳 後者弗繼 謗暨永世

銘揭橋傍 以告無疆

安政五年夏四月 西江原興讓館教授阪谷素撰

10 道 祖 溪

有名なる明治池の水流れて才兒の野に至る。其の間の一大溪谷を道祖溪といふ。溪には大小幾多の飛瀑懸り、清流奇岩を嚙む。四圍鬱蒼たる老木に怪石を配し、木石の妙實に冠絶す。溪谷の麓に一寺あり禪洞山永祥寺と名く。屋嶋に源平交戦の時戦功のあつた那須與市宗高の開基であつて、宗高公の像を安置してゐる。その外附近に那須與市の墓を始め古跡多く、四時杖を曳くもの踵を擦す。

11 櫻 溪 草 廬

櫻溪は井原町より西北二十丁、芳井町築瀬にある。

阪谷朗廬先生江戸遊學の後、郷里川上郡九名村（今日里村）に歸省中嘉永四年八月地を築瀬村櫻溪に卜して塾を開き子弟を教導された。先生の盛名を聞きて學生四方より集まる。同六年興讓館創立に至る迄二ヶ年間先生垂帷の地である。大正二年有地者によりて先生の草廬を修復し碑を立てて、永く高儒垂帷の遺跡を顯揚し、山紫水明の此の地に一段の誇を加へたわけである。

12 天神峽

天神峽は井原より約一里芳井町の北端小田川の上流嵯峨たる山嶽峙ち、松、杉、樅、楓、槭等の老樹、蒼鬱天を蔽ふ處に一條の坦路が通じてをり、路上の一祠に菅公を祀つてゐる。峽間の流水潺々として碧巖白砂にそゞぎ、澄澈鏡の如くである。秋霜の候には楓槭紅葉して錦を装ひをなし、影を水面に落して燦然たるものがある。阪谷朗廬曾て賞して「小嵐峽」と名づけた。

先年中國民報社縣下勝景募集に際し、十景の内に入選して、縣下有數の名勝地となつたのである。芳井町に於ては天神峽保勝會を設置し、年々相當の經費を投じ、勝景保存に努むると同時に無料休憩所を設けて、湯茶の供給をなすなど一般遊覽者の利便を計つてゐる。

白石丹崖碧水流　楓林飄錦入清愁　多情未易著詩句　丞相祠邊秋盡頭　朗廬

嵯峨野嵯峨野宛がら嵯峨に似たるかな

山の姿も水の流れも

忠彦

13 龍頭瀧

地方屈指の名瀑として江湖に其の名を知られてゐる龍頭の瀧は備後山野村の山野峽にある。井原よ

り約四里、定期自動車があつて峽下の田原迄約四十分で到着する。山腹を辿りながら瀧壺に至る小徑がある。清流は翠巒を繞り幽谷を縫ひつゝ此處に至つて俄然碧絡を破つて落下するもの二百尺。瀧壺の側なる「鎌ヶ峰」と稱する絶峰は上方に彎曲して將に落ちかゝらんとするの狀、殷々轟々として山峽を振動せしめる爆聲と、濛々たる水煙とは、見るものをして肌粟を生ぜしめずにはおかないのである。

此の附近に溪谷美を以て知られてゐる猿鳴峽並に原谷温泉、巖窟權現等がある。近來井笠鐵道井原驛を起点としてハイキングコースの適當なる候補地として喧傳されてゐる。

14 山骨峽 蛇の穴

蛇の穴は井原を去る西北約三里（此間定期自動車の便がある）共和村鳴川右岸の山腹にある鐘乳洞であつて、恰も虬蛇の巢窟に似てゐるので此の名がある。洞口は狭小なれど漸く進むに従ひ廣大となり、數個の房穹狀のものからなつてゐる。大きなものは廣さ二十五坪、高さ九尺もある。洞内を低下して極處に至れば轟然頭上に鳴動を聞く。蓋しこれは鳴川の川底であつて、その水響の傳はるものである。又附近一帯奇岩兀忽として聳え、新緑紅葉の眺めは更に一段と優つたものがある。これが山骨峽で、又中國耶馬溪の稱がある。

一三、先哲遺賢

池田筑後守可軒

偶成

示雲涯

慚被功名誤一身
幽栖此日又逢春
春風芳草五洲夢
淚洒當年舊寫眞

野鶴來耶野意多
人間消息送如何
薇山遙觀武函月
俱著山陽一笠蓑



池田筑後守可軒
(大津寄掛一氏所藏)

あゝ何たる悲調ぞや、この詩を読むもの誰か
井原の舊領主池田筑後守可軒公の往年の心事
に對して、追憶同情の涙を灑がざるものがあるぞ。
池田筑後守長發（可軒はその雅号である）は池田加賀守長休の四子であつて江戸に生る。全族長溥の養子となり、弱年にして昌平黌に入り才學文章共に秀で有爲の青年學

徒であつた。として重んぜられて居つた。家職を襲ぎ千貳百石を賜はり小普請役より外國奉行迄累進した。年二十有七にして拔擢せられて遣歐使の主班となり、文久三年十二月二十九日幕命を奉じて鎖港談判の爲め佛國軍艦リモンス号に乗込み、元治元年三月十六日佛國巴里に着す。ナポレオン三世之を歡待し親しく制度文物を視察せしめ、天下の大勢を暗示した。筑後守は大に悟る所ありて他の列國との交渉をやめて七月十七日歸國し、堂々として五ヶ條の建白をしたが、當時國內は攘夷論が盛んであつて到底用ゐらるべくもあらず、幕府は朝廷を憚り六百石を削り蟄居隱居を命じた。けれども其識見その抱負は建議書と共に後人をして起たしむるの慨があつて、明治維新後は悉く事實となつて現はれた。前掲の一詩は當時奮勃たる滿腔の經綸施すに由なく、空しく幽居の際詠じたものであつて、後者は雲涯に宛てゝ望郷の情緒を寄せたものである。後許されて軍艦奉行となり勝安房守と共に名聲を馳せて居たが、不幸にして病に罹り井原に歸任の途、岡山の假居に於て歿した。享年漸く四十有三、井原町は永久にこのヤングヒーロー、筑後守長發君に矜式して益々字内に潤歩するの人材をつくるべくつとめねばならぬ。

阪 谷 朗 廬

阪谷朗廬は興讓館の開祖である。名は素、字は子絢、素三郎と稱し、後希八郎と更めた。姓は阪谷

氏、川上郡九名村阪谷良哉の第三子である。文政中良哉幕府代官の屬吏となり大阪に寓し、朗廬をして句讀を奥野小山に受けしむ。小山朗廬を以て遲鈍なりとす。後大塩中齋の門に遊ぶ、門人多く之を愚弄す、中齋獨り之を偉として曰く此兒異日必ず大成すべしと、果してその言の如し。良哉江戸に移るに及んで同郷の昌谷精溪に記す。精溪之を教ふること懇切、業日に進む。明年古賀洞庵の門に入り研鑽益々勤む。朗廬暇あれば遊行して必ず記行文を作る。既にして母の病を聞いて九名村に歸省した。諸藩より頻りに招聘されても母老いたるの故を以て固辞す。

嘉永年間帷を築瀬村櫻谷に垂れて子弟を教育し、崎嶇たる山路を攀ぢて毎月歸省し母への歡を奉じた。一橋家の吏角田某部氏に謀りかゝる巨儒あるを何とて疊を起さざると、即ち地を後月郡西江原村寺戸に相して學舎を建て興護館といふ。四方の學徒雲集し、西は九州各地より、東は松前に迄及んでゐた。

文久年間母歿し悲痛して其の喪に服した。明治元年廣島侯の聘に應じて賓師となり、米三百石を賜はり、優遇具さに至つた。後陸軍省及正院文部司法二省に歴任したが、官その德に稱はず且つ年老い病多きの故を以て職を辞し、春屋學舎を建てたが舎が漸く落成したのに病に罹り六十才を一期として永眠した。朗廬は學程朱を宗とし、性理に溺れず訓話に泥まず、識見高邁夙に尊王開港の説

を唱へ、白鹿洞規を掲げて生徒を薰陶す。最も文章に巧みにして千言立どころに成り、詩に巧みにして書を善くし書風亦脱俗高潔である。エスペラントに卒先して世界通語の必要を説き、言文の一致を試み兵式体操の普及を論じ、森有禮、加藤弘之、福澤諭吉、西村茂樹、箕作麟祥、中村正直等と明六社を組織して意見を交換し、大に成すあらんとしたるに中途にして逝去されしは誠に學界のため惜むべきであつた。而も興讓館は阪田丈平奥田諫山山下秋堂皆その衣鉢を襲ぎ、八十余年の今日迄一日も呶呶の聲の絶えたことはない。

坂 田 警 軒

坂田警軒字は夫郷、通稱は丈平、警軒はその號である。父名は端一、母は平尾氏、天保十年五月五日川上郡九名村に生れた。嘉永六年朗廬興讓館を寺戸に起すや、警軒年十五往いて從學した。朗廬之を見ること子の如く、警軒もこれに事へること慈父の如くであつた。業大いに進み、擧げられて都講となつたが生徒は皆よく之に心服した。萬延年中肥後に遊び、大下犀潭の門に入り、井上梧陰、竹添井々等と同じく木門の三才と稱せられた。尋いで又江戸に遊び安井息軒に従ふ。同門推して温厚の長者とした。既に歸つて備前藩池田氏の聘に應じて賓師となつた。明治元年朗廬廣島藩の聘に

應じて赴くや、警軒繼いで館長となり寺戸村に移る。四方從學の徒は益々多かつた。既にして山田方谷の閑谷塾を督するや、招かれてこゝに至りて教授す。明治十二年選ばれて縣會議員となり、繼いで議長となつた。全十九年京都同志社の師となり、全二十三年衆議院議員となり後又再選した。其の後慶應義塾、高等師範學校、斯文學會、哲學館等の講師となつたが到る處教導懇切生徒皆心服せないものはない。

岡山縣教育會亦功績章を贈り、その縣下教育多年の勞を謝した。同三十二年八月十五日年六十二で歿した。警軒儀容端莊、恭謙にして沈厚、寡默、喜怒色に形さず、其の學高遠に馳せず迂疏に流れず、人を誨ふるに材に従ひ、その好む所を以てして強ひず、故に及門の人多くその長する所を以て名を朝野に成し、德化一郷に遍く、牧童馬丁に至るまで亦禮讓を知つた。子弟の薄行ある時は父兄戒めて「恐らくは館長の聞く所とならん」と、畏敬せらるること此の如く、再三衆議院議員に選ばれたのも皆この與望に出たのに外ならないのである。

千 村 臥 牛

千村臥牛名は信、字は樂天、通稱を作助といひ臥牛は其の號である。其の先は松山藩から出たので

之を以て號とした。父良宗商となり、妻中村氏を挈へ井原に來住して臥牛を生んだ。臥牛は日々藥石を賣つて大いに産を起し富を致した。然れども讀書を嗜み尤も詩を善くした。當時領主郷校を興さんとする際、臥牛は其の事に當り頗る盡瘁した。仍て領主賞して近思錄を賜ひ又着袴を許された。安政四年八月十日病歿した。享年六十一。

三宅竹涯

三宅竹涯通稱は河内、別に竹谷と號してゐた。長門の長男である。世々井森神社の神官であつた。幼時から丹青を好み、京都竹石の門に學び、後九州に至り田能村竹田、僧鐵翁に師事した。猷健なる筆致の妙は今尚ほ作品として地方に残つてゐる。業成りて井原に歸り神職を襲ひ、餘暇には子弟を集めて讀書習字を教授した。萬延元年三十四歳で歿した。男兵部通稱定義家を襲ぐ。

大津寄花堂

大津寄花堂諱は彝、字懿郷、幼時は吉之助と稱し、晩年は花堂の號を以て通稱とした。井原は池田氏の采邑地であつて、花堂の祖考兄相繼いで邑宰に任じ、花堂は分資別居して副宰となつた。邑主

築後守甚だ之を愛し、花堂の二字を自書して賜はつた。即之を扁額として號とした。幼時より菅茶山の門に入り漢學を修め、賴山陽賴杏平等當世の名士と交る。性淡泊高雅にして最も富岳を愛したこと、紙龜を友として泥龜の曲を愛唱したことなどは人のよく知る所である。明治十七年十月二十二日病歿、享壽七十九。

萩田 雲涯

萩田雲涯名は嘯、字は口肅、通稱は長造、雲涯は其號で荆邨といふ別號もある。幼より穎敏伶俐、長じて父竹次の印刻業を繼ぎ進んで篆刻を細川林齊に學び、又中島雲域の門に入つて書道を學び、日夜勉勵遂に菱湖派の神髓を得、延いては鐵筆の勁健端妙、古篆の眞秘をも悟つた。家に歸り業務の餘暇阪谷朗廬に従ひ漢書を讀み、詩を學び、河野鐵兜日柳燕石等と交つて居つた。餘力を以つて和歌俳句南畫をも學び皆佳境に達した。後には安藝侯池田筑後守等より招聘を受けたが、老母奉養の故を以て謝辭した。明治六年八月一日四十二歳で病歿した。

大塚 信正

大塚信正は井原町倉垣式内郷社足次山神社の祠官で、國家者である。父は信修、母は秀、幼にして

備中の宮内に遊び國典を修め、業成りて家に歸り以倫館と云ふ學舎を建てゝ子弟を教授す。性寛厚にして人と争はず、最も和歌に長じ、兼ねて國史古文に通じた。明治三年倉敷縣の命を受けて後月郡の神社取調を命ぜられ具さに復命した。全五年足次山神社の祠官に任ぜらる。九年元之小學校助役となり十年首席教員となり十一年齊秀小學校に轉じた。次いで皇典講究所委員補と爲り、川上小田、後月郡神官教諭擔當として後進の爲めに國典の教授をなし、同二十五年三月六日五十八歳で病歿した。子信男家職を襲ぐ。大正五年舊門弟子相謀り追慕之碑を足次山神社神苑内に建設した。碑文は木堂犬養毅先生の揮毫に係る。

齋 藤 百 外

齋藤百外は井原町の人、通稱を政治郎といひ穀物商を營んでゐた。眼中一丁字無く、壯年に及んで無賴の徒に交つて賭博の道に入り、郷黨の指揮を受けた。年六十幡然悔悟して思ふに「精神一到何事か成らざらん、人道を履んで一藝に名あるを得れば吾が願は足る」と自ら書家たらんと欲し、荻田雲涯に就いて、いろは單語より習字を始め屢々興讓館に至り教を受けた。かくすること十數年、七十餘歳で遂に一家を成した。即ち筆を載せて全國漫遊の途に上り、東京に至り、三條、東久世の

諸公に謁し、海舟、鐵舟の名門を訪ねた。鐵舟は百外の經歷を聞き感奮措かず、快く十數葉を書して與へたといふのである。尙ほ仙台青森を経て北海道に至り、歸途北陸、山陰を過ぎ、隱岐に渡り更に九州を巡り、明治二十八年九月鹿兒島に歿した。年八十二。身軀長大、白髮長く垂る。筆勢遒勁、人爭つて之を珍藏してゐる。

川 上 花 外

川上花外は通稱佐助、花外はその號で、後には晚成堂市猿ども號した。俳句を善くし、遠州流の生花を善くした。何れも宗匠として門弟多く、畫も巧みであつて別に小番、柚翠などゝ號し、作品は所々に藏せられてゐる。又篆刻を萩田雲涯に學び之を以て業とした。明治三十一年五月二十五日、五十七歳で歿した。後門人相謀つてその碑を妙典寺の境内に建てた。

河 合 栗 邨

河合栗邨 本姓は吉井氏、名は龍、字は子淵、通稱は春畝で、嘉永四年三月淺口郡西阿知に生れた。河合家に養はれて其の姓を冒して本郡芳井町に住し、後井原町に移住した。幼にして南畫を白鹿齋

庵に、漢詩を鎌田立溪に學び、業成り家に歸つて健筆を揮つた。山水、花鳥は最も其の得意とする所であつて、其聲價は年を経るに従つて益々高く、今日に至るも各地爭ふて其作品を襲藏す。性恬淡滑稽最も語呂合に長じてゐた。明治四十一年三月十四日歿した。年五十七。町内光普庵の墓地に葬る。子文林家を襲ぐ。

枝

益

六

枝益六は廣島縣士族で、舊福山藩阿部侯の臣技銀右衛門の長男である。明治四年始めて身を教育界に投じ、大門、井原、福山の各小學校長、廣島縣比婆、世羅兩郡視學、愛知縣農林學校教諭を歴任した。此の間實に三十九年であつた。而して其の過半は本郡教育界にあつて井原に居住してゐた。

明治九年井原小學に赴任せられて以來本郡教育の中樞に立ち、確固たる大方針の下に後進を誘掖された。明治十七年一月文部省は記念品及賞牌等を贈つて其効績を表頌した。當時稀有のことであつた。明治四十二年五月十一日愛知縣安城町に於て歿した。享壽六十三。氏は教育の傍ら人類學の研究に従事し、其發掘蒐集したる原始時代の石器は今尚ほ帝國博物館に寄附陳列され、其研究資料は當時人類學會雜誌に登載せられて學者の注目を引き、全會より地方委員を囑托されて居つた。

柴原宗助

柴原宗助氏は井原町の名門柳本甚右衛門の次子である。幼い時から興讓館に入り、阪谷朗廬先生に就いて薰陶を受けた。その才學その文章その辯論等輩を抜き、有爲の人材として囑目された。備中高梁柴原家を襲ぎその姓を冒す。中央に出で、板垣退助氏の組織せる自由黨員となり活躍した。後ち岡山縣會議員となる。明治三十一年井原町長として迎へられ權現山林の拂下、井原小學校の大建築、記念通りの新設、高等女學校の創設、電話架設の請願、鐵道期成同盟會の設置等、常に第一線に立つて活躍した。明治四十三年三月病により高梁に於て歿す。享年六十三。氏は資性豁達にして識見高く夙に歐米文化の眞髓を悟り、辯論と座談とは最も得意とする所であつた。大正新報社長、矢吹延一氏の發起にて昭和四年四月郷社神苑内に其銅像を建設した。草稿を手にして獅子吼する風姿颯爽として思出多き横手山を睥睨しつゝ立つてゐる。

河合文林

河合文林は栗邨の長男である。本町の人、幼にして畫才があり、小學校を卒へて後福山に至り畫を藤井松林に學び、尋いで京都に出で今尾景年の門に入り寫生の奧妙を極め、木島櫻谷と共に景門の

二俊才と稱せられた。中途病に罹り歸郷し、靜養すること十餘年其の間意の通する所筆に任せて丹青の技を娛とした。父栗郎の作と共に今尚は大に地方に重んぜられてゐる。明治四十五年九月一日年三十八で歿した。

瀧 本 遲 庵

瀧本遲庵は幼名を謙造と稱し後ち森平と改む。遲庵といふのは其の雅號である。井原町田中保造の次男であつて瀧本森助の養子となり、其の姓を冒した。菓子並に酒造を業とし、家道益々榮えた。詩歌に巧みであつて殊に畫に妙を得、その作品は今尚所々に藏せられてゐる。大正五年九月一日八十二才の高齡を以てその家居に永眠した。男淺五郎孫文一夭折し養子慶一襲く。

千 村 薇 陽

千村薇陽は通稱作五郎、薇陽は其の雅號である。高梁中村家より入つて其姓を冒し藥種商を営んでゐた。明治二十二年八月推されて町村政施行第二期の井原村長となり在職中公債を起して財政を政理し、尋で中備製糸株式會社の社長となり、井原銀行の重役を兼ね實業界の爲め盡瘁して功勞少な

からず、吉備の野に大本營を進められし時功勞者として拜謁を賜はつた。薇陽は性質温厚円満にして深く佛教を信じ眞宗東本願寺の財政を擔當せしことあり。詩を善くし又能書家なりしにより其の詩集も發行され書は各所に襲藏さる。大正七年三月五日七十五歳を以て家居に歿す。

有岡重太郎

有岡氏通稱重太郎、安政四年九月十六日井原町に生れた。資性温良恭儉、幼より家を襲ぎ拮据經營よく家政を整へた。

井原町會議員、所得税調査委員、後月郡會議員其他諸會社の重役等に歷職し、晩年與望を以て井原町長となり、町教育の改善に道路の開通に力を注いだ。就中縣下第一と稱せらる小學校の大講堂の建築に至つては、一意専心畫策その宜しきを得たること等其功績顯著である。講堂の竣工を見るに及んで遽然卒去した。時に大正十一年四月二十六日、年六十有六であつた。

柳本瀧三郎

柳本瀧三郎氏柳本甚右衛門の長男であつて幼にして素讀を興讓館阪谷朗廬先生に學び、長じて家名

を襲ぎ井原庄屋となる。後ち志を實業に轉じ井原銀行を創設し其頭取となり、井原織物會社々長岡山縣農工銀行監査役等を勤め、大正十一年九月享壽七十九にしてに歿した。性温厚篤實にして人に重んぜられてゐた。

池田寅治郎

池田寅治郎は井原町猪原池田宮六の次男に生れ、幼にして後月中學並に興讓館に學び、明治十八年九月京都同志社に入り、後ち慶應義塾に轉じ卒業後母校の英語教授となり、廿八年山陽鐵道に入りて受拂掛長となり、三十年八月村井兄弟商會上海支店長に轉じ、後ち工業部長を命ぜられ明治三十七年煙草專賣局技師となり、三十九年四月勳六等に叙し瑞寶章を授けられ高等官五等に陞叙さる。

後ち辭して東亞製粉株式會社取締役、寶田石油株式會社取締役外七會社の重役を兼ね、大正四年衆議院議員に當選し、全八年將に第二回立候補を宣せんとして病に罹り、大正十四年十月二十三日鎌倉材木座の自邸に於て永眠した。享年六十有二。君は資性聰明而も精勵勤勉一旦志を立てしことは徹底させねば止まぬ。高處に着眼して事を處する機敏客と接するや談論風發眞に一世の快男子であつた。興讓館の基本金募集並に財團法人組織に就て渾身の努力を傾注して其成立に努めたことは世

人の記憶に新なる所である。

小川 豊三郎

小川豊三郎諱は觀海、東洋と號した。本町高橋瀬平の二男に生れ、小田郡金浦町吉濱の小川家を冒し、今井村廣濱渡邊玄敬の女を娶り、井原町に住した。資性溫順、初めは井原銀行の支配人となり、傍ら町會議員、郡會議員を歴職し、大正十一年選ばれて井原町長に就任し、町村長會長をも勤めた町長就任中高等女學校の移管、産業の獎勵、道路の改善等に特に力を盡した。女學校の縣營に就ては事未だ成らざるに先だち、第二期在任中昭和三年十一月二十六日逝去した。享年六十又六。

瀧本 丈太郎

瀧本丈太郎は緣淵と號し、幼にして興讓館に學び、坂田警軒に師事した。十八にして父を喪ひ、家業を繼承し専ら醬油の醸造に力を致して其の聲價を發揚した。井原村會議員、同參事會員、同副議長等に當選し、又所得稅調査員、大藏省相續稅審查員、岡山縣醬油醸造同業組合副組長等をも勤め井原銀行取締役頭取、二十二銀行取締役、岡山農工銀行監宜役、同取締役、中備製糸株式會社取締

役等に歴任し殊に井笠鐵道株式會社の創立に力を盡し、後社長となつて自ら其經營に當り以て今日發達の素地を造つた。次で岡山縣濟世顧問を命ぜられ、地方濟世事業にも努力する所があつた家業の傍ら詩は田邊碧堂、藤波千溪等に學び、畫は津田白印に學んだ。昭和四年一月十一日七十四歳で歿した。男丈太郎亦襲名して家職を襲ぐ。

一四、井原名物

1 井原牛蒡、松茸、芋

井原牛蒡の特色は香りのよいことと、一旦乾いても水氣を與へると直に原形に復することであつて松茸、芋と共に井原名産の随一であつて、各地に輸送され居ることは産業欄に詳記してある。

2 朝日羊羹

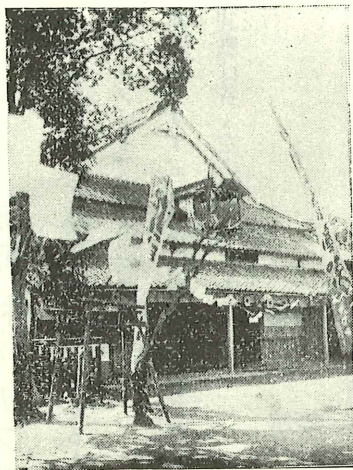
朝日羊羹は其の起原古く夙に名聲を遠近に馳せてゐる。其の甘味と風味とは一種獨特の長所があつて、如何なる都會の名菓も追隨を許さない。長期の保存に耐え、家庭用に、贈答用にも殆ど絶對的地位を確保してゐる。

3 櫻羊羹、櫻饅頭、櫻餅、櫻せんべい

何れも全町至るところの菓子店にあり殊に櫻花爛漫の候となれば、種々の工夫を凝らして製造し、各地への土産物として盛んに販賣されてゐる。

一五、劇場とキネマ

劇場とキネマ



井原劇場

井原町の娛樂機關としては井原劇場と朝日館キネマとがある。井原劇場は紀念通にあつて、井原町

有志の共同出資なる共樂會の所有である。不定期なれども絶えず演劇、活動寫眞其他各種の催物があつて賑ひを呈してゐる。

また時代の寵兒たる活動寫眞常設館としての朝日館は驛前通りにあり、大衆的キネマファンのために最優秀映畫の上映に大童である。

一六、旅館、料亭、カフェー

旅館 料亭 カフェー 檢番

町の發展に連れて逐年其數を加へてゐるものに旅館、料亭、カフェー等がある。目下料亭（旅館業）カフェー、檢番の三である。

花香紛々サービス満点情緒綿々歡樂の別世界にあるネオンサインが客足を呼んでゐる。其數は各々左の通りである。

料	旅		
料	亭		
カ	フェー		
置	家		
飲	食		
店			
		三	〇
		三	七
		三	六

一七、井原商工會沿革

附井原商盛會

本町實業の獎勵發達を圖るの目的を以て、明治四十二年四月井原實業協會を組織し、商工業の指導開發に努めた。爾來年と共に大いに面目を一新し、一般商工業の獎勵は因より、商業部たる商盛會を活動せしめて、商勢の擴大強化を圖り、又力を商取引の改善に致し、或は竹細工及籐細工の講習を行つて家庭工業の基礎を作り、殊に中國隨一井原櫻の宣傳に努めて外客を誘致し繁榮を計る等絶えず活動を續けてゐる。昭和九年三月二十五日井原商工會と改稱し、益々本町商工業の發展に貢獻してゐる。初期以來の役員左の如し。

明治四十二年五月

會頭

目崎勝吾

幹事

野宮定市

副會頭

瀧本丈太郎

小川豐三郎

理事

有岡重太郎

杉原茂市

河合覺之助

萩田元治郎

藤井眞一

評議員

大	岡	井	大	大	桑	山	長	長	小	久	高	森	藤	平	平	森	瀧	平
津	崎	上	西	隅	田	本	野	野	川	安	橋	田	川	川	幸	本	川	宗
寄	晋	福	儀	近	庄	三	雄	彌	豐	勝	誠	秀	元	宗	定	太	文	太
定	三	松	助	藏	郎	磐	一	作	三	郎	三	吉	次	郎	吉	郎	一	郎
造																		

大正元年十月

理事
副會頭
會頭

藤	河	有	瀧	原	倉	杉	乘	乘	岸	瀧	荻	岸	有	柳	平	渡	渡
井	合	岡	本	田	橋	原	藤	藤	本	伊	田	岡	本	本	井	邊	邊
真	覺	重	丈	吉	文	茂	誠	新	元	文	積	林	吳	太	富	章	就
一	助	郎	郎	平	次	市	之	郎	郎	一	郎	郎	三	策	郎	策	一

大正元年十一月

理事

長野 英一

大正元年十月

幹事

千原 冲太郎

小川 豊三郎

杉原 茂市郎

岸田 伊三郎

萩田 元治郎

平川 宗太郎

倉橋 文次

森 幸太郎

平川 定吉郎

平川 宗太郎

藤田 元次郎

森 秀吉郎

高橋 誠三郎

久安 勝次郎

小川 豊三郎

長野 彌作

桑田 雄一郎

大隅 近藏

大西 儀助

井上 福松

岡崎 晋三

大津 寄定造

渡邊 就一郎

平井 富太郎

柳本 吳策

有岡 林三郎

岸田 積郎

萩田 元治郎

岸田 伊三郎

乘藤 新太郎

乘藤 誠之郎

杉原 茂市郎

大正三年三月

會頭
副會頭

理事

幹事

評議員

森	柳	大	平	高	倉	荻	岸	杉	小	千	長	藤	河	有	瀧	原	倉
	本	西	川	橋	橋	田	伊	原	川	原	野	井	合	岡	本	田	橋
幸	吳	儀	定	誠	文	元	三	茂	豐	冲	英	真	覺	重	丈	吉	文
太	策	助	吉	三	次	郎	郎	市	郎	太	一	一	助	郎	太	平	次
郎																	

有	柳	平	渡	大	岡	井	大	大	桑	長	長	小	久	高	森	藤	平	平
岡	本	井	邊	津	崎	上	西	隅	田	野	野	川	安	橋	秀	田	川	川
林	吳	太	就	寄	晉	福	儀	近	庄	雄	彌	豐	勝	誠	元	宗	定	定
三	策	郎	一	造	三	松	助	藏	郎	一	作	郎	郎	三	吉	次	郎	吉

栗山源四郎	渡邊德太郎	猪原丈平	定敏嘉三郎	岸本岩太郎	瀧本慶一	熊谷・光藏	大山治平	佐藤信吾	千原冲太郎	藤田光三郎	佐藤實次郎	倉橋文次郎	杉原茂市	乘藤誠之郎	岸藤新太郎	萩田元治郎	岸積郎
-------	-------	------	-------	-------	------	-------	------	------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-----

大正六年十一月

評議員

幹事

理事會頭

森川秀吉	平川宗太郎	平川定吉	森幸太郎	柳本吳策	大西儀助	平川誠吉	高橋誠三	倉橋文次郎	萩田元治郎	岸伊三郎	杉原茂市	小川豐三郎	千原冲太郎	長野英一	藤井眞一	河合覺之助	有岡重太郎
------	-------	------	------	------	------	------	------	-------	-------	------	------	-------	-------	------	------	-------	-------

佐藤實次郎	倉橋文次郎	杉原茂市	乘藤新太郎	岸伊三郎	岸積郎	柳本吳策	平井富太郎	渡邊就一	大津寄定造	岡崎晉三	井上福松	大西儀助	大隅近藏	桑田庄三郎	長野雄一	小川豐三郎	久安勝次郎	高橋誠三
-------	-------	------	-------	------	-----	------	-------	------	-------	------	------	------	------	-------	------	-------	-------	------

理事	會頭	大正十年十二月	理事	大正十年三月	評議員	大正六年十二月
長野英一	小川豐三郎	佐藤彦右工門	有岡寛二	瀧本深策	栗山源四郎	渡邊德太郎
					猪原丈平	定敏嘉三郎
					岸岩太郎	瀧本慶一
					熊谷光藏	大山治平
					佐藤信吾	千原冲太郎
					藤田光三	

幹事

評議員

長	小	久	高	森	平	平	森	柳	大	平	高	倉	荻	岸	杉	小	千	佐
野	川	安	橋		川	川	本	西	川	橋	橋	田	元	伊	原	川	原	藤
雄	豐	勝	誠	秀	宗	幸	吳	儀	定	誠	文	治	三	茂	豐	沖	彦	
一	郎	郎	三	吉	郎	吉	郎	策	助	占	三	次	郎	郎	市	郎	太	工
																		門

大	藤	千	藤	佐	倉	杉	乘	岸	岸	柳	平	渡	大	岡	井	大	大	桑
山	佐	原	田	藤	橋	原	藤			本	井	邊	津	崎	上	西	隅	田
治	信	沖	光	實	文	茂	新	伊	積	吳	富	就	寄	晉	福	儀	近	庄
平	吾	郎	三	郎	次	市	郎	郎	郎	策	郎	一	造	三	松	助	藏	郎

大正十二年一月

會頭
副會頭
理事
幹事

井上福松	大西儀助	久津間政一	高橋誠三	平川定吉	長野英一	佐藤彦右門	千原冲太郎	小川豐三郎	有岡寛二	瀧本深策	栗山源四郎	渡邊德太郎	猪原丈平	定敏嘉三郎	岸敏岩太郎	瀧本慶一	熊谷光藏
------	------	-------	------	------	------	-------	-------	-------	------	------	-------	-------	------	-------	-------	------	------

評議員

茂原武市	久津間政一	森橋秀誠	高橋誠三	森幸太郎	山名作太郎	山岡彌平	出原吉五郎	佐藤實次郎	石丸秀太郎	金原末太郎	猪原常助	平川定吉	片岡和次	倉橋文次郎	杉原瀧次郎	熊谷光三	有岡寛二
------	-------	------	------	------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	------	------	-------	-------	------	------

久藤平有佐柳折矢大大井大千長布佐廣柳掛
 安田井岡藤本橋吹山西上隅原田施藤井本島
 勝光熊三太壽惠太治儀福近太梅隆信代幸時
 次郎三藏郎市助平助松藏郎松梅一吾藏郎郎

岡渡平田柳瀧有岸石田定板高乘乘三豐杉佐
 崎邊井中本本岡山村敏倉橋藤藤宅田原藤
 晉就隆廉吳深寬太謙幸三虎福桂舜靜一助瀧政
 三一一治策策二郎一二郎一市造造一造造一

大正十二年四月

理事

大正十三年一月

理事

大正十五年一月

會頭

副會頭

理事

濱田全太郎	佐藤彦右門	長野英一	千原冲太郎	小川豊三郎	乘藤桂造	佐藤吉次郎	濱田李太郎	久安瀧次郎	倉橋文次郎	渡邊勝雄	三宅敏郎	長野雄一	江草茂	瀧本慶一	熊谷光藏
-------	-------	------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	------	------	-----	------	------

幹事

評議員

三宅敏郎	渡邊勝雄	倉橋文章	奥原福太	高山豐一	大森慶治	三宅勝次郎	倉橋文次郎	杉原瀧深策	瀧本光藏	熊谷寬二	有岡福松	井上儀助	大西政一	久津間誠三	高橋定吉	平川桂造	乘藤
------	------	------	------	------	------	-------	-------	-------	------	------	------	------	------	-------	------	------	----

平	田	柳	熊	瀧	瀧	有	岸	石	定	板	高	乘	三	豐	杉	佐	江	長
井	中	本	谷	本	本	岡		山	敏	倉	橋	藤	宅	田	原	藤	草	野
隆	廉	吳	光	慶	深	寬	岩	嘉	謙	三	虎	福	舜	靜	助	瀧	政	
一	治	策	藏	一	策	二	郎	二	郎	一	市	造	一	郎	郎	郎	茂	一

平	有	佐	柳	折	矢	大	井	久	大	千	長	布	佐	廣	柳	掛	岡	渡
井	岡	藤	本	橋	吹	西	上	安	隅	原	田	施	藤	井	本	島	崎	邊
熊	國	太	壽	惠	常	儀	福	瀧	治	冲	梅	隆	信	代	幸	時	一	就
藏	郎	市	一	助	郎	助	松	郎	藏	郎	松	一	吾	藏	郎	郎	三	一

大正十五年七月

昭和四年二月

理事

會頭

副會頭

大	千	三	片	平	猪	金	石	佐	出	山	山	高	久	茂	久	藤
西	原	宅	岡	川	原	原	丸	藤	原	岡	名	橋	津	原	安	田
儀	冲	利	和	定	常	末	秀	實	吉	彌	作	誠	間	武	勝	光
助	太	八	平	吉	助	太	太	次	五	平	太	三	一	市	次	三
	郎	郎				郎	郎	郎	郎		郎				郎	

評議員

幹事 顧問 理事

佐	茂	久	高	倉	杉	瀧	熊	渡	井	大	久	高	金	出	三	長	長	瀧
藤	原	安	橋	橋	原	本	谷	邊	上	山	安	橋	原	原	宅	野	野	本
太	武	勝	誠	文	瀧	慶	光	就	福		次	誠	末	定	利	嘉	英	深
市	市	郎	三	次	郎	一	藏	一	松	豐	郎	三	郎	市	郎	市	一	策

倉	塚	三	杉	柳	折	柳	有	渡	瀧	瀧	熊	大	長	大	矢	佐	井	平
橋	村	宅	原	本	橋	本	岡	邊	本	本	谷	西	田	山	吹	藤	上	井
文	正	靜	瀧	幸	英	吳	新	就	深	慶	光	儀	梅		常	信	福	熊
次	夫	一	郎	郎	吉	策	二	一	策	一	藏	助	松	豐	郎	吾	松	藏

			昭 和 八 年 三 月		昭 和 六 年 三 月		昭 和 五 年 五 月
理	副	會	會	會	理	理	理
事	會	頭	頭	頭	事	事	事

長	長	熊	井	大	高	細	久	森	山	猪	石	平	山	金	濱
野	野	谷	上	西	橋	川	津	岡	岡	原	丸	川	名	原	田
嘉	英	光	福	儀	強	喜	間	慶	岩	能	秀	定	作	末	虎
市	一	藏	松	助	平	市	一	一	吉	雄	郎	吉	平	郎	市

顧問

幹事

千原沖太郎
大塚信男
高橋誠三
瀧本丈太郎
倉橋文次郎
石丸秀太郎
山岡岩吉
金原末太郎
久津間政一
森慶一
久安勝次郎
藤山光三
佐藤信吾
高橋松一
阪本義平
瀧本慶一
折橋英吉
塩飽佐志郎
渡邊就一

評議員

杉原瀧次郎
三宅靜一
江草茂
森兼豐三郎
山岡彌平
山名博一
川上眞平
石丸秀太郎
猪原常太郎
池田幸夫
森下國助
金原末太郎
山岡岩吉
矢吹竹二
久津間政一
久安勝次郎
佐藤太市
藤田光三
平井熊藏

塩	折	渡	矢	長	布	中	掛	定	阪	森	高	大	佐	井	茂	森	柳	有
飽	橋	邊	吹	田	施	原	島	光	本	下	戸	西	藤	上	原	本	岡	
佐			常	梅	德	寬	時	芳	義	澤	松	儀	信	福	辰	慶	國	
志	英	就	太		二		一				一					壽	三	
郎	吉	一	郎	松	郎	策	郎	介	平	治	郎	助	吾	松	藏	一	一	郎

渡	杉	藤	柳	江	高	好	三	折	塚	森	岸	瀧	岸	塩	熊	柳	有	高
邊	原	原	本	草	橋	峰	宅	橋	村		本			出	谷	本	岡	田
	瀧	金	幸		福	武	靜	今	正	治	武	岩		栗	光	喬	和	福
茂	次	一	郎	茂	市	夫	市	造	夫	三	郎	一	郎	三	藏	祐	平	太
助	郎																	

昭和九年三月

幹事

評議員

森兼三
川相眞
一

布施隆
一

藤原金
一

佐藤良
一

布施隆
一

柳本良
次

倉橋増
六

川上増
男

豊田助
一

德永儀太
郎

昭和九年五月

副會頭

佐藤信吾

昭和十年三月

幹事

評議員

山岡彌平
井上興治
德永正人

會員名簿

イ印刷 印判書籍 文具 諸紙

諸紙・文具・帳簿・襖材料	新町	畑中時太郎
活版・印刷業・諸紙	本町	佐藤信吾
文具類中備時報發行所	電二三	
諸紙・文房具	中町	大山保二
電二三		
諸紙・書籍・文具・活版	中二町	柳本吳策
電二		
印判彫刻	本町	桑田喜久平
印判彫刻	中町	渡邊堯平
書籍文房具	新町	佐藤豊一
文房具均一百貨	本町	大西平爾
竹細工竹籠製造	中町	實安類一郎
文房具	中町	實安類一郎
文房具・紙	電二	川上修一
文房具	下町	乘藤千里

古本

イ糸類 製綿

毛糸編物	新二町	久安謙一
糸・綿・雜貨	中二町	岸岩太郎
製綿	本町	水戸岡政一

ハ履物 靴 足袋

靴製造修繕	下町	福原幾松
履物・雨傘	新町	佐藤良一
履物	中町	塩出栗三
履物	中町	片岡勘市
履物	下町	妹尾甚助
履物	倉掛	森兼秀次郎
足袋製造・雜貨	新町	岩下魁

下町 岡田案山子

ベ 米 雜穀 精粉 餛飩 水車

穀物、小倉地製造

本町 長田 梅松

雜穀、薪

向町 倉田 萬藏

餛飩、素麵製造

新三町 森 邦一

餛飩、素麵製造

新町 森 福三郎

穀物仲買

下町 高吉 米藏

水車業

下町 瀬尾 正三郎

内外精白木炭

新五町 茂原 爲二

穀物精白搗碎

下町 瀬尾 義一

餛飩、素麵製造

倉掛 山岡 信太郎

白米、煙草、石鹼

下二町 杉原 志郎

ト 陶 磁 器

陶器、左官材料

向二町 藤井 理一

陶器、青物

本二町 中原 寛策

陶器類、セメント

本町 藤井 幸四郎

陶器

下町 三宅 先太

陶器

倉掛 渡邊 芳助

ト 時計 貴金屬 蓄音機 眼鏡

時計・眼鏡・蓄音器・貴金屬 向町 佐藤 政夫

時計、眼鏡

新町 川相 金三

時計・貴金屬 蓄音器、眼鏡

新三町 矢吹 竹二

時計販賣、修理

本町 中原 百祐

時計・茶・時計修理 蓄音器

中二町 平井 隆一

時計・貴金屬・眼鏡・蓄音器 下町 矢吹 省三

時計、蓄音機

下町 川相 佐野造

リ 旅館 料理 飲食 カフェー

料理	割烹仕出し	料理	料理仕出し	旅館、飲食店	旅館料理	旅館	旅館、定食、飲食店	旅館料理	旅館料理	旅館料理	旅館料理並置屋業	全料理	旅館料理	向電
向町	電三 三	向電 二七	電向 二七	電本 三三	電下 三三	倉掛	本町	電本 二二	電本 二四	電本 二四	電下 二五	電本 二五	向電 三七	向電 三七
若林長市	徳永光平	高橋昌平	三宅藤市	柳本久吉	渡邊文平	妹尾源次郎	倉橋與三郎	池上幾代	高原千代	豊田助一郎	川上一男	徳永正人	山岡彌平	山岡彌平
飲食店	飲食店	飲食店	飲食店	飲食店	飲食店	飲食店	カフェー	カフェー	カフェー	カフェー	カフェー	料理 壽し	料理仕出し	料理仕出し
本町	本町	本町	新町	向町	向町	向町	向町	電向 三三	下町	下町	電下 二五	本町	向町	向町
三原喜右工門	三木順次	山田マス	柳本勘七	杉田九一郎	佐藤國藏	久田磯平	鳥越壽次	神尾惣一郎	倉田キシ	谷本千年	岡本唯一	藤澤巍	村上芳藏	村上芳藏

飲食店、菓子

飲食店

飲食店

飲食店

飲食店

才織物製糸

製織製服業

廣巾織物製造業

廣巾織物製造

廣巾織物製造

廣巾織物製造

廣巾織物製造

廣巾織物製造

製糸、絹織物

本町 田中武一

中町 柳本綾雄

下町 川相磯次郎

下町 藤原幹三郎

倉掛 松羽佐米造

向七、二瓦 井原興業株式會社

本町 大山路三

電二、七 藤原金一

電三、五 熊谷直五郎

倉掛 株式會社井原織物所

夏七 大田原次郎

夏目 櫻井泰治

電二、五 新町 三宅牛郎

製糸業

製糸業

才置屋業

置屋業、米穀、精粉

置屋業

新二町 久安勝次郎

新町 近藤桂史

電二町 柳本良次

中二町 猪原金太郎

電五〇

ワ和洋雜貨

優良雜貨

和洋雜貨

和洋雜貨、玩具

和洋雜貨

雜貨

和洋雜貨

和洋雜貨

新三町 竹井文藏

電三町 坂本義平

電三町 矢吹勝造

中町 岡本茂次郎

中町 瀧本信子

中町 石山勝

下町 三宅靜一

電八町 好峰武次

和洋雜貨

雜貨ミシン裁縫

美術百貨

ミシン裁縫

カ菓子 砂糖パン餅

菓子、煙草、果物

菓子、乾物

製菓間屋

菓子、硝子

菓子、砂糖

菓子

菓子、銘茶

菓子

菓子、饅頭

下町 渡邊増雄

倉掛 塩飽武雄

本町 定光芳介

新三町 藤田百貨店

倉掛 藤原喜市

向町 關尾二郎

向三町 友國秀一

向町 岡田悦太郎

新町 猪原喜久治

新町 長谷井米二郎

本町 大上俊一

本町 掛島時一郎

本町 岡田登四郎

中町 田中音羽

菓子、砂糖

菓子、砂糖

菓子、果物

菓子

菓子、砂糖、果物

菓子製造販賣、砂糖

菓子製造、砂糖酒類

パン、饅頭製造

餅、饅頭

菓子製造、井笠饅頭

菓子饅頭

カ乾物 海産物 青物 豆腐

乾物、青物

乾物、青物

乾物、青物

中三町 松本重太郎

中三町 高田福太

中町 岡野荒次郎

下町 富田要

下町 渡邊岩藏

倉掛 倉橋増六

本三町 佐々木仙五郎

本三町 山本清次郎

本町 川田茂市

下町 杉原正志

下町 三宅嘉平

中三町 岸武次郎

下町 松室富一

下町 長谷川竹治郎

電六町

乾物、海產物、生魚	本一〇町	藤原芳藏
乾物、海產物、和洋酒	向二町	川上眞平
海產物	新四町	田中正一
青物問屋農產種子問屋	新四町	柳本壽一
青果問屋	新三町	佐藤太市
青果乾物	新四町	折橋林作
青物	向二町	熊谷信太郎
乾物青物海產物	向二町	村上本藏
食料品	本二町	中原豊
豆腐アゲ	向二町	三宅近平
豆腐製造	下町	横田永市
乾物、青物、海產物	倉掛	安井連市
乾物、鮮魚、果物	下二町	松井覺太郎
力紙箱傘看板折箱	中町	平井政太郎
紙函製造		

折製造	夏目	細川重平
傘、看板製造	電四九町	山田長市
力金物鐵工	中町	
金物	向二町	山岡岩吉
金物荷車製造	新六町	桑田福藏
金物	電二町	熊谷光藏
金物、鉄工	中五町	渡邊重作
金物	下三町	妹尾蒼逸
倉掛	倉掛	
力瓦石工	倉掛	黒田九一
石碑製造	倉掛	
瓦製造業	夏目	久安瀧次郎
力玩具煙草茶	中町	上野貞一
玩具	下町	杉原正一
玩具		

煙草、釣道具

新町 長野嘉市

煙草、香水

本町 宮島太郎

煙草、日用品

中町 平野田鶴之

煙草、日用品、氷

下町 長野雄一

宇治茶販賣、書畫骨董

向二町 佐藤勝治

玩具

下町 渡邊壽夫

茶器、茶

下町 杉原憲一

洋服 半物仕立

洋服雜貨

向町 池田泰造

洋服商

本町 船橋照太

半物卸商

向町 大塚恒次

半物仕立、雜貨

下町 石丸昇太郎

綿布學生服

向三町 三宅龜平

婦人服、子供服

電二町 大西洋裝店

服地材料商

夕 簞笥家具建具指物漆器硝子表具

嫁入道具、萬指物

向町 森下辰己

嫁入道具、家具

新二町 大久保梅太郎

簞笥、家具

新町 武田松一郎

嫁入道具

本町 木田榮一

簞笥、嫁入道具

下町 小川實一

建具

下町 池田惣太郎

硝子

下町 猪原丈平

簞笥、嫁入道具

倉掛 川相真一

表具

本町 渡邊源藏

夕 疊表 莫座

輸出蘭莫座

倉掛 黑田福三郎

疊表、上敷、疊製造

新町 藤井理市

疊表、履物

本町 布施隆一

夕 染物 紋上繪

染物業

中町 砂田桂市

紋上繪、縫紋專門

中町 大西 近一

ウ運 送

運送業

新二町 間 榮 一

運送業

新二町 妹尾 米 造

運送業

新二町 江 草 茂

運送業

新二町 加藤 廉 一

ヤ藥種 染色

藥種商

向町 岡本 正 志

藥種前

新二町 千村 眞 平

藥種染料商

本三町 井上 興 治

藥 品

中町 谷田 英 夫

藥 品

下三町 高橋 福 三

コ小間物化粧品

小間物、玩具

向町 山本 槌太郎

小間物、化粧品

本町 光島 樂 一

小間物、化粧品

中町 有岡 和 平

小間物、化粧品

中町 武田 幹 一

小間物、化粧品

中町 石井 仙太郎

化粧品

本町 猪木 國 吾

石鹼卸商

新町 兒玉 保 治

コ古物 屑物

古物、染色業

下町 松井 金太郎

屑物商

下町 佐藤 政太郎

屑物商

新三町 茂原 辰 藏

コ吳服太物 津洋物

吳服太物、廣巾

向町 森下 國 助

織物製造

向町 石丸 秀太郎

吳服洋反

本町 猪原 榮喜一

吳服太物

本町 高戸 貞三郎

吳服洋反

吳服	本町	藤井晃夫
吳服洋反	中二町	折橋英吉
吳服洋反	中二町	塩飽佐志郎
吳服洋反	本三町	藤原岸太郎
吳服洋反	中三町	大山三夫
モスリン	下三町	折橋今造
吳服	下三町	伊達辰夫
吳服	下町	妹尾順一
吳服洋反	下町	倉橋弘史
吳服雜貨	下町	小坂光太郎
吳服洋反	倉掛	森兼豊三郎
吳服	夏目	鳥越勇七
デ電氣電氣器具 寫眞		
電氣器具	本三町	矢吹常太郎
寫眞業	中五町	今岡新市

寫眞業	中二町	石井増次郎
電氣	夏目	中國合同電氣株式會社
了荒物油 農産種子		
荒物、煙草	新町	高橋勝野
荒物、日用品	下町	高橋福市
荒物、日用品	下町	藤井楨太郎
石油、椿油、石鹼	向町	平川實一
美重椿油製造	本町	山岡一雄
農産種子、養蠶具	本三町	村上万治郎
サ酒類 醬油 酢		
酒類醸造	新三町	久津間政一
酒類販賣	本町	長野英一
酒類醸造朝日ビール特約店	中三町	瀧本慶一
酒類、菓子、茶	下三町	渡邊磯次郎

酒類釀造

酢販賣

醬油、木炭

醬油、酢製造

醬油釀造

醬油釀造

醬油販賣

サ 佐官材料

佐官材料

キ 銀行員 保險業其他

銀行員

保險代理店

保險代理店

シ 薪炭

下町 塚村正夫

倉掛 山岡信三郎

向町 齋藤清一

向町 森邦雄

中町 渡邊就一

中町 瀧本丈太郎

下町 三宅序一

下町 淺井瀧一

新二町 高橋誠三

中町 定敏嘉三郎

倉掛 倉橋文次

本町 千原冲太郎

電三町 甲

木炭、竹

木炭

木炭

木炭

木炭

木炭

木炭、糸撚

薪炭、煙草

薪、果實

シ 新聞

新聞陶器販賣

新聞販賣業

シ 質屋

質屋

ジ 自轉車 自動車 荷車

自轉車

向町 池田三郎

新町 齋藤五三郎

本町 西友二

電二町 藤井幸三

本町 布施德二郎

下町 三宅類次郎

下町 野宮靜一

下町 猪原茂比知

下町 川相染造

中町 大塚敏夫

電一町 奥原章一

下町 奧原章一

本町 川上敏夫

向町 長谷川久夫

自轉車

自轉車、木炭

自轉車、允許銃砲修理

自轉車

自轉車

自轉車

自動車營業

荷車製造

自動車修理

肥料 除虫菊 薄荷

肥料、穀物

肥料、穀物

肥料、農具

内外肥料、製織

除虫菊、薄荷、唐辛子

向三宅敦慈

電二町本井米藏

新町猪原貫一

中町乘藤登志平

下町祐實榮治

下町森治三

電三町赤木靜夫

本町笹岡正男

中町岡野鍊市

向三猪原常助

電二町森都茂志

新町平井熊藏

電二町森下澤治

向三町平川定吉

除虫菊、薄荷

七製氷 飲料水

新町勝谷忠三郎

ラムネ、氷製造

下二町杉原瀧次郎

七生産 鶏卵 鶏肉 精肉 牧畜

鶏卵、鶏

向三町光田元一郎

精肉

鶏肉、牛肉

中町杉原幸一

七染色業

染色業

本町大西染工場

七製材 製糸

製材業製糸

向三町金原末太郎

製材業

新町森慶一

製材業

倉掛田邊德一

製材業

電二町佐々木三太郎

保險業

中町長尾定治

提燈

下町寺地謹一

井原商盛會

井原商盛會は昭和五年三月の設立であつて、本町の商業發展を企圖し、之が實行を期する目的を以て、井原商工會員中商業部の殆ど全体の商店を以て組織してゐる。目的を遂行する爲には誓文拂、年の市、中元賣出し、櫻祭、煙火大會其他苟も本町の商業に關係を有する事柄の大を問はず、共同一致一糸乱れざる統制の下に商業機關として機敏なる活動をなし、町發展のため不斷の努力を續けてゐる。

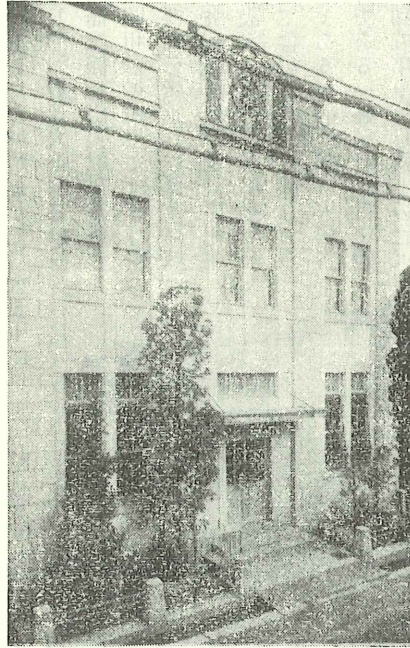
第一次	常任幹事	大西儀助
第二次	同	井上福藏
第三次	同	熊谷光彦
幹事		

森下國助	山岡岩吉	藤田光三
矢吹竹二	佐藤良一	高戸松一郎
阪本義平	佐藤信吾	折橋英吉
塩飽佐志郎	熊谷光藏	三宅靜一
高橋福一	好峯武次	森兼豊三郎

(町 中 原 井)
(番 五 一 原 井 話 電)

店支原井行銀田安

安田銀行井原支店は抑々明治十七年九月、資本金四千二百四十圓を以て、井原村内金融機關として井原會社を創立し、營業所を井原村四百八十九番邸に置いたのに始まつてゐる。而して同二十一年に資本金を二萬圓に、同二十五年には四萬圓に増加し、組織を變更して株式會社井原銀行と改稱した。又同二十三年銀行條例に従ひ、普通銀行部並に貯蓄銀行條例に準據し、貯蓄銀行業務を兼營した。



店支原井行銀田安

同十年十月一日を以て岡山市に本店を有する安田系株式會社二十二銀行に合併し、同行井原支店となり、越えて同十二年十一月一日安田銀行の大同同成るや、資本金壹億五千萬圓、積立金六千五百萬圓を擁する株式會社安田銀行の井原支店として、堅實に立脚し、地方商工業の金融機關として貢獻してゐる。現在支店長は高橋誠三氏である。

同二十七年資本金を十五萬圓に、大正三年には二十萬圓に増加した。同八年八月現在營業所を新築し、全九年六月、一躍資本金壹百二十萬圓とし専ら陣容を整へ、地方金融機關として異彩を放つに至つた。而して深く時代の趨勢に鑑みる處あり、

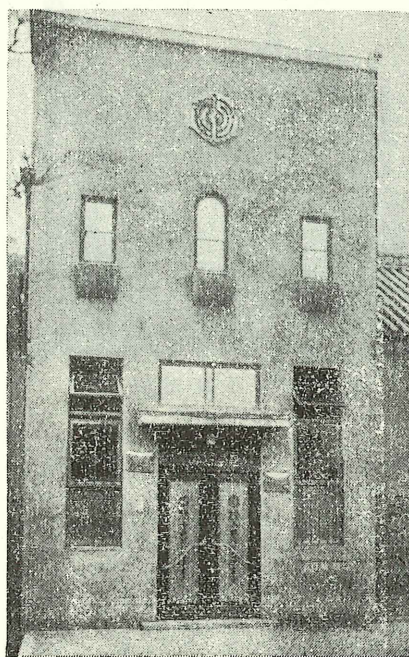
中國銀行井原支店

(井原本町)
電話井原二五番

中國銀行井原支店は、大正十年九月地方金融機關の使命を帯びて第一合同銀行出張所（本店岡山）を當町に設置したのが始まりで、大正十二年十一月玉島銀行出張所を合併すると同時に出張所を支店に昇格し、引續き大正十三年一

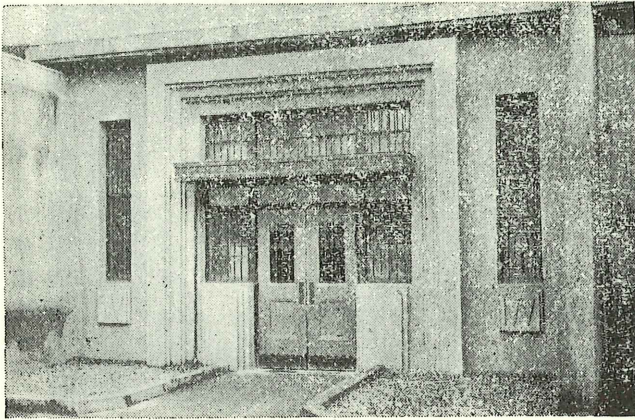
月山陽商業銀行出張所を合併した。尙昭和三年四月には西江原銀行の業務を繼承して營業區域内に芳井出張所及び西江原出張所を新設し、更に高屋出張所を増設して益發展金融界のため貢獻しつゝある折柄、偶々大藏省の方針である一縣一行主義に則り、昭和五年十二月縣下の二大銀行たる第一合同銀行山陽銀行

を合併して茲に中國銀行として誕生した。其本店を岡山市に有し資本金壹千五百万圓、營業區域は岡山廣島香川兵庫の四縣下に亘りて業礎最も堅牢で縣下地元銀行たる特色を發揮し、産業助長機關として名實共に地方金融界に雄飛してゐる。又現在支店長は林一雄氏である。



中國銀行井原支店

藝備銀行井原出張所



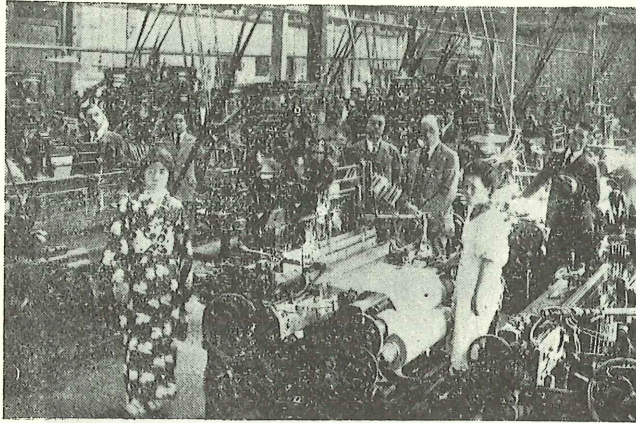
藝備銀行井原出張所

(井原中町)
電話井原一〇六番

藝備銀行は大正九年設立され本店を廣島市に置く。
支店、出張所の數は百餘に達し、廣島を中心とした
近縣に散在してゐる。

同行の同業者間に有する地位、世上の信用程度は既に
定評があり、今更めて贅言を要しない。夙に一般
の方々の金融を圖るを唯一の使命とし、地方産業開
發の貢獻に余念がない。井原出張所は此の意味より
開設され開店、日尙ほ淺きに係らず、既に一般の信
頼を受け、盛況振りを示してゐる。資本金壹千八百
貳拾萬圓、諸準備積立金六百九萬圓にて現出張所長
は戸津穆氏である。

株式會社井原織物所



株式會社井原織物所 (井原夏目
電話井原七番)

本所は明治二十七年の創立で此地方最初の鉄製動力織機の使用者であつた。爾來こゝに四十有余年常に製品の優良と取引の確實とを以て信用を博し名聲大に掲る。販路は内地は固より海外に廣く輸出されてゐる。

現在の資本金 四拾万圓

内 拂込金 貳拾七万五千圓

重役氏名左の如し

取締役社長	岡田義平
取締役	大津寄義三
全	内田金衛
全	大西儀助
監査役	内田彌八
全	小河原次
織機台數	貳百五拾台

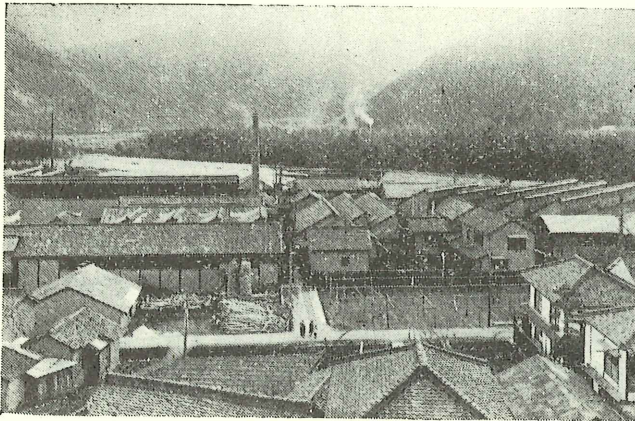
年産額

生地綾綿布	三、〇六二、五〇〇 兩	八五八、二七〇 兩
内外向小倉服地	一、二四二、二〇〇	四一二、五〇〇
計	四、三〇四、七〇〇	一、二七〇、七七〇

井原興業株式會社

(井原向町 電話井原七〇番
二五九番)

井原興業株式會社は大正十年十一月故山名作太郎氏の創立である。主として内地向綿織物製造の外に、學生服、作業服等被服の裁縫販賣をなし、現在専屬工場拾ヶ所で、一ヶ年取引高は壹百五拾萬圓を算し、その販路は内地一般、台灣、朝鮮、滿洲に及んでゐる。取扱製品の豊富にして、品質本位、價格低廉は萬人の認むる所で夙に朝鮮鐵道局、南滿洲鐵道、滿洲國鐵路總局用度課へ納入してゐる。本會社が今日の聲譽を致せるは、終始不變の營業方針に依れるに他ならぬのである。従業員參百五拾名は社長山名博一氏統率の下に和氣霽々の内に社業の發展に不斷の努力を續けてゐる。



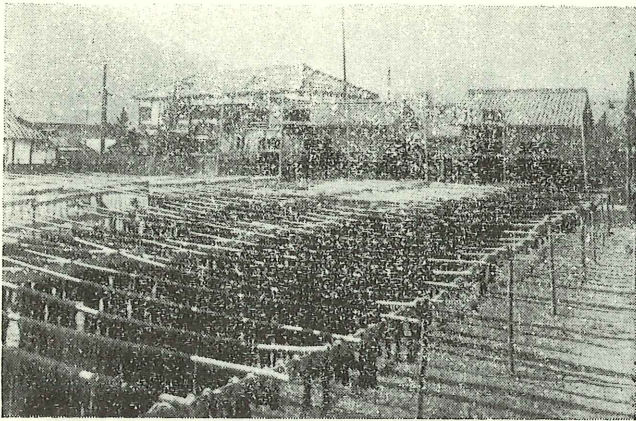
井原興業株式會社

三和織物所

(井原本町昭和通)
電話井原二八番

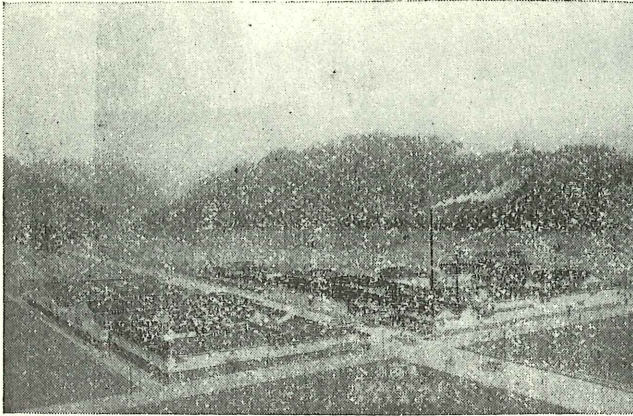
本工場は昭和八年十月の創業で、主として廣幅小倉服地を製造してゐる。工場の建築も新らしく、近代的設備を施し、大いにその躍進振りを發揮し、他の舊工場を凌駕せんとするの氣勢を示してゐる。販賣先は阪神及東京方面である。

經營者森下澤治氏は笠岡商業學校卒業後、明治大學商科に學べる新進の士であつて、現に井原消防組副組長を勤めてゐる。氏の確實なる經營方針は將來一層の發展を期待されてゐる。



三和織物所

瀧
本
本
店



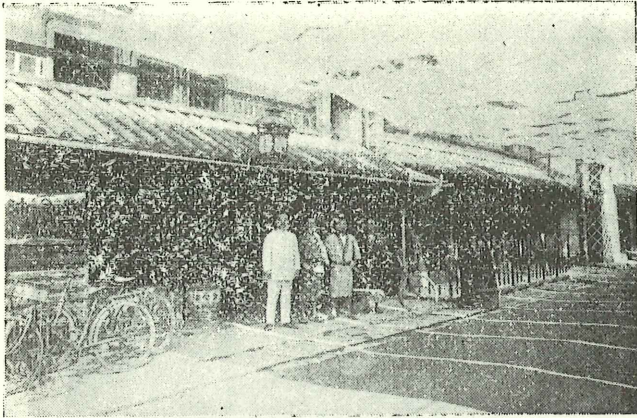
〔★〕 醬油釀造元瀧本本店

(井原中町)
電話 井原 六番

本店は寶曆元年二月の創業で〔★〕(いちまるた)を商標としてゐる。先代瀧本丈太郎氏専ら力を醬油釀造に致し、其の販路は京阪神・廣島・吳・備中・備後一圓並に滿鮮、臺灣、北米等に及び、造石高は六千石で縣下第二位であり、全氏は岡山縣醬油釀造組合副組長であり、曾てはアラスカ、ユーコン、太平洋博覽會、桑港萬國大博覽會、日英大博覽會其他内地各博覽會、品評會に於て、金牌、大賞等數十個を受領し、殊に岡山縣醬油品評會に於ては三ヶ年繼續優等賞首位に在つて優勝旗を獲得した。又畏くも明治大正、今上三陛下よりは一一御買上の光榮を賜つた。

現主丈太郎氏は大阪高等工業學校釀造科卒業者で最新の機械設備により、合理的に衛生的操作に注意し、其の製産費節約を謀り、斯界の一權威であり、先代の後を繼承して岡山縣醬油釀造組合副組長に就任し、且つ大正拾貳年以來引續き帝國海軍御用達を拜命してゐる。

渡邊醬油株式會社



渡邊醬油株式會社

(井原中町)
電話三三番

本社は渡邊家經營の昔に遡れば寶曆年間の創業で、爾來連綿として斯業に従事し當代に至り、大正十一年六月組織を變更して株式會社とし、を商標としてゐる。

經營主は渡邊就一氏である。氏は漸次設備の完成を期し、最新機械の据付を了し、生産費、營業費の節約、原料の有利なる仕入等の研究を重ねて、品質の向上を計る一方従業員の熱誠と不斷の勉勵による能率の増進を圖ることに心をを用ひて、終に今日の盛況を見るに至つた。

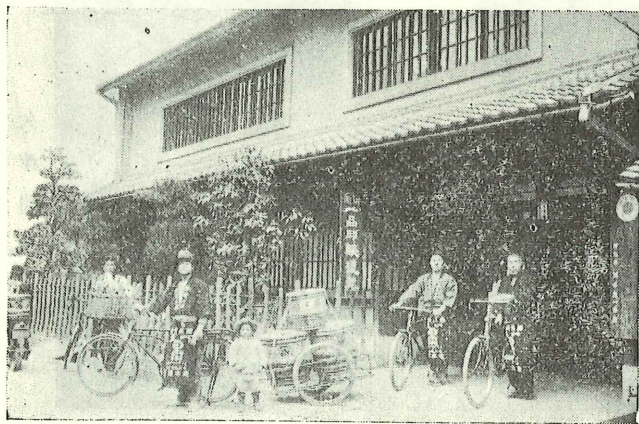
宮内省大膳寮御用品となり、梨本宮殿下の工場御覽を賜り又内外博覽會、共進會に於て名譽金牌十三箇受領等の光榮に浴せるも全く當家永年の歴史と豊富なる經驗と絶えざる研究の結果によるものである。販路は東京、京阪神、中國四國、九州の各地に亘り、主なる納入先は宇品陸軍糧秣支廠、歩兵第四十一聯隊、全第十聯隊、第十一師團經理部、三菱鑛業株式會社、關西、九州各鑛山、三菱造船株式會社、神戸造船所、三井造船株式會社調進部、其他多數である。本社の資本金は五十万圓で、現在製造高は五千石である。

一品印銘酒釀造元

(井原中町)
電話井原二六番

銘酒一品と云へば名實共に天下一品であつて、古くより遠近にその聲價を讃美されてゐる。元來瀧本家釀造の銘酒は嘉永二年瀧本家より分家したる瀧本森助氏並にその養子瀧本森平氏(遅庵と號す先哲遺賢欄にあり)時代より既に釀造販賣されたが、一品の名稱は先代文一氏の時代より専ら之を用ゐたものである。爾來益々釀造の研究品質の改善に努めた結果、全國酒類品評會、岡山縣品評會、其他博覽會共進會等に屢入賞の榮を得、地方は勿論遠く東京、横濱、阪神地方に輸出され、高級醇良酒として非常に好評を博してゐる。現主瀧本慶一氏は小田後月郡酒造組合長として斯界を牛耳つて居り、養嗣子誠三氏は東京高工の出身であつて、父子揃つて内外に活躍してゐる。

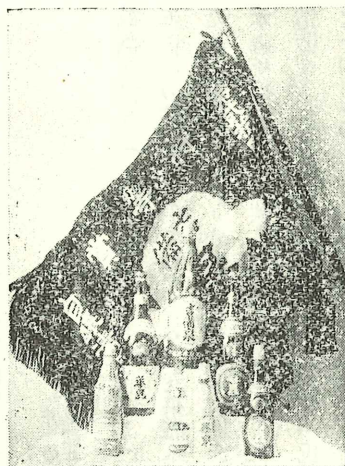
瀧
本
酒
店



銘酒 吉備泉本店

(井原新町)
電話井原三〇三番

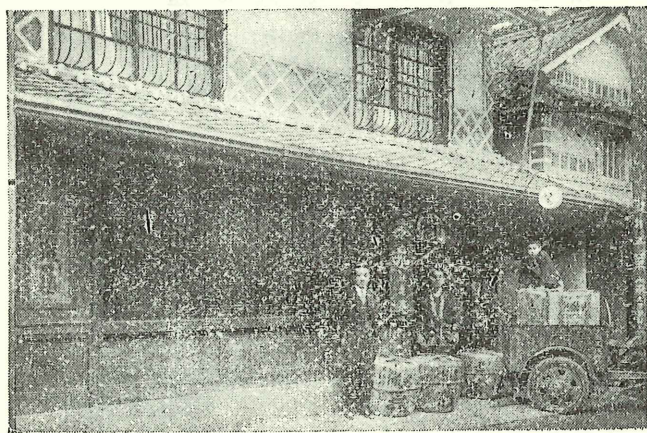
岡山縣代表酒と言はれてゐる銘酒吉備泉の醸造は大正四年久津間政一氏の創業に係り、其の後養嗣子幹樹氏が力を併せて經營してゐる。爾來終始一貫「吟醸」を以て藏



内統一
をモツ
ト一と
し原料
は全國
無比の
備前雄

町米のみを使用し、専ら品質改良の研究の結果優秀にし

久津間酒造場



て芳香佳味眞に代表酒の名に恥ぢざるの成績を挙げ、又販路も大いに擴張し、福山市、川崎市、吳市等に販賣店を設置してゐる。然れば全國品評會、中國六縣品評會、岡山縣品評會等に於て、毎年入賞し、優等賞、一等賞等連續受領の光榮を荷ひ、延いては吳海軍、同工廠俱樂部、廣海軍工廠從業員組合等より陸續納入の命を受けてゐる。

最近各種產業が著しく合理化さるゝに至りしも、獨り酒造界のみが因襲を墨守し舊態を脱し得ざるを遺憾とし、專心研究の結果、軌近一般の向上せる嗜好に投ずる高級酒の釀造法に成功し、昭和八年より冷用古備泉を發賣して斯業界の尖端を走りしに大いに大衆に歡迎せらるゝ處となり、特に海軍部隊及廣島遞信局購買部等より納入の命を蒙り、益々其の聲價を高めてゐる。

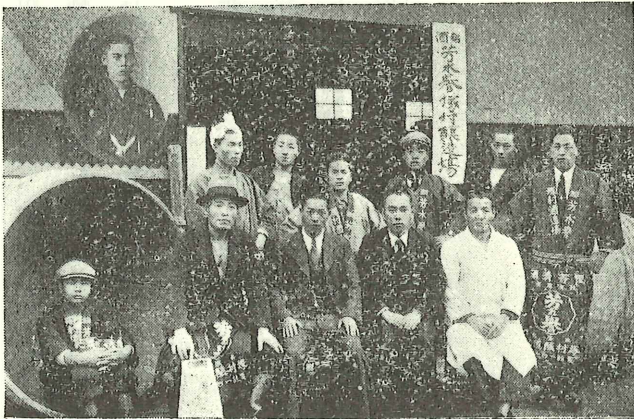
銘酒芳水譽こ



印醬油釀造販賣所

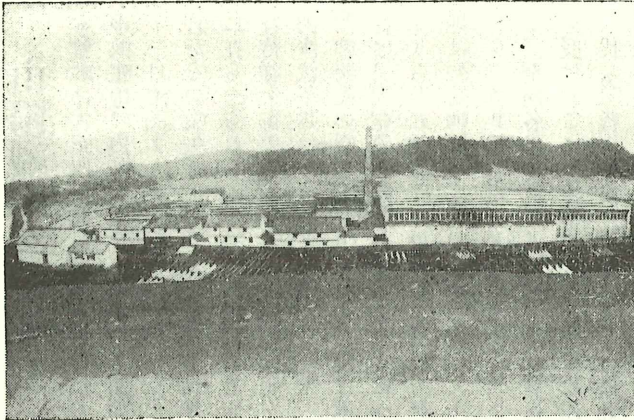
(井原 下町
電話一四七番)

兄弟三人打揃ひ協力して酒と醬油の製造販賣をなし、家庭円満にして業務を擴張し眞に理想的の躍進を續けて居るのは銘酒芳水譽並に印醬油釀造元塚村伊太郎、全安治、全正夫氏である。塚村家は本郡荏原村の出身で、高越城主北條早雲の後裔である。故に今尚ほ山籠に塚村神社と云ふがあり、一門の榮えは皆其の加護に因るものとして敬神の念が非常に厚い。店主全安治氏は塚村忠次郎氏の貳男に生れ、大正二年本郡芳井町に於て酒類醬油釀造業を開始し刻苦精勵して品質を改善し、大正六年吉備酒類品評會に於て一等賞を受領し、大正十年業務擴張の爲め釀造場を井原町に移轉し、芳井町を以て發賣元となす。爾來益々品質の精撰に努め、各博覽會展覽會共進會等に於て數十回入選す。販路は備南一円は勿論遠く阪神地方まで進出してゐる。長男伊太郎氏は荏原にありてを襲ぎ、二男にして營業主全安治氏は芳井にありその弟正夫氏は井原にあつて、共に協力して釀造と販賣に全身を打ち込んでゐる。



塚村 釀造場

後月織物株式會社



後月織物株式會社

(後月郡七日市
電話井原五六番)

井原町の南入口の七日市にヌツクと聳えた大煙突を中心として、廣大なる地域に完全なる設備を施して、隆盛を雄辯に物語る後月織物株式會社は、大正元年九月の創立であつて、初めは出資額七万圓の合資會社であつたが、昭和九年十一月資本金貳拾五万圓(全額拂込済)に増加し後月織物株式會社と改稱し、備中小倉服地を製造して居るが、年産額三百五十万碼、年賣上金額一百万圓、販路は内地向約半額、海外輸出約半額である。當會社の製品が内外得意先きより非常に歡迎せらるゝ所以は、第一に工場の建物が殆んど世に比類なき設計に基きて建築され、工場内の温度も湿度も四季を通して調節され、冬季も六十度を下らず盛夏の候も八十度より昇らず、製品検査を嚴格にして絶えず優良なる製品を提供するを以てである。重役は財力手腕共に卓越せる田中社長以下左の如し

取締役社長 田中勝太郎 取締役 田中一士
取締役 藤代七三吉 監査役 藤代龜與
全 田中政一

山陽織物合資會社

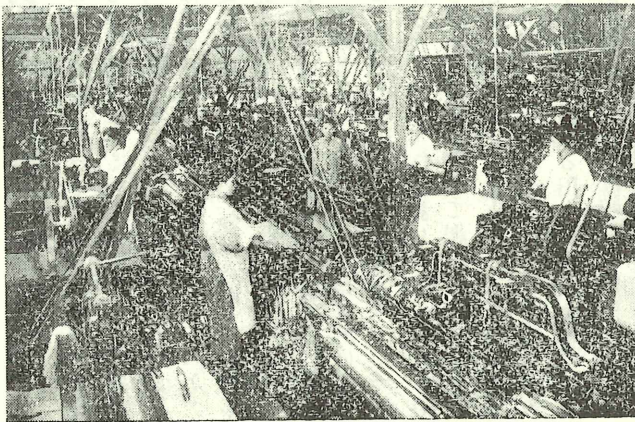
(後月郡西江原町)
(電話井原五四番)

本會社は、大正四年九月の創業であつて、地方特産織色無地蚊帳地、内外向小倉服地製造を開始したが、大正四年十一月濠洲より小倉服の注文を受けたが、服地輸出は本社がその嚆矢である。大正十五年五月、今上陛下攝政宮に在らせられし時本縣に行啓あらせられ、特旨を以て牧野待從を御差遣相成り、工場作業等を巡見の後御買上の御沙汰を賜はり、越えて昭和五年十一月、今上陛下大演習御統監の爲め本縣下へ行幸の際は本會社製品朱子目小倉は、天覧の上御買上げの榮を賜はつた。昭和九年十月より六十五吋織機を増設し、最も力を海外輸出に注ぎ内地は勿論朝鮮、滿洲、支那、南洋、中米、南米、濠洲、アフリカ其他各地に及び年産額一百二十万碼に達してゐる。全國各地博覽會共進會、品評會に於て金銀牌感謝狀を受けたことは枚舉に遑ない。重役左の如し

代表者 藤井 一郎 有限社員 山成 愛一

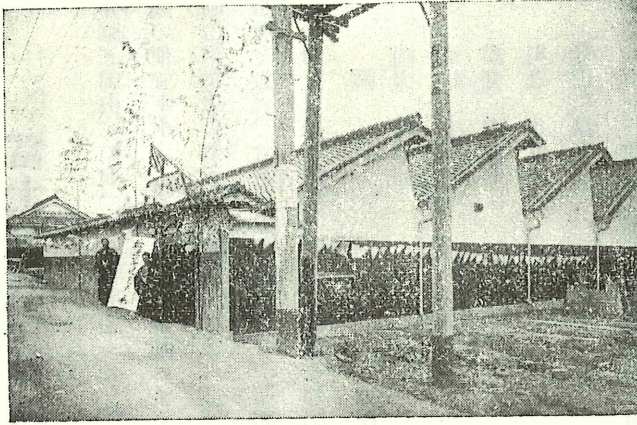
常務社員 石井 武久 全 池田源太郎

渡邊 兵吉



山陽織物合資會社

小玉綿布工場



合名 小玉綿布工場

(西江原町
電話井原二〇六番)

本工場は大正十三年の創立であつて
資本金は參万圓、機臺數八十六、製造品
は學生小倉服地で、販路は大阪、和歌山
岡山、九洲等の各地、年産額參拾五万圓
代表社員は小玉省二氏である。

品質の優良なるとカッチリとした經
營によりて取引先きの信用は日に月
に増しつゝある。

富士自動車株式會社井原出張所 (井原驛前 電話井原七二番)

井原と岡山との間三十二哩間を一日十一往復し、岡山總社間十二哩を廿一往復して地方の乗客に多大の便宜を與へてゐる大型の自動車…それは富士自動車株式會社及エムエ自動車商會經營のもので岡山驛電車停留所前(電話三六八六番)總社宮本町(電話五九番)に本社を有し、矢掛及井原に出張所を設け、倉敷に出張所がある。昭和四年四月の創立であつて、社長は藤江守氏である同社經營の區間及自動車往復回数並に哩數を列記すれば左の如し

區 間	一日往復數	哩 數
岡山 總社間	二 一	一 二、五
岡山 井原間	一 一	三 二、五
總社 水内間	五	一 一、〇
川邊 倉敷間	八	五、〇
箭田玉島驛間	八	五、五

切符は兩社共通であつて、西總社、岡山間の往復券は通用無期限其他各區間にも往復券回数券もあつて、非常に割引されてゐる。

中備時報

創刊當時

犬養木堂

先生揮毫

我が中備時報社は往年後月時報として明治卅八年三月創刊し同四十三年一月井笠鉄道敷設に當り新聞紙法に依り改題創刊し大正五年四月七周年記念として武陵桃源たる新山桃林中に於て祝賀園遊會を催ふし井笠全線に亘りて讀者を滿載して驚歎の眼を張らしめ翌六年七月第壹百號記念として中備煙火大會を催し爾來地方年中行事の一として毎年一回舉行し居れり。創刊茲に廿五年其間時運に變遷社運に消長ありて一張一弛は免れざるも其聲を絶たざりしは全く識者讀者後援の賜と茲に感謝の意を表するものなり。今や號を重ねる四百餘なるも其生命に於て之を日刊紙に比すれば殆んど一萬號に近く縣下月刊紙の白眉として聊か誇張するに足れり然して其足跡を印する處縣下は素より京阪神、滿鮮地に進出するもの尠ならず發行紙數の如きも創刊當時に比し倍加して幾千に達せり。本紙の使命上前途を思ふ時洋々乎たるものあり向後讀者諸賢の後援に依り一大飛躍を試み日刊紙となすべく計畫を進めつゝあり幸に倍加の御後援と御指導とを深く懇願する所以なり。

印刷百般の御需に應ず

岡山縣井原町 中備時報社

電話二三番 振替穴阪一五七〇

編纂を了りて

井原商工會の事業として井原要覽編纂の企てあるや、大西會頭は余に向つて其の事業を依頼され、且つ之を一時的のものとせずして、相當古き過去に遡り以て現勢に及ぼすべきやう希望された。余も公私多端殊に取調事項も随分廣汎に亘り、到底短日月の間獨力にて之を完成するの不可能なるを述べ、友人森誠一君と先輩平野老師を煩はすこととなり、且つ長野英一、田中武一、原田甲子の諸氏も力を添へられ、材料の蒐集、事實の取調、原稿の執筆と部署を定めて二月中旬より之に着手し、約一ヶ月の日子を費して漸く之を脱稿した。素より完全といふ譯ではないが、要点だけは掴み得るやう、且つ肩の凝らぬやう成るべく堅ぐるしい數字を避け、左の要領によつて之を書きおろした。

一寫眞版は新しく撮影したものを用ひ、在來のものは努めて最近のものを採つた。

一町政上の統計物は九年八月の現勢調査によつたものが多い。

一名所舊蹟、先哲遺賢、諸統計、機業記事などは近接各町村に及ぼしてゐる。

一先哲遺賢は一二を除きては死亡年月順に排列した。

一成るべく架空想像的の事項を避け或は文献により或は信すべき私記を辿つて之を記述した。

ア、年々歳々花相同じく、今や櫻花爛漫として野に山に陽春四月の和かなる麗光を投げてゐる。この要覽に載せたる事項が、今の人の參考となり、年々歳々同じからざる人の爲め遠き未來に於て温故知新の一端ともなれば、執筆者の勞は報いられたものと云つて宜しい。

昭和拾年四月

大塚 信 男

識す

輸 出 向
內 地 向
綿 織 物
製 造

岡山縣後月郡井原町

井原興業株式會社

電 話

二七五九〇番

蒲替大阪一〇九七番
井原局私書函第五號

吳服洋反
雜貨



石丸吳服店

店主 石丸秀太郎

電話二一三番

岡山縣井原町

旅料仕
出
し 理 館

一 井

原

町

新

樓

電話二五六番

雜貨 洋品 子供服 文具 化粧品

良キ品ヲ安ク賣ル店

石山雜貨店

井原中町驛入口角

外科 産婦人科
耳鼻咽喉科
レントゲン科

井原町

井原病院

電話三一番

營業科目

藥品一般
各種染料
衛生百貨

井上藥局

電話三〇番

店主 井上福松

主任 井上興治

店員

片山 山本 半志
大笠 塚原 雅一
唯一

旅館割烹

一

樂

備中井原町

電話二〇一番



井原町中町

岩倉屋吳服店

電話一〇四番

◆代表的寫真

井原町

今岡寫真館

電話五五番

分館倉敷
電話五五九番

◆出張撮影應求迅速

岡山縣後月郡井原町

晝夜營業 井原タクシ

電話二二一番

備中井原驛前

外 米
米雜穀商



井原精米所

長電話 貳參〇〇番
自宅電話 (井) 二〇七番
電略



井原製粉所

長電話 二三〇〇番
自宅電話 (井) 二〇七番
電略

岡山縣井原町



株式會社

井原織物所

取締役社長

岡田義平

電話七番

海陸貨物運送

荷爲換取組

岡山縣井笠線井原驛前

國際通運株式會社井原代理店

井原合同運送合資會社

代表社員

江

草

茂

電話 一六番

疊 表 上 敷
むしろ 履物

寶藏屋本店

店主

布施隆一

備中井原町

料理旅館仕出し

徳永春水樓

電話四十一番

▲眺望絶佳 客室完備

雨 履
傘 物



と

ぐ

ら

や

岡山縣井原町

青果 松茸 蒟蒻 芋
物 實 茸 粉 芋
出 里

岡山縣井原町

戸新商店

店主 佐藤太市

電話 一二三番
電略(トシン)又ハ(ト)

內科 神經病科

醫學博士

戶 出 醫 院

電話一三二番

株式會社中國銀行井原支店

電話一一五番

高屋出張所 電話三五番

西江原出張所 電話一二八番

芳井出張所 電話三番

岡山縣後月郡井原町

中備

飲料
氷料

製造所

所主
杉原瀧次郎

電話一五五番

嫁入道具製造
建具各國漆器



大久保
タンス店

岡山縣井原町新町
電話二四五番

輸出綿布
婦人小供服地
學生服地
製造販賣



大山織物工場

岡山縣井原町
電話一一七番

婦人服
小供服
並服地材料
並仕立
商



大西洋裝店

井原本町

電話二四番

井原町紀念通

染色業



大西染工場

電話二四番

岡山縣井原町



大山吳服店

電話二七〇番

外科

內臟外科

肛門病科

花柳病科

レントゲン科

物理療法科

小田病院

芳井町梶江 電話芳井一六番

井原町中町 電話井原一一四番

分院 小田外科醫院

院長 小田成器

外科醫學博士 小田敬進

◆ 手術隨時 入院隨意

嫁入道具一具切
並
各國漆器各種

タンス製造元

小川タンス店

井原町下町

良品安價奉仕



イチミツワ醤油

岡山縣井原町

渡邊醬油株式會社



ヒシトクソース

電話 井原三三番
 大阪四三三番
 振替 關三三七番

營業品目

メリヤス 雜貨
子供服
ベビー用品
洋服 附屬品
帽子
羅紗製品
洋服其他仕立
足袋類 一切

ワタナベ 雜貨店

備中井原町下町
電話一五八番

和洋酒類 岡山縣井原町

菓子砂糖

渡邊商店

宇治銘茶

店主 渡邊磯一郎

電話二六〇番

井原向町

材木商
金原末太郎

電話四四番

書畫骨董

井原町昭和通り 一新樓前

家具一般

寒竹林幽居

賣買卜評價

電話二一五番甲

高級美術品

井原町本町 警察署前

定光克之介商店

贈答品調達

電話二一五番乙

御 料
旅 理
館

井
原
下
町

花
月

電話一四七番

各博覽會於金牌受領
名物

朝
日
羊
羹

本舖

養老軒

電話一七三番

確實
正價



高戸吳服店

井原町本町

振替口座大阪五二八六五番
電話 一四一

調度品

本店向側

既製品
雜貨物

部
高戸吳服店向店

電話一四一番

日英大博覽會其他各博覽會金牌數拾個
御買上之光榮ニ浴スル事三回

品質本位ノ代表的逸品

海軍御用達

いちまちる



醬油釀造元

岡山縣井原町

瀧本丈太郎

電話 六番

於

全國清酒品評會
共進會 博覽會

優等賞牌受領

銘 酒

一

品

瀧本慶一釀造

電話 二六番
大阪振替二九四六九番

井原名物

さくら饅頭

備中井原町中町



高田福商店

電話三九番

專賣特許文化京染染料特約店

藥品一般
衛生百貨
各種染料
諸油一切
計量器

高橋藥舖

岡山縣井原町
電話一七二番

井原町新町

優良雜貨

既製洋服

竹井堂雜貨店

竹井文藏

電話二三五番

東京千代田製靴會社井原特約店

銘酒

芳水譽

井原町

酒類
醬油

塚村醸造元

電話一四七番

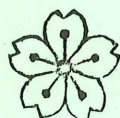
芳井町

塚村發賣元

電話五〇番

井原名物

さ



く

ら

煎

餅

ネボケ堂

電話一五七番

青 物
食 料 品
乾 物

井原町本町

中島屋本店

電話一四六番

陶器 乾物 食料 疊花
製造 表花

備中井原町

中原寬策

電話一四五番

西 洋 御 料 理

ライオン食堂

井原町驛前

電話二六七番

海軍御用達

登錄商標

吉備泉

登錄商標

備華泉

釀造元久津間酒造場

岡山縣井原町

電話三〇三番
振替大阪七二四〇一番

於全國中國岡山縣各清酒品評會
每年入賞優勝旗及金牌多數受領

製菓卸商

井原名物

櫻羊羹

櫻煎餅

本舗 倉橋菓子店

岡山縣井原町

電話一三六番

營業科目

鐵 鐵 銅 丸 鋁 鋁
 器 材 釘 真 鋁 鋁
 針 器 針 器 器
 金 料 物
 其 鍋 打 大 アルミ ニューム
 他 釜 乃 工 ミ ニ ュー ム
 農 鑄 物 道 器
 具 物 類 具 器

井原町

倉山岡金物店

電話二二四番

農産種子問屋

松茸問屋

輸出里芋問屋

蒟蒻牛蒡問屋

備中井原町

分柳屋商店

店主 柳本壽一

電話井原四〇番

井原町昭和通

矢吹齒科醫院

院主 矢吹 九三

モーター球
マツダ電球
島津製作所
松下電器製作所
グードリッチVベルト

特約店

矢吹電気店

井原町

電話 一二番

書籍・雜誌

諸紙・文具

度量衡

石版・活版

合資
會社

柳本商店

岡山縣井原町
電話 二二番

石版・活版

諸印刷

柳本印刷所

尾道市長江町
電話 三三四番

綿 雜 足

布 貨 袋

岡山縣井原町

やなせや足袋製造元

合 名
會 社

や
な
せ
屋
商
店

電話五二番へ

井笠鐵道株式會社
興讓館中學校
御指定

岡山縣井原町(驛入口)

貴金屬
眼鏡
蓄音器
万年筆

東矢吹時計店

電話一〇九番

支店
矢掛町
勉強堂

木炭 菊形タドン 煉炭 豆炭



丸友商店

備中井原町

電話一〇七番

出張所 伯備線備中神代驛前
出張所 伯備線足立驛前

御料理
仕出し

井原本町

丸

美

亭

三宅藤市

電話二二九番

本店
資本金
廣島市紙屋町一七
壹千八百貳拾萬圓

岡山縣後月郡井原町



株式會社

藝備銀行井原出張所

電話一〇六番

拂込濟資本金
五百五拾壹萬餘圓
諸準備積立金
六百九萬餘圓

洋 雜 品
運 動 貨 具



岡山縣井原町

桂花堂雜貨店

店主 好峯武次

電話 八番

岡山縣井原町

藤田百貨店

電話二七番乙

備中井原町本町



藤原吳服店

藤原岸太郎

電話二一八番

內地輸出
廣巾綿布
小倉服地
絹綿交織
物製造

岡山縣後月郡井原町

合資
會社

藤原織物所

電話三〇五番

岡山縣井原町

生魚
乾物

福
山
屋
本
店

電話一五九番

岡山縣井原町魚市場前

青菓
盛籠

福
支
食
料
品
店

電話一六五番

メリヤス 雜貨
 羅紗製品 一式
 洋裝附屬品 一式
 小兒乗物
 教育玩具

岡山縣後月郡井原町本町



コドモヤ商店
 矢吹勝藏

電話 一二〇番

岡山縣井原町中町

履物
雨傘
靴類



兒島屋履物店

電番二十五番

創業明治三十年

銅 鐵 卸
諸 金 物 小
セメント 賣



井 原 町

天満屋金物店

熊谷光藏

電話 五一 番

和洋
雜貨

今

坂

本

洋

品

店

井原町本町

坂

本

義

平

電話二三九番

乾物 青物 海產物

井原町中町

岸八百屋店

電話二四六番

品質本位

井原中町


三井吳服店

電話二五八番

井原下町

三宅齒科醫院

齒科醫 三宅生一

毛糸事務服

岡山縣井原町

毛糸袴カパー

製

毛糸ハラマキ

毛糸編物

造

ネネグリス

久安糸店

店主 久安謙一

電話一四三番
振替大阪二五二八五番

眼科
專門

廣
谷
眼科
病院

備中井原町
電話二四四番

營 業 科 目

各種石油 發動機油 揮發油 機械油 植物油 化粧石鹼 洗濯石鹼

米國セ、テキサス會社特約販賣店



高級 椿香油製造元

卸 小 賣

平川石油店

岡山縣後月郡井原町向町

吳服
太物



森下吳服店

岡山縣井原町向町

電話二二七番



森

製
材
所

電話一六〇番

岡山縣井原町

輸出綿布

廣巾小倉

服地製造



三和織物所

代表者 森下澤治

電話井原二八番
電話略三〇

肥料

米穀

養鷄飼料

森下商店

店主 森下澤治

電話井原二八番

岡山縣井原町倉掛町

毛 森 兼 吳 服 店

後月郡荏原村

絹綿交織
服地製造

日本綿布株式會社

電話井原六五番

備中高屋町

輸出綿布
小倉服地



土肥織布所

電話略 (トヒ)
電話四十一番

内外向
小倉服地製造
廣巾蚊帳地

中國織物株式會社

岡山縣後月郡西江原町
電話 (井原) 三五番
振替口座大阪三五九二四番

大阪市東區唐物町二丁目三八

大塚織布大阪營業所

電話船場長一〇一九番

輸出織物

小倉服地

製造販賣



岡山縣小田郡笠岡町

大塚織布笠岡工場

電話(笠岡)三四番
振替穴阪五二二一番

岡山縣後月郡荏原村

大塚織布

染色整理

青木工場

電話(井原)一一〇番

小倉服地專門



高屋織物株式會社

社長 大塚 笹一

岡山縣高屋町
電話 五番

學生小倉
服地製造

合名
會社

小玉綿布工場

岡山縣後月郡西江原町
電話井原二〇六番

小倉服地製造
輸出綿布



合名
會社

榎井織物工場

岡山縣後月郡西江原町
電話井原二六四番

輸出綿布製造
小倉服地

岡山縣後月郡西江原町

山陽織物合資會社

電信略號（サ）
振替口座大阪二九七三五番
電話井原五十四番

岡山縣後月郡出部村大字上出部

後月織物株式會社

電話井原五六番

小倉服地
各種洋服地
製造
輸出綿布



東森織物合資會社

岡山縣後月郡木之子村
電話井原一〇三番

雜穀 肥料

備中井原町

猪原常助商店

精米部

電話七六番

新進號

學生服
訓練服

製造元

池田泰三商店

岡山縣井原町

諸 新 聞

井原合同販賣所

電話 一 番
二 五 番

小間物 化粧品
半 衿 帶 上 地

石井小間物店

井原中町

組立組替修理

實費

井原町 朝日館前

今井ラヂオ商會

受信機診察無料

和洋御料理

花家食堂

岡山縣井原町驛前通り

營業品目

菓子 砂糖
乾物 罐詰
味淋 燒酎
白酒 生果
宇治 茶

友友國秀一商店

岡山縣井原町
電話二二一番

協同製菓株式會社特約店
各製菓株式會社特約店
池山ノ人蔘飴特約店

商標

岡岡田製菓問屋

備中井原町

井原町本町劇場下手

奥野齒科醫院

電話 四六番

雜貨
牛
メリヤス類
其他色々

確實勉強

岡本正直堂

名實共二

井原郵便局東隣

諸文袋眼

紙具物鏡

商

大山文具店

店主 大山保二

岡山縣井原町
電話二二三番

紋縫紋浸蔭京

上 拔

繪紋洗拔紋染

大西松山堂

岡山縣井原町中町

印 襪 風 紋
天 幕 呂 上
繪 縫 紋

尾道屋染工場

井原小學校前

各 國 陶 磁 器
建 築 用 陶 器
左 官 諸 材 料
木 炭 及 煉 炭

渡邊芳助商店

岡山縣井原町
電話二七一番

東洋金剛煙突
松村式改良焚口
特約販賣店

御旅館
御料理

足守屋

渡邊文平

井原町郷社前

乾物海產物
和洋酒果實

川上眞平

井原町向町
電話一四八番

嫁入美具
製造元

川相タンス店

岡山縣井原町

簞笥
指物
家具類
製造販賣

武田松一郎

岡山縣井原町

岡山縣後月郡井原町

田邊製材所

穀物商
織物業

長田梅松

後月郡井原町

貿易敷物
内地上敷商
蘭草花薙

黒田福三郎

備中井原町倉掛

電話二三四番

時計
貴金屬
蓄音器

矢吹時計店

備中井原町新町

電話二二二番

ビクター蓄音器會社
日東蓄音器會社
帝國蓄音器會社
特約店

井原町本町

旅館
料理
仕出し

八千代旅館

電話一四番

中國合同電氣株式會社指定
電氣工事請負

岡山縣後月郡井原町

山部工務所

電話二四三番

和洋御料理

マルヤ食堂

岡山縣井原町驛前通

木炭問屋

煉炭
豆炭

布施徳二郎

井原町

花見のお供に

運動會や松茸狩にはいつも

稲葉壽し

岡山縣井原町役場前

店主 藤澤 巍

生乾魚
物果
商

伏元商店

電話 十番

井原町本町

織機、準備機造
ドビー、各製
織機用品二式

櫻井商店

岡山縣井原町
電話一七一番

櫻井式総操機製作販賣

株式會社 大阪帶革製造所代理店

吳服太物
の御用は

小岸屋吳服店

店主 猪原榮喜一

岡山縣井原町本町



天狗履物店

井原町

履物問屋

有田トラグ專賣所

任主 三村久平

岡山縣井原下町

肺病藥
花柳病藥

古物問屋

佐藤政太郎

岡山縣井原町

電話六九番

嫁入道具
簞笥製造

商

木田榮一

備中井原町紀念通

國產小倉製造
男女學生服卸問屋

三宅綿布商會

岡山縣後月郡井原町向町
電話二三三三番
大阪七〇一五七番

小間物トランク
化粧品袋物類

みつや商店

備中井原町本町

木炭問屋
各種燃料

タドン製造

今三宅類治郎
店商

井原下町

時計眼鏡
茶鏡商

平井時計店

井原町
電話二七番

肥料
農具商

平井熊藏

後月郡井原町
電話四七番

綿織物
製造販賣

廣瀬織物工場

ギヤエム印で名高い

東京宮田製代理店



本井兄弟商會

岡山縣井原町
電話一〇五番

營業課目

木炭部。自轉車部
ガラス部

内外精白
木炭問屋

十茂原爲二

井原町新町
電話五十八番

屑物商

茂原辰藏

岡山縣井原町
電話二〇二番

履物製造
雜貨類
雨傘

森兼秀治郎商店

岡山縣井原町

各種打刃物
諸金物類
改良農具
製繩機械

妹尾金物店

井原倉掛町

一タス一エフカ

町 向 原 井

造 製 地服倉小
綿木黃淺
地 帳 蚊

江西原織物株式會社

岡山縣後月郡江西原町

電話 井原一五二番



輸出綿布

丹生屋商店
織製部

岡山縣後月郡高屋町
電話 高屋二八番電略(夕ム)

廣巾織物製造



細羽織物所

岡山縣後月郡出部

輸出綿布

小倉服地



鳥岡織布工場

岡山縣後月郡高屋町
電話高屋二九番電替(トリ)
振替口座大阪五五七一番

内外向
小倉服地製造

合貸
會社
中央織布所

岡山縣後月郡西江原町
電話(井原)四四二番
振替大阪六九四四九番

織色木綿
紺木綿
綿蚊帳製造

大山梯一商店

岡山縣後月郡西江原町
電話(井原)六四四番
振替大阪三四三二四番



輸出向
小倉服地
製造

大山織物工場

大山 繁一

岡山縣後月郡西江原町
電話(井原)二五一番

廣巾小倉
着尺織物

大江織物合資會社

岡山縣小田郡大江村
井笠線高屋驛南三町
電話高屋一七番
振替大阪八六八五三番

輸出綿布

小倉服地

製造

今田中織布所

岡山縣後月郡出部村
電話(高屋)二二〇番
電略(夕)又八(夕ナ)

内外向
小倉服
地製造

刈谷中織物工場

谷中勘次郎

岡山縣後月郡
電話(高屋)三七番
出部村下出部

內外向
廣 巾



山本織物所

岡山縣後月郡出部村
電話 高屋十六番
振替口座大阪六五三三番

輸出及內地向
小倉服地製造



安井織物工場

岡山縣後月郡七日市
電話(井原二四九番)



滿壽屋織布工場

輸出綿布
小倉服地

岡山縣備中高屋町
電話八四四番



國產織物株式會社

綿小倉服地
綿蚊帳
綿英ネル

岡山縣後月郡西江原町
電話略(コク)三九番
電話井原一三九番

小倉服地
製造
廣巾蚊帳地

鐵屋綿布工場

岡山縣後月郡西江原町
電話 井原七一番

營業種目
織色無地
絹綿絨木綿
撥蚊帳綿
製造

淺野織物合資會社

電信略號「アサノ」又「アサ」
振替大阪二五一七八番
電話 井原四八番

輸出小倉綿
綿倉服地布
綿木綿

毛 森政織物工場

岡山縣後月郡高屋
電話高屋一番
電略(毛)又ハ(毛リ)

資生堂チエンストアー

猪木國進堂

井原町本町

各種化粧品製造部

井原町

石井寫眞館

電話百五十一番

井原町向町

カフエーいろは

電話三〇〇番

書籍雜誌
文房具商

豊文堂

岡山縣井原町
堂主佐藤豊一

菓子製造販賣

掛島松齡堂

店主掛島時一郎

各國荒物
硝子食器 商

高橋福市商店

岡山縣井原町

萬金物商
荷車製造所

福桑田福藏商店

岡山縣井原町新町
電話二六八番

パン
饅頭

山本昌榮堂

備中井原
電話二五五番

表
具

的
場
秀
之

井原町昭和通

日用家具
硝子器商
ランブ

藤
井
荒
物
店

岡山彌井原町下町

新調
修理
品靴
運動製
各學校指定靴
附屬品一切

福
原
製
靴
店

備中井原下町

酒類商
青物

藤
井
丈
平
商
店

井
原
町

御料理
壽司

伏 幹 食 堂

井原驛前

和洋
料理

湯 野 屋

店主 徳永光平

岡山縣井原町
電話二二四番

提灯皮火袋
傘原料一切卸
ギフ提灯

寺 地 謹 一 商 店

(號) ヤマキ
備中後月郡井原下町

高級
染 京
各種洗
生地ゆし



京都 特約店

三宅京染店

店主 三宅陸一
岡山縣後月郡井原町

御辨
壽司
當

三輪食堂

井原驛前
電話一五二番

牛馬豚
し
肉肉肉

杉原精肉店

備中井原町中町

表襖
装

關源堂

井原町本町

綿木綿
小倉服地
製造業

鳥越綿布工場

岡山縣後月郡出部村
電話井原三九番

輸出綿布
廣巾小倉
服地製造

今佐藤織物工場

岡山縣後月郡出部
電話(井原)一五四番

綿蚊帳地
小倉服地
製造

備南織物工場

岡山縣後月郡西江原町
電信略號(〇七)
電話(井原)三〇二番

岡山縣後月郡西江原町

備備中織物合資會社

電話井原二一〇番

昭和十年四月十二日印刷納本
昭和十年四月十七日發行

(非賣品)

編輯兼
發行人

大西儀

助

印刷人

柳本喬

祐

印刷所

岡山縣後月郡井原町千八百七番地
合資會社柳本商店印刷部

發行所 井原商工會

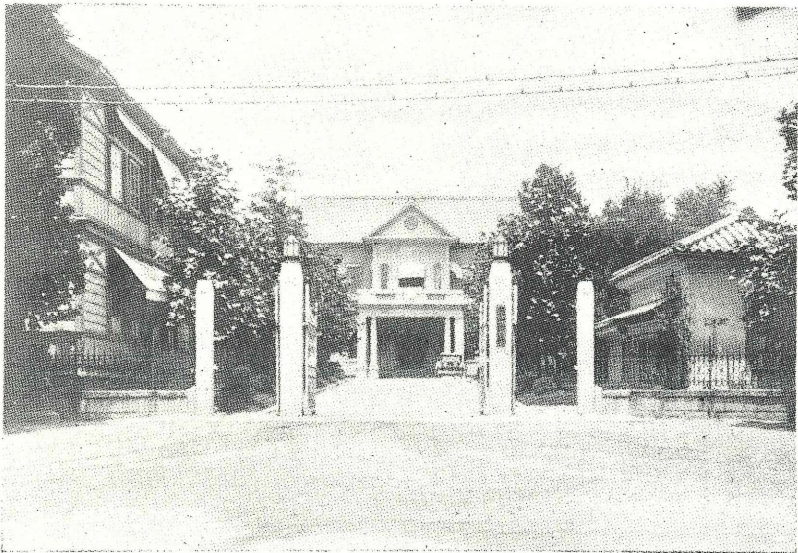
產物要重縣山岡

誌合組業同

岡山縣重要物產同業組合誌

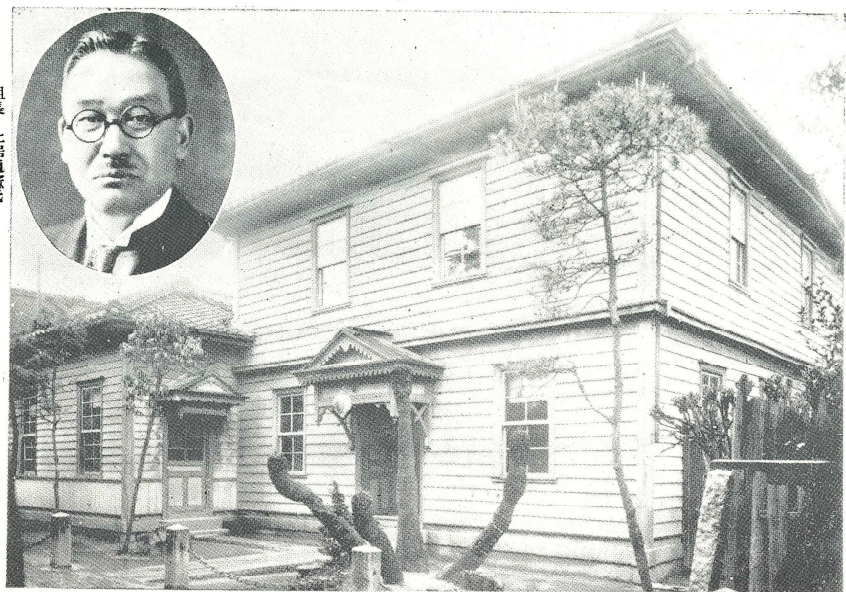
岡山縣重要物產同業組合聯合會

岡山縣知事香坂昌康閣下



縣廳正門

組長 土居通憲氏



岡山縣花蓮業組合事務所



所務事合組業同草間縣山岡



組長 西村丹治郎氏

所務事合組業同田真縣山岡

組長 小川郷太郎氏

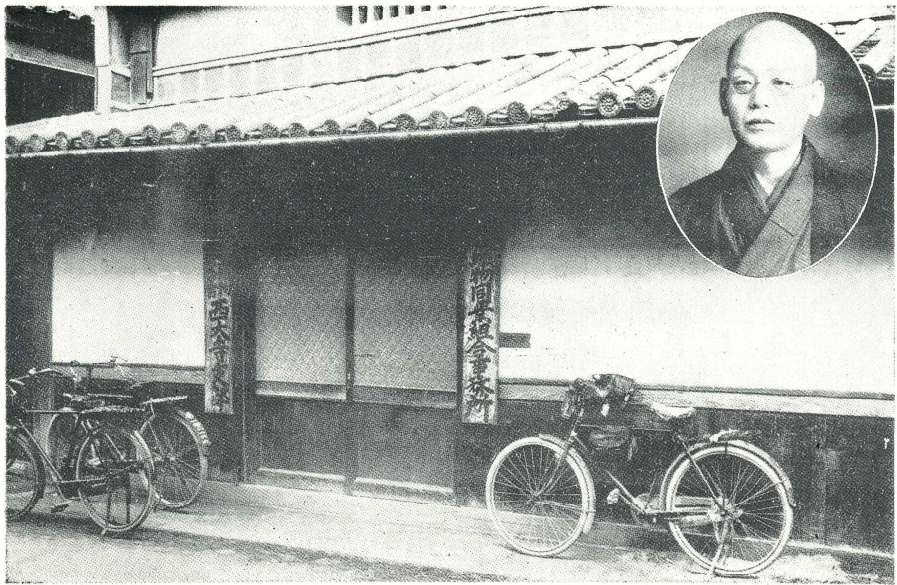


中備素麵同業組合事務所

組長
尾崎東吾氏



所務事合組業同物織前備

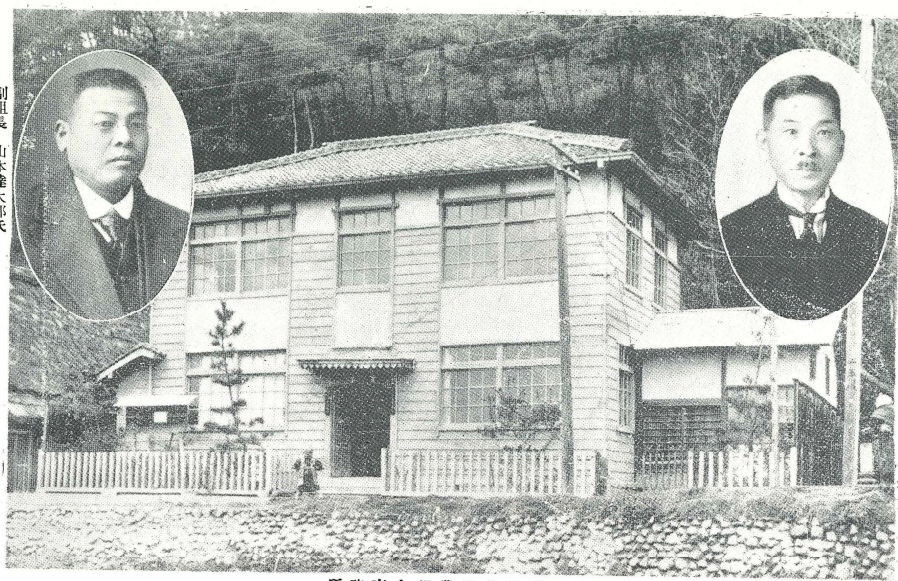


組長 小橋 三衛氏

所務事合組業同物織道上久邑

副組長 山本達太郎氏

組長 大塚笹一氏



所務事合組業同物機備中

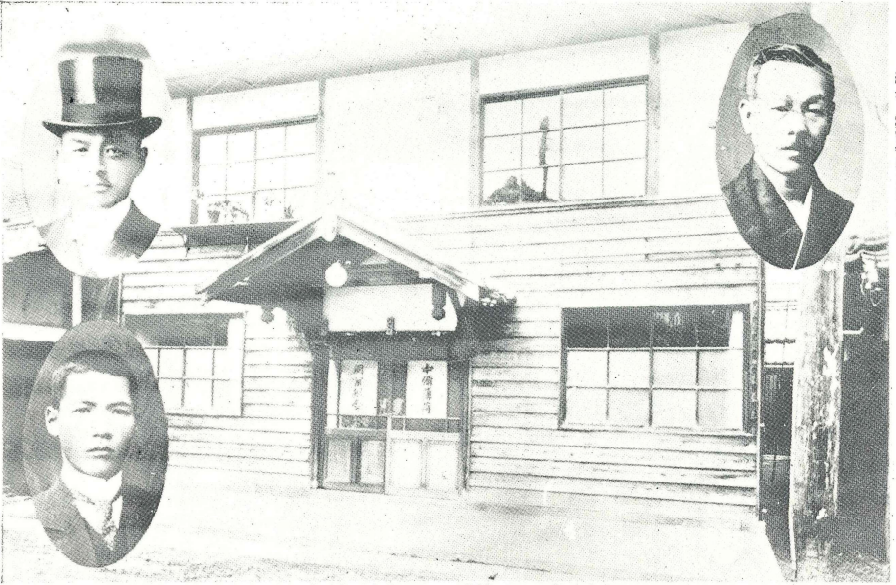
組長 齋師寺清三郎氏



副組長 松枝四方吉氏

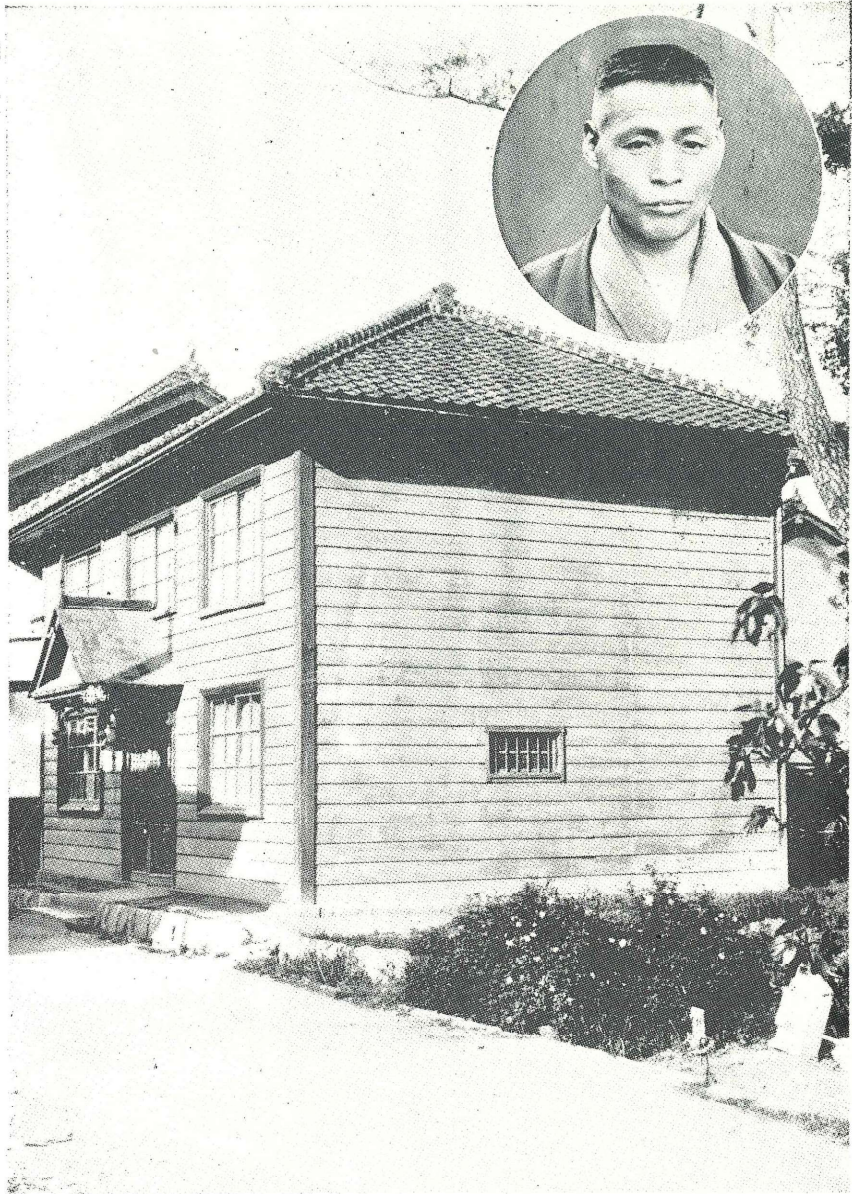


理事 石川義一氏



中 備 簿 同 業 組 合

氏市郎治井川 長組



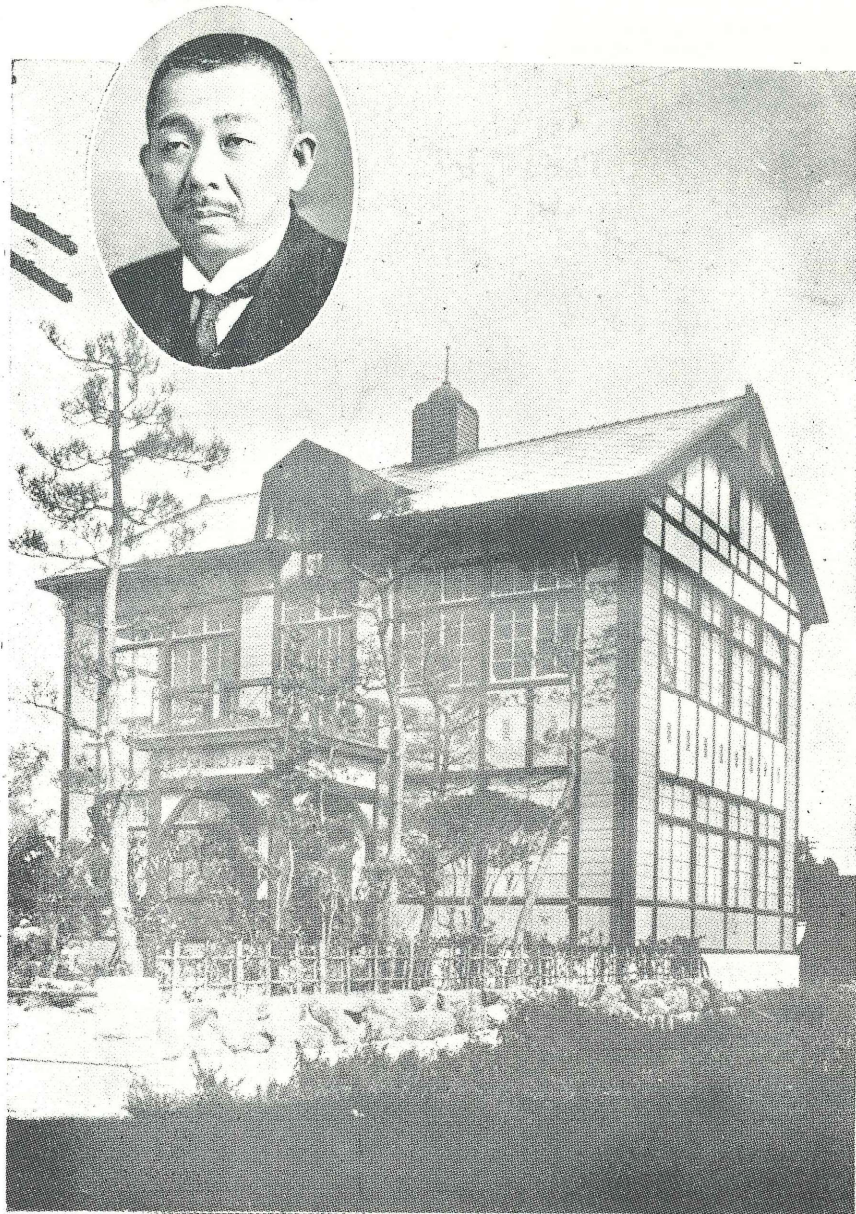
所務事合組業同荷薄月後田小

組長 岡繁藏氏



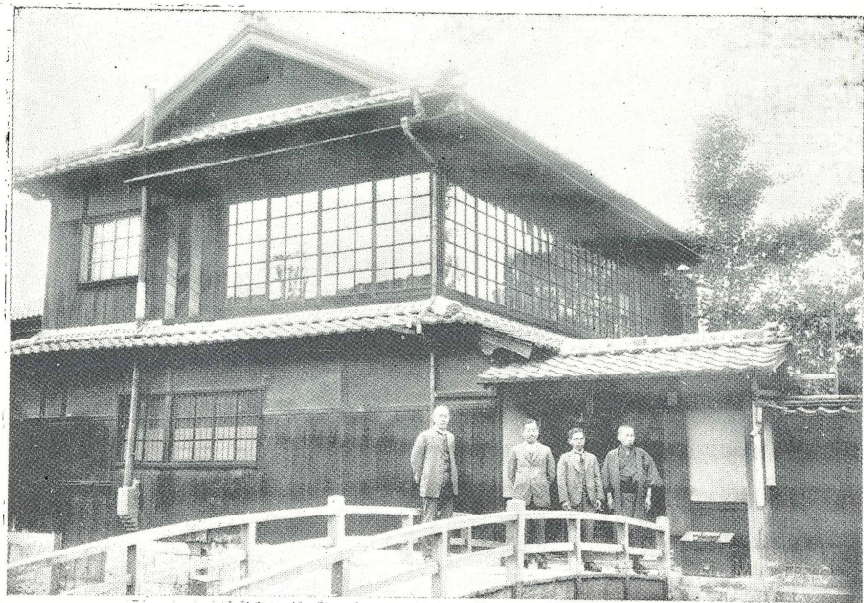
備前薄荷同業組合事務所

氏郎太郷川小 長組



所務事合組業同料肥備両

岡山縣足袋同業組合事務所

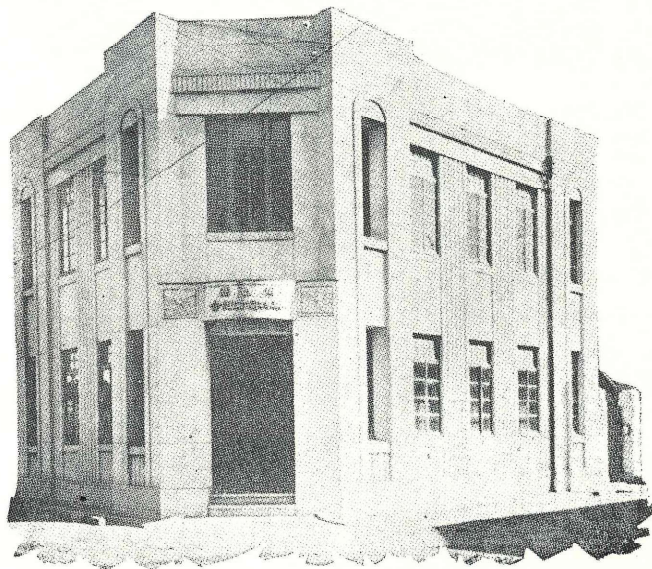




氏 郎 三 祐 末 國 事理



合組業同物果縣山岡
氏 次 恒 江 松 長 組

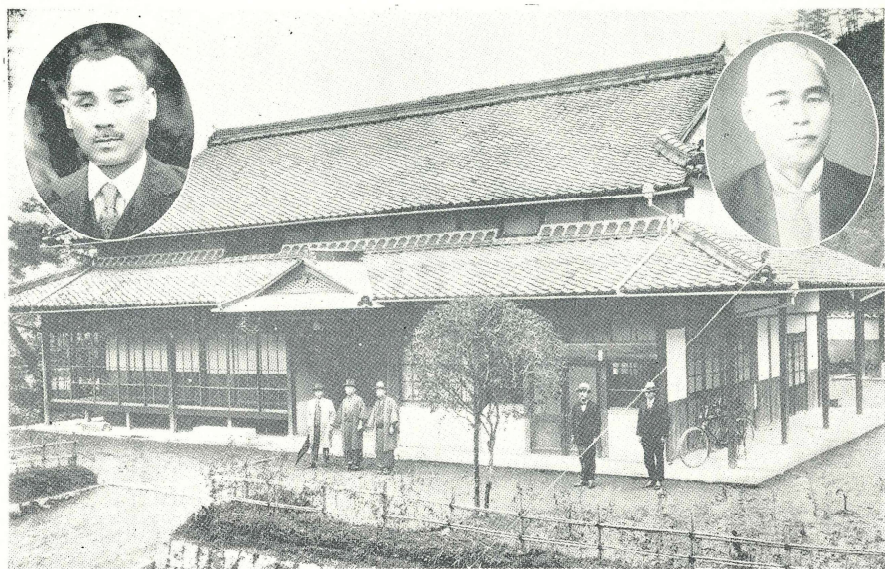


所務事合組業同物果縣山岡

組長 那須森太郎氏



副組長 三宅美津太郎氏



岡山縣菊野同業組合事務所

氏郎太馬藤岩 長組



所務事合組業同種蠶縣山岡

右の通り被仰渡一同難有承知奉畏候依て御請印形差上申所如件

萬延元年八月

拜 借 人 連 署
村 役 人 加 印

江 原 役 所

其後幾多の變遷を経て明治初年迄は猶手紡ぎ糸を使用せしが明治十五、六年頃より唐糸と稱する舶來糸を使用し製織に従事せしが明治二十年頃より内地各地に紡績會社の設立を見るに至て原料綿糸の供給豊富なるに従ひ、手紡糸は全く蔭を沒し會社製の紡績糸を以て白木綿、織色木綿、綿ネール、辨慶縞、蒲團縞等の製織をなし、玆に製品に一新紀元を劃するに至れり。然れども染色及意匠等未だ幼稚にして産額亦微々たるを以て未だ市場に認めらるゝに至らざりき其の後、日清、日露の兩戰役を経て我財界の膨張と共に需用頓に増加せるを以て營業者互に研鑽を積み精を盡し長足の進歩を來せり、而して明治二十七年頃より「バツタン」式と稱する織機を使用せしが明治四十年頃より足踏織機を使用するに至れり、營業者も其當時は個人營業にして五、六台若くは十數台の織機を有する位にして多くは出し機組織なりき、然るに明治四十一、二年頃より「バツタン」式又は足踏機にては到底統一せる製品を產出すること能はず、又能率の増進を期すること不可能なるを以て此頃より動力織機を据付くるもの漸く多くなれり、併し未だ營業者財力に於て小資本家多く個人經營にては多額の固定資本を要する動力織機を据付くる事能はざるを以て多くは合

名、合資若くは株式等の會社組織となし産額も著しく増加せり。

大正六年同業者相謀り同業組合を設立し検査員をして毎反に亘り染色及丈巾の織樣等に嚴密なる検査を勵行し、合格、不合格に分ちて粗製濫造を防遏すると同時に益々品質の改善と販路の擴張を圖りしが備中織物の聲價益々高く今や盛に綿小倉、綿蚊帳地、綿織色の製織に努め、今や内地は勿論海外までも備中織物の名聲大に喧傳せらるゝの盛況を呈するに至れり。織色木綿は明治維新前より地方農家の副業として手紡糸を染めて手織機にて製造し仲買人各戸につき之を買ひ集めて笠岡木綿問屋に販賣したるものなり、明治十五、六年頃より機屋なるもの起り唐糸と稱する舶來糸を使用し手織機を据付け又は出し機組織にて製造せしも産額僅少なりしが明治四十一、二年頃より動力織機を据付くる工場相續て起り、産額増加と共に名聲大に舉り殊に大正四年より同八年頃までは歐洲戰亂の好影響を受け大量の註文關東方面及び九州地方より陸續として殺到し大多數の製品も易々と消化し盡され、猶註文に追はるゝの狀態にて之が製造工場も一時非常に増加したるも大正九年財界の大打撃に依り基礎の薄弱なる新設工場は相續き倒産廢業の止むなきに至り、今や堅實なる經營の下にある會社工場に漸く不況を打開して事業を繼續し居れり。

綿蚊帳地は明治二十二年頃後月郡西江原町藤井桂太郎氏初めて之を製造せり、當時の製法は經糸を手紡糸緯糸に紡績糸を用ひ藍にて下染し「ズミ」皮にて上掛し蒨黃に近き色を染め手織機にて小額を製造し岡山地方へ販出したるを備中蚊帳の初となす、其の後經緯共に紡績糸を用ふるに至り、明治三十七年頃より染色を改良し完全なる蒨黃染となし盛に四國、九州地方へ販出し明治四十年頃より益々發達し、四十三年頃より動力織機を据付くるに至り、産額亦倍蓰し各方面に於て備中蚊帳の聲價を認めらるゝに至れり、備中蚊帳は素と糸染手糊にて織卸の儘仕立てたるを特長と

せしが時代の要求は斯る原始的製品たるを許さず、大正十二年當業者相謀りて蚊帳地専門の整理會社を設立し完全に整理加工したる製品を供給するに至り近時備中蚊帳の聲價をして一段と高めしめたり。

小倉洋服地は明治三十四、五年頃後月郡木之子村東森茂太郎、小田郡笠岡町大塚尙一兩氏共同にて職工用淺黃洋服地を製造し吳地方へ販出したるを嚆矢とす、而して當時の生産高は甚だ僅少にして販路亦狹少なりしが、明治三十七八年日露戰役に際し需要激增し其の後多少の頓挫ありしが四十一年後月郡木之子村東森嘉作、大塚尙一氏經營の下に吉備織物合資會社を創立し廣巾動力織機を据付け盛に縞小倉、紺小倉、霜降小倉等の洋服地を製造し九州大阪地方へ販路を擴張したり、其の後西江原町榎井瀧右衛門、渡邊兵吉、木之子村石井福藏の諸氏（後に山陽織物合資會社を創立す）小田郡小田町に三和織物會社（後に三善織物會社と改稱す）等相次ぎて製造を開始せしが、大正三年は財界不況にて一時産額大に減少せしが翌四年より歐洲戰亂の餘波を受け海外輸出漸く盛となり内地の財界亦好轉し、各工場共染色に品質に益々改良進歩に意を注ぎ工場を擴張し生産の増加を圖り又新設の會社工場等陸續として起れり、大正五年山陽織物合資會社は他に率先して當時最も進歩せし豊田式廣巾動力織機を据付け、爾後新設工場も既設工場も皆之に倣ひ今や地區内廣巾織機は殆ど豊田式となるに至り統一せし優良品の製織盛となれり、大正五年より同八年迄は歐洲戰亂の影響を受け、濠洲、印度、南洋、支那方面に於いて歐洲よりの輸入全く杜絶し我が小倉織の供給を切望して止まざるの時に際し輸向小倉服地の全盛時代を現出し、各工場共晝夜兼行の全能率を以て製織に全力を傾注するも需用の幾部を充たすに過ぎざるを以て急場の間に合はせには手織機も相當殘存し動力、手織共併用し盛に製織したり。

大正九年の財界大動亂にはさしも全盛を諒はれし小倉服地も大に打撃を受け殆ど火の消えたる姿なりしも己に數年の好況に基礎の確立せし會社工場は最も慎重の態度を以て此際多く染色品質の改善とに専ら腐心し、技術の方面は益々進歩し以て來るべき財界回復の時に備へて依て優良なる製品と能率の増進とは反て此間に養はれ、其の後小倉服地「ドビー」物ジャガー織格子物等斬新なる製品を產出するに至れり、猶最近に「レーヨン」應用の製品を研究製織するに至り我小倉界も製品に於て實に革命期ともなり、打續く財界の不況に善處して事業を經營し専ら品質の改善と能率の増進とに全力を傾注せり。

織機は明治二十六年頃迄は普通高機と稱する手織機を使用せしが二十七年頃より「バツタン」式と稱する織機を用ひ明治四十年頃より足踏織機を用ふるもの漸く多くなれり、明治四十一、二年頃より動力織機を据付くるもの漸次多かりしも小倉織は廣巾「バツタン」式の手織機を用ひたりしが明治四十四年頃より動力織機を据付くるものありしも「バツタン」式の手織機と併合せしが大正七、八年頃より廣巾、小巾共全部動力織機となり、手織機は全く廢止せらるゝに至れり。

而して小巾動力機は最初多く重政式を用ひ、廣巾は橋本式等を使用せしが後小巾、廣巾共に多く豊田式を使用するに至れり。

染色は元來正藍を使用し多くは分業となり紺糸は紺染業者に他の色系は色染業者に托し染色をなしたり、明治三十八年頃より紺黒染共に硫化染料を使用し淺黃色は「インデゴビュアー」を使用して染色するに至り、其の他の色素は硫化染料又は直接染料鹽基性染料等を使用したり、而して動力織機を使用して大量生産をなすに至り、機業家皆各

自染色場を設け染色と製織とは殆ど兼営となるに至れり、大正三年歐洲戰亂勃發以來硫化其の他の舶來染料は全く輸入杜絶し、漸次舶來染料の品拂底と共に價格亦暴騰し遂に戰前の數十倍の價格となるに至れり、機業家の困難名狀すべからざるものあるに至れり、此に於て大正四年頃より一時影を潜めし日本藍は盛に栽培し織色等は日本藍を用ひて染色し又硫化染料其の他の染料も盛に内地にて製造せらるゝに至り舶來品の拂底と共に各機業家は不完全なる内地品を使用せらるゝに至れり、其の後戰亂の終局と共に又海外より輸入せらるゝに至り日本藍は又々栽培を中止せしも硫化其の他の染料は内地としても漸次研鑽を重ね今は輸入品内地品を併用するに至れり、猶近來は「バット」屬其の他新に進歩したる染料續々輸入せられ染色界又一大革命期日の到來せしが如き觀あり。

織物界に於ける動力使用は創業の舊きものは概ね蒸汽機關、石油發動機、水力等を應用せしが明治四十三、四年頃より吸入瓦斯發動機を使用するもの最も多く本組合内の動力も一時全部吸入瓦斯機關を使用せし觀ありしが大正十年頃より最も進歩したる電力を使用するに至り今日にては殆ど電力に變更せり。

本組合に於ける織物產出の地區及種類の主なるものを舉ぐれば左の如し

後月郡 西江原町地方は小倉洋服地、織色木綿、蚊帳地

全郡 木之子村、荏原村地方は小倉洋服地

小田郡 笠岡町地方は小倉洋服地、織色木綿

全郡 小田町地方は「モスリン」生地

□ 取引の變遷

販路の變遷

織色木綿は當初地方に仲買人なるものありて農家の副業に製造せし品を買求め之を笠岡の間屋に販出し、間屋は多く九州通ひの和船にて九州地方に持下り販賣せしが後には買集めたる品を註文に應じ汽船汽車等にて積出すに至れり其の後製造が副業より機業家の手に移るに及びては仲買人を經由せず直に間屋に卸す様なりしも漸次生産の増加と競争の激甚を加ふるに及び製造業者は間屋の手を経ず直に全国各地に直接販賣するに至れり、而して歐洲戰亂以前は主として九州、四國、中國地方及び北海道、山陰の一小部分に限定せられしが歐亂勃發以來大阪、尾州、九州等より問屋筋盛に入り込み大口なる註文をなし一、二ヶ月乃至四、五ヶ月先約をなし全盛を極むるに至りしも大正九年財界動亂以後は大阪、尾州方面の註文大に減退し今日にては此の方面の註文殆ど杜絶の有様となれり。

蚊帳地は最初産額最も僅少にして多くは仕立となし岡山地方の古着屋等へ概ね行商人の手を経て販賣せしも産額の増加と共に漸次縣下一圓に及び尙四國、九州、播州等へ販賣せしが歐洲戰亂當時より産額の増加と共に大阪を初め奈良其の他全国各地に生地の大口に販出せらるゝに至り今日にては仕立生地相半して全國に販路を有するに至れり。

小倉服地は初め淺黄小倉、職工服地を製造し吳の間屋に販賣せしを嚆矢とし其の後霜降小倉、縞小倉、紺小倉等を製造するに至り、多くは大阪の一、二の間屋及び九州地方の製造家へ直接販賣せしが漸次製造家の増加と共に大阪等の間屋も増加するに至り、時代は小倉服地の需用益々増加するに至り恰も歐洲戰亂の勃發と共に濠洲輸出を初め南洋

印度、支那等へ輸出せらるゝに至れり、輸出品は多く大阪商人又は神戸の輸出商人が外人の仕入店に販賣し一時は輸出全盛時代を現出せしが大正九年の財界動亂後輸出の減退と共に一時産額も減少せしが又々内地に力を注ぎ今や内地販賣も多くは大阪商人の手を経て取引せらるゝに至れり。

販賣方法は地方に問屋なるものあり最初に仲買人又は行商人の手を経て各地へ販出せしが今や各製造家は各得意を求めて各販賣地へ直接販出せり。

三 品目別生産數量及價額

大正七年以降昭和三年迄の生産數量及價額を示せば左の如し

種別	年度		大正七年		大正八年		大正九年度	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
内地向 小巾織物	七五、七三七	一、二七、〇四、二二三	七五、二、一七五	一、七四四、四七、七三五	二〇八、三三五	五、〇七、七、三五六		
内地向 廣巾織物	七、五三七	八二、〇三、〇六四	三八、四一八	八七、一〇三、四五五	一〇、一八八	二、五六、六九四、三〇〇		
輸出向 廣巾織物	廣小 六、一八〇 七五、二四	一九、四八七、九六〇 二、九四一、四二二	一三、〇五〇 一〇三、一九二	五〇、八五三、二五〇 二、九七、八九三、五八〇	廣 一一、二三二	三、四、四四九、五八八		
合 計	八四〇、六六八	一、四二、四八三、八三七	九〇六、八三五	五、六七〇、二七八、〇一〇	二三〇、六四四	一、〇九八、八七二、二四四		

種別	數量	價額	年度	
			大正	昭和
内地向	小巾織物	七三三、三三三	一、〇九七、八四〇、九五五	一、三〇九、〇八三
内地向	廣巾織物	二七、七五四	四八、〇八一、二七	五、八六六
輸出向	廣巾織物	三八、九七六	一、〇八四、五八四、九七八	四〇、七七三
合 計		八〇、一〇、八三	二、六三三、六七一、二二〇	一、四〇三、六九二
			大正十一年度	昭和十一年度
内地向	小巾織物	七三三、三三三	一、〇九七、八四〇、九五五	一、三〇九、〇八三
内地向	廣巾織物	二七、七五四	四八、〇八一、二七	五、八六六
輸出向	廣巾織物	三八、九七六	一、〇八四、五八四、九七八	四〇、七七三
合 計		八〇、一〇、八三	二、六三三、六七一、二二〇	一、四〇三、六九二

種別	數量	價額	年度	
			大正	昭和
内地向	小巾織物	一、一八四、九三三	一、二五九、六三一、六三三	六九一、九〇七
内地向	廣巾織物	九三、〇三三	一、四七五、一五五、三六	八九、八六六
輸出向	廣巾織物	三〇、九四七	七五九、二三八、九五〇	三、七五五、六四三、九
合 計		一、三〇八、八九三	三、四九四、〇三五、九〇九	一、〇二一、四六〇、九
			大正十三年度	昭和十三年度
内地向	小巾織物	一、一八四、九三三	一、二五九、六三一、六三三	六九一、九〇七
内地向	廣巾織物	九三、〇三三	一、四七五、一五五、三六	八九、八六六
輸出向	廣巾織物	三〇、九四七	七五九、二三八、九五〇	三、七五五、六四三、九
合 計		一、三〇八、八九三	三、四九四、〇三五、九〇九	一、〇二一、四六〇、九

種別	數量	價額	年度	
			大正	昭和
内地向	小巾織物	八二六、八七七	六三三、六八八、六八七	八五八、三五九
内地向	廣巾織物	六、〇七七、〇九五、九	二、八三五、七九七、七二	六、六三九、五九九、九
輸出向	廣巾織物	一、八七三、九七、九	七、七四、八七一、〇〇〇	一、八六一、九二〇、九
合 計		七、九五一、〇六五、九	四、二四三、二九七、四七九	八、五八一、三五九、九
			昭和十一年度	昭和十一年度
内地向	小巾織物	八二六、八七七	六三三、六八八、六八七	八五八、三五九
内地向	廣巾織物	六、〇七七、〇九五、九	二、八三五、七九七、七二	六、六三九、五九九、九
輸出向	廣巾織物	一、八七三、九七、九	七、七四、八七一、〇〇〇	一、八六一、九二〇、九
合 計		七、九五一、〇六五、九	四、二四三、二九七、四七九	八、五八一、三五九、九

四 組合の事業

イ 検査

A 検査方法の變遷

検査は本組合定款第六十二條（本組合員ノ製造ニ係ル織物ハ検査後ニアラザレバ販賣スルコトヲ得ズ 但シ白木綿白天竺木綿白綿ネール並ニ帶地以外ノ一丈未満ノ織物ハ別ニ組合會ノ決議ヲ經テ規定スル場合ノ外本條ノ限リニアラズ）に依リ毎反に付嚴密なる検査を行ひ未だ再検査をなしたることなし、大正八年より日本輸出綿織物同業組合聯合會に加入し輸出品の検査を毎反に涉リ同會検査規定に基き嚴密に執行せり。

B 規格等級の變遷

本組合製品検査の結果左記の通り區別せり

合格 等外合格 不合格

輸出検査に在りては日本輸出綿織物同業組合聯合會の規定に基き検査の結果左の通り區別せり

合格 等外合格 不合格（裁斷）

ロ 其他の事業

本組合に於ては殊に染色、機織の爲めに講師を聘し講習會を開催し組合員相互の研究に資する外各地に視察員を派遣して織物の研究並に販路の擴張等を行へり。

イ 經費徵收方法の變遷

口 經 費 總 額

組合創立以來の經費總額を示せば左の如し

[illegible]

八 事 業 費

組合創立以來の事業費を内譯すれば左の如し

項 目	年 度		大 正 七 年 度	大 正 八 年 度	大 正 九 年 度 三 月	大 正 九 年 度	大 正 十 年 度	大 正 十 一 年 度	大 正 十 二 年 度	大 正 十 三 年 度	大 正 十 四 年 度	大 正 十 五 年 度 昭 和 元 年	昭 和 二 年 度
第一項 檢 査 費			四四、二〇〇	一〇六、七〇〇	五七、一三〇	一三三、四九四	一〇一、四八〇	一〇二、一八〇	一九八、二〇〇	一三八、一四八	一五〇、〇八〇	一五四三、五三〇	一八三、一三〇
第一目 俸 給			三〇、〇〇〇	六二、四〇〇	二五八、〇〇〇	一〇六、〇〇〇	一〇六、〇〇〇	一〇七、八〇〇	一五七、六四〇	一八六、〇九〇	一九〇、〇〇〇	一三〇、〇〇〇	五三、〇〇〇
第二目 雜 給			三、五〇〇	一三、〇〇〇	三二、〇〇〇	一五四、四〇〇	九四、八〇〇	二九、四〇〇	二三、九〇〇	九五、七〇〇	九一、三〇〇	六〇、〇〇〇	五、四〇〇
第三目 手 當					七二、〇〇〇	五三四、〇〇〇	五三四、〇〇〇	四五四、〇〇〇					
第四目 旅 費			六、七〇〇	九、三二〇	二二、四三〇	四八、五四〇	六八、〇九〇	一五、四三〇	六、八〇〇	一五一、七二〇	一九、五〇〇	七二、三〇〇	三三、九〇〇
第五目 賞 與				五、〇〇〇	三三、五〇〇	一五〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	六、〇〇〇
第六目 被服費			五五、〇〇〇	一三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	一八〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	一四五、〇〇〇	一四、七〇〇	一九五、八七〇	二〇〇、〇〇〇		五〇、〇〇〇
第二項 獎 勵 費				二、八〇〇		五九、四三〇	一〇、六四〇	一八九、一〇〇	一四六、六〇〇	七、四三〇	二八、二〇〇		
第一目 表 彰 費				二、八〇〇		五九、四三〇	一〇、六四〇	一八九、一〇〇	一四六、六〇〇	七、四三〇	二八、二〇〇		
第二目 講習講話費													
第三項 退職給與金												一一〇、〇〇〇	
第一目 退職給與金												一一〇、〇〇〇	
第四項 販路擴張費				二、〇〇〇	一〇、四〇〇	一三、五〇〇	二七、〇〇〇	九〇、〇六〇	八〇、五三〇	二六、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	八九、〇〇〇
第一目 視 察 費						四〇、〇〇〇							八〇、〇〇〇
第二目 廣 告 費				二、〇〇〇	一〇、四〇〇	九三、五〇〇	二七、〇〇〇	三二、〇六〇	八〇、五三〇	一六、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一一、〇〇〇	九、〇〇〇
第五項 試驗調查費													一六五、〇〇〇
第一目 試 驗 費													一六五、〇〇〇
第二目 調 査 費													一六五、〇〇〇
第六項 諸 會 費													二八、八五〇
第一目 出 品 費				二〇〇、四〇〇	八三、七三〇	八三、一九〇	六四、一九〇	三七六、八四〇		九、七五〇	一四八、一九〇	五七、一五〇	二八、八五〇
第七項 需 用 費			一七、七五〇	三〇六、七〇〇	二七四、六九〇	三三〇、一八〇	四七三、四六〇	四二二、一七〇	二七九、一九〇	九五、四四〇	一三一、一五〇	一一〇、七〇〇	六三、四五〇

第一目 備品費	七、〇〇〇	一〇、五〇〇	二〇、八〇〇	六、八五〇	七、九四〇	六、二〇〇	八、四〇〇	二五、一八〇	四九、三四〇	九、二五〇	三、三〇〇
第二目 消耗品費	二、七二〇	一六、九〇〇	一九九七〇	九〇〇〇	一五、三〇〇	二、六〇〇	七、六〇〇	六、一〇〇	三、三〇〇	六、四三〇	二、五〇〇
第三目 圖書印刷費	八八、五二〇	一三〇、二五〇	一三、三七〇	二五九、八五〇	三五四、一七〇	三三〇、一七〇	二六、四〇〇	二五〇、八五〇	五、四〇〇	八〇、九〇〇	二七、八〇〇
第四目 通信運搬費	二、五二五	六、〇〇〇	二、五五〇	四八〇	一五、一八〇	一九、〇五〇	七、九〇〇	二〇、四八〇	九、八〇〇	五、二八〇	五、四三〇
第五目 雜費	—	三、九〇〇	—	—	一〇、八七〇	五、一五〇	二、七〇〇	二、七三〇	二、三〇〇	八、九〇〇	六、四九〇

六 積立金並組合財産

本組合事務所建築の目的にて毎年經常費の剩餘金の幾部を繰入れたるもの五千參百八拾六圓八拾錢あり、組合長名義にして安田、藝備兩銀行に預入れ該証書を組長保管せり。

七 組合設立及斯業の功勞者並其事績

本組合内に於ける斯業の功勞者としては淺野富平、故大島德藏、大塚尙一、東森嘉作、故藤井桂太郎、横井瀧石衛門、青木幸太郎、川井治郎市諸氏の功績最も顯著なり左に其の事績の梗概を録さん。

淺野富平氏は先代より笠岡唯一の織物問屋として知られ地方名産の織色を仲買人製造業者等より買集め、九州地方に販出し大に基礎を築きしが先代歿後現代淺野氏能く父業を繼ぎ事業益々隆昌となれり、大正元年頃青木幸太郎、川井治郎市氏等と共に西江原町に淺野織物合資会社を設立し、動力織機を据付け自ら之が代表者となり盛に織色、蚊帳等を製造し製品は氏一手に引受け販賣せり、後會社は直接販賣するに至れり又大正六年荏原村に日本綿布株式會社を

設立し廣幅織機を据付け小倉服地を製造し氏は之が社長となり今日に至る猶組合設立に就ては初期の組長として大に地方織物の發展に盡瘁せり。

故大島徳藏氏は淺野氏より稍々遅れて織物問屋を開始し自ら稻荷丸と稱する船を持ち織色を買入れ直接九州地方へ持下り販賣し大に地方織物の販路を開拓したり、現代福松氏は父の業を繼ぎしが問屋業の到底將來見込なきを觀破し卒先して笠岡町に動力小巾織機を据付け盛に織色を製造販賣せしが後廣巾物に代り今や組合中最も新進の技術製造方を以て盛に嶄新なる製品を織出し輸出品として名聲を博せり。

大塚尙一氏は夙に備中小倉製造の元祖として知られ最初東森茂太郎氏と謀り淺黃小倉を製造し吳地方に販賣し後吉備織物合名會社を設立し盛に黒小倉、霜降小倉、縞小倉等を製造し大正元年頃までは備中小倉は同會社の獨斷工場なりしが其の後吉備織物會社解散し笠岡町に大塚織布株式會社を設立し之が社長として最も盛に經營し營業所を大阪市に染色整理工場を後月郡荏原村に設け事業日々隆運に向へり、又氏は織物組合副組長として斯界に盡瘁せり又大正十五年五月同町制三十五年祝賀に實業功勞者として同町より表彰せられたり。

東森嘉作氏は元織色の綿蚊帳等を盛に製造せしが後大塚尙一氏と吉備織物合名會社を創立し代表者として會社經營の衝に當りしが同會社解散後東森織物合資會社を設立し之が代表者として盛に小倉織の製造に従事せり、尙組合評議員代議員として大に斯業に貢獻し今回の御大典に際し地方饗饌を賜へり。

故藤井桂太郎氏は備中蚊帳を製造せし元祖にして最初岡山地方へ販賣し織色蚊帳と併せ製造せしが後山陽織物合資會社を設立し事務社員として會社を經營し盛に小倉織を製造し地方織物業に貢獻したる人なり。

横井瀧右衛門氏は舊くより織物業に従事せしが明治四十四年小倉織を開始し大正四年山陽織物合資會社を設立し代

表者として専ら會社經營の衝に當り地方に卒先して豊田式廣巾動力織機を据付優良品を製出したり、尙大正六年三月には岡山縣より囑託を受け支那、朝鮮に於ける織物業の視察をなし大に本縣織物の發展に貢獻したり、大正十五年今上陛下東宮に在せし頃本縣へ行啓あらせられし際特に同會社へ牧野侍從を御差遣あらせられたり、尙組合設立に關しては大に力を注ぎ初期副組長として組長を助け後組長に當選専ら地方織物業の爲めに盡瘁せり尙氏は今回の御大典に際し地方賜饌の光榮に浴せり。

青木幸太郎氏は元獨力織色木綿、綿蚊帳を製造せしが大正元年淺野織物合資會社を設立し、川井治郎市氏と協力會社經營に従事せしが後川井氏日本綿布會社を經營するに當り氏は専ら淺野會社を經營し堅實なる經營振りに綿蚊帳織色木綿製造として最も歴史ある工場にして斯界に重きをなし製品の優秀と得意先の堅實とを以て知られたり、又氏は近年蚊帳整理會社を設け専務として經營し斯界に一新面目を施したり又組合評議員代議員として盡瘁せり。

川井治郎市氏は元織色木綿、綿蚊帳を製造せしが後淺野織物合資會社を設立し専ら會社經營の衝に當り後、淺野會社の基礎確立するに至るや其の經營を青木氏に任じ氏は新に日本綿布株式會社を創立し専務取締役として重任を双肩に荷ひ専ら小倉織の製造に従事し卓越せる經營振りは社運隆々今日の盛大を致せり、又同社は大正十五年 東宮殿下本縣行啓の際牧野侍從御差遣の光榮に浴せり、又氏は組合設立に關しては最も盡力したる功勞者たり、今や代議員及日本輸出綿織物同業組合聯合會備中支部代表員として盡瘁せり、尙氏は今回の御大典に際し地方賜饌の光榮に浴せり。

八 職員優遇に關する施設

特に優遇に關する施設なし。

昭和五年十二月十日印刷
昭和五年十二月十五日發行

【非賣品】

岡山縣重要物產同業組合聯合會

岡山縣淺口郡黑崎村三〇四〇番地
印刷人 中 藤 廣 次

岡山縣淺口郡玉島町大字阿賀崎八四八番地
印刷所 玉 島 活 版 所

電話 二四八番

(復刻)

井原要覽
岡山県重要物産同業組合誌抜粹

昭和六十年八月八日

発行 井原商工会議所

井原市七日市町十三番地
電話②〇四二〇代

印刷 (資) 柳本商店

井原市井原町一、〇八七番地
電話②二四二二代